LIXIL eye

建築・まちづくりから生活文化を探求する情報誌［リクシル・アイ］

no. 11 June 2016

特集
1 | 新・生き続ける建築 | 佐藤功一
2 | 建築ソリューション | 八幡浜市立日土小学校
3 | まちづくりの今を見る | 伝統を継承しながら再生する日本橋のまちづくり

風景をデザインする　国内編

回廊のある憩いの広場

島根県出雲市

小野寺 康
Yasushi Onodera

一畑（いちばた）電鉄・出雲大社前駅に隣接して設けられたポケットパーク「縁結びスクエア」は、出雲大社の大遷宮（本殿遷座祭）に合わせた参道「神門通り」改修プロジェクトから派生した、いわばスピンオフ的な事業である。
一畑電鉄、出雲市、島根県による合同事業であり、観光客や地域住民のための小さな憩いの場として計画された。映画『RAILWAYS 49歳で電車の運転士になった男の物語』にも登場した一畑電鉄のオリジナル車両「デハニ50形」が駅構内に保存され、そのアプローチと多目的オープンスペースを木造回廊によって囲い込みながら「神門通り」に開いている。公衆トイレを回廊奥に隠しながら、小さな芝生の広場を囲うように深い軒とベンチを設置し、穏やかでくつろいだ雰囲気を演出した。隣接するのは一畑電鉄が運営するカフェ・レストランだ。
合同事業の境界線は、現地で子細に眺めてもおそらく分からない。完全に一体感を持った親しみやすいヒューマンスケールな空間となった。参道空間は一般に午前中か午後早めの時間がピークだが、実は夕暮れを過ぎた頃から「神門通り」も、そしてこの「縁結びスクエア」にも優しい明かりがともり始め、もう一つの表情を見せるのである。

プロジェクト概要
名称：縁結びスクエア
所在地：島根県出雲市大社町杵築南地内
主要用途：多目的広場、休憩所、トイレ
事業主体：一畑電鉄、出雲市、島根県
設計：小野寺康都市設計事務所（協力：WAO渡邉篤志建築設計事務所）
敷地面積：約500m^2
工期：2012.5–9

おのでら・やすし――都市設計家、エンジニア・アーキテクト、小野寺康都市設計事務所代表／1962年生まれ。1985年、東京工業大学工学部社会工学科卒業。1987年、同大学大学院社会工学専攻修士課程修了。アプル総合計画事務所を経て、1993年、小野寺康都市設計事務所設立。
主な作品：門司港レトロ地区環境整備[1992]、油津堀川運河整備事業[2008]、日向市駅駅前広場[2009]、姫路駅北駅前広場[2015]など。

左―木造回廊に照明がともり趣のある空間を演出する｜下左―国登録有形文化財・一畑電鉄出雲大社前駅舎に隣接し、駅に保存されているレトロな車両を見ることができる｜下中―隣接した施設との境界を感じさせない、一体となったつくり｜下右―回廊裏に公衆トイレを組み込み、出入り口は表からは見えない位置に配置した［提供4点とも：筆者］

June 2016 no.11

LIXIL eye ［リクシル・アイ］

CONTENTS

表紙写真：
八幡浜市立日土小学校
［撮影：フォワードストローク］

次号『LIXIL eye』no.12は、
2016年10月発行予定です。

『LIXIL eye』はバックナンバーを
インターネットでご覧いただけます。
http://archiscape.lixil.co.jp/lixil_eye

02 ［風景をデザインする　国内編］
回廊のある憩いの広場 ——— 小野寺 康

04 特集１｜新・生き続ける建築 —11
佐藤功一

04 ［本論］生活者の視点で建築・都市を捉えた建築家 ——— 米山 勇
08 ［作品］早稲田大学大隈記念講堂
市政会館および日比谷公会堂
滋賀県庁舎本館
14 ［年譜］略歴｜主な作品

15 特集２｜建築ソリューション｜保存・再生・継承へ｜— 11
八幡浜市立日土小学校

22 ［序論］戦後木造モダニズム建築としての八幡浜市立日土小学校の保存再生 ——— 曲田清維
24 ［座談会］新時代に挑戦した先駆者
木造モダニズム建築の資産と高度な教育施設の
機能が共存する八幡浜市立日土小学校。
——— 花田佳明｜和田耕一｜武智和臣｜古谷誠章
37 ［座談会後記］無級、無給、無休の建築士がひたすら実現した次世代を育む建築 ——— 古谷誠章

38 ［ARTIST at HOME］— 11
テキスタイルデザイナー・真木千秋さんの巻 ——— 中村好文

42 特集３｜まちづくりの今を見る — 11
伝統を継承しながら再生する日本橋のまちづくり

44 ［序論］日本橋川周辺に残る歴史的遺産を活かしたまちづくりに期待
—— かつてヴェネツィアと称された水辺空間 ——— 陣内秀信
47 ［コラム１］水辺を活かした兜町・茅場町のまちづくり ——— 高松 巌・阿部 彰
48 ［論考１］江戸の賑わいを現代に蘇らせた日本橋のまちづくり
—— 「日本橋再生計画」による都心型スマートシティ ——— 中原 修
53 ［コラム２］福徳神社と一体となった広場空間の誕生 —— 「福徳の森」のランドスケープデザイン ——— 榊原八朗
54 ［論考２］日本橋地域の再生を目指す地元パワー
—— 地元愛を育むまちづくりに挑む ——— 日本橋地域ルネッサンス100年計画委員会
57 ［コラム３］「熙代勝覧」複製絵巻を地下鉄コンコースに設置

58 ［素材を語る］
動く素材“水” ——— 三分一博志

60 ［TOPICS］
パブリックトイレにおけるダイバーシティ —— LGBT等性的マイノリティへの配慮について考える ——— 日野晶子

64 ［INFORMATION］
「LIXILビジネス情報サイト」のご案内
LIXILからのご案内｜ギャラリー+イベント｜LIXIL出版 新刊案内

68 ［新・建築家の往復書簡］— 11
人間が関わって文化のレベルを高める「第二の自然」にどこで会われましたか？
——— 西沢立衛｜長谷川逸子

LIXIL eye no.11
2016年6月20日発行

発行：株式会社 LIXIL
編集発行人：久保雅義
LIXILジャパンカンパニー
セールスプロモーション統括部
〒100-6007
東京都千代田区霞が関3-2-5
霞が関ビルディング7階
Tel：03-6273-3635
Fax：03-6273-3743
制作：株式会社森戸アソシエイツ
協力：フォンテルノ（02,42-57頁）
デザイン：松田洋一
印刷：竹田印刷株式会社

＊本誌記事の無断転載を禁じます
＊本文中の敬称は省略させていただきました

特集 1
新・生き続ける建築— 11

佐藤功一

Koichi Sato

明治43年、早稲田大学は理工科に私学初の建築学科本科を開設した。同大学の創設者・大隈重信は同郷の辰野金吾を介し、当時、宮内省内匠寮御用掛だった佐藤功一を迎え入れた。東洋建築史に伊東忠太、建築計画に岡田信一郎、建築構造に帝大大学院生の内藤多仲、そして西洋建築史など、他の主要な講座に佐藤を起用し、最強の布陣で建築学科の草創期を固めた。佐藤もこれに応え、心魂を傾けて建築教育に没頭し、後の村野藤吾、今井兼次、佐藤武夫らは、その薫陶を受けた。
大正7年に建築事務所を設立するが、建築家としての実力を発揮するのは関東大震災以降である。「どこまでも直線が通って、明暗のはっきりした“佐藤張り”と言われるデザインが質量ともに開花した」と評され、大正12年から昭和7年にあたる中期には目覚ましい活躍を見せた。昭和7年以降の後期に入ると、いち早く“都市美観”に注目し、早稲田大学大隈記念講堂や市政会館および日比谷公会堂などで、それを実践した。氏のプロポーションの美しさは群を抜いていたと言われている。
佐藤が建設した建築は、39年間で233件に上る。設計活動と建築教育を両立させ、プロフェッサー・アーキテクトとして活躍した佐藤功一。その根底にあったものは何だったのか。彼の設計姿勢を探った。

［所蔵：早稲田大学理工学術院創造理工学部建築学科］

特集 1［本論］

生活者の視点で建築・都市を捉えた建築家

米山 勇
Isamu Yoneyama

住宅を重視した“プロフェッサー・アーキテクト”

佐藤功一は明治11年［1878］7月2日、栃木県小金井市に生まれた。後に上京し、明治33年［1900］、東京帝国大学工科大学建築学科に入学する。帝大の同級生には、佐野利器、大熊喜邦、田辺淳吉［1］らの優れた人材がいた。彼らは卒業後も「どんぶり会」と名付けて集まり、家族ぐるみの親交を続けた［2］。明治36年［1903］、卒業と同時に三重県技師となり、津に赴任する。明治41年［1908］には宮内省内匠寮御用掛として入省するが、その年に依願免官。翌年、早稲田大学理工科建築学科本科創設の顧問だった辰野金吾［3］の推薦により、早稲田大学から在外研究員として欧米に渡る。明治43年［1910］に帰国した佐藤は、同年に開設された早稲田大学理工科建築学科本科の講師に就任、まもなく教授となる。この時、佐藤は33歳であったが、実質的には欧米留学前からすでに建築学科の創設を託されていた。
今でこそ、大学で教鞭を振るう建築家は少しも珍しくないが、当時は建築学科自体が貴重な時代であり、早稲田大学は私学として初めて建築学科を持つ大学となった。佐藤は、ジョサイア・コンドル［4］や辰野らと同様、黎明期の“プロフェッサー・アーキテクト”として活躍した。そして建築史から法規、計画、構造、製図、そして一般教養の英語に至るまで、20を超える講座を受け持った。なかでも、学科創設まもない大正2年［1913］から開設された「住宅建築」の講座は、日本での大学カリキュラムへのいち早い導入事例として特筆される。本稿は、建築家としての佐藤功一について記すことを旨としているが、その創造背景に彼の教育観、ことに住宅を重視した姿勢が通奏低音として流れていたことをまず確認しておきたい。

様式の引き寄せと“佐藤張り”

今井兼次によれば、建築家としての39年間に建設（設計ではない）された佐藤功一の作品は233件に及ぶという［5］。これは2ヵ月に1作のペースで地上に現れていったということであり、“多作の建築家”と言って差し支えないだろう。佐藤の活動期をおおまかに区分すれば、初期（明治36–大正12年）、中期（大正12–昭和7年）、後期（昭和7–16年）となろう。
初期の出発点は、東京帝国大学工科大学建築学科の卒業設計「A PHOTOGRAPHIC STUDIO（写真館）」である。早稲田大学で教鞭を振るうようになった佐藤は、今井が「台頭しつつあった新様式に対しては、『諸君！　ルネサンスの建築は諸君の考えるような冷たいものではない』と古典建築の美を力説した」［2］と述べるように、西洋建築様式の教育に向けた情熱が知られる。だが、卒業設計に様式的性格は薄く、むしろモダンで自由な佐藤の造形意欲を見ることができる。
帝大を卒業してから関東大震災直前までの初期は、佐藤が早稲田大学建築学科の草創に尽力した時期であり、「博士自身が建築教育に心魂を傾むけて子弟教育に没頭せられておられたから、作品を世に出す機会も比較的少なく、おもむろに創意を錬り、その学的蘊蓄を実社会の建築に適用せられていた程度であった」［6］。大正7年［1918］8月、小石川の自邸に建築事務所を開設するが、当時の所員はわずか2名。住居の一部を製図室としていたこともあり、この時期の作品は、震災後と比較し明らかに精彩を欠く。同世代の岡田信一郎［7］が様式に生き、殉じたように、西洋建築様式の呪縛はいまだ強く、佐藤もまた下野（しもつけ）新聞社［1922］のような古典主義の作品を手掛けていた時期である。
大正12年［1923］の関東大震災以降、設計依頼が急増し、佐藤は住居部分をすべて事務所に使って「白山匠房（はくさんたくみぼう）」と名付けた。以後の10年間（中期）は、盟友の佐野利器が「丸みや、膨らみの感じでなく、どこまでも直線が通って、角が立って、明暗がはっきりした佐藤張り」［8］と評したようなデザインが質量ともに開花した時期と言ってよいだろう。3層構成のアメリカ式オフィスビルの形式をとりながらピラスター（付け柱）を廃し、モダン化を図った三会堂［1927］、コリント式の列柱を円柱ではなく多角形断面とし、古典主義の原則を大胆に打ち破った日本勧業銀行有楽町支店［1928］と協和銀行芝支店［1930］、三会堂と同様に柱と壁を一体化させながら、最上階をペア・コラムの列柱として詩情豊かな陰影を建物に与えた名作・丸の内野村ビル（日清生命館（現・大手町野村ビル））［1932］など、様式の骨格を残しつつ徐々に解体しモダン化していく手法を、この時期の作品に見て取ることができる。また丸の内野村ビルとほぼ同時期に竣工した富山房［1932］は、書店ビルであることにちなんで本の背表紙を形態化したファサードがユニークであり、佐藤の自由な遊び心を顕著に体現している。

2つのオーディトリアム—“都市美観”の創造へ

中期の作品で最も重要なのは、2つのオーディトリアム、すなわち早稲田大学大隈記念講堂［1927］と市政会館および日比谷公会堂［1929］であろう。前者は建築音響学に基づく日本初のオーディトリアムであり、後者は東京の先駆的な公会堂として、長らく演劇・音楽・芸術文化の中心的舞台となった。そうした機能的役割のみならず、これら2つの建築は、佐藤功一がいち早く注目した“都市美観”の理念を実践した事例としても重要なのである。
大隈講堂は当初懸賞設計競技が行われ、前田健二郎・岡田捷五郎の案が1等に選ばれたが実施されず、懸賞委員の一人であった佐藤の指導の下、佐藤武夫が実施図面を担当することとなった。38mの高塔、3連のチューダー・アーチなど、ゴシック様式を基調としながら、重厚な壁面や軒回りのロンバルディア帯など、ロマネスク様式の性格を加味している。左右対称を打ち破った大胆な正面構成や大学校舎群の中央軸線からずらした配置など、ピクチャレスクな手

下野新聞社［1922］
ドリス式の大オーダーが並ぶ古典主義のオフィスビル。古典主義の列柱は本来円柱だが、角柱としているところに、“佐藤張り”の萌芽が見られる［所蔵：下野新聞社］

三会堂［1927］
柱を外観に露出することなく、また装飾を廃することにより、様式色を弱めている。ロンバルディア帯を思わせる軒下飾りや、建物の角を削りエントランスとする手法も佐藤好みである［出典：『佐藤功一博士』］

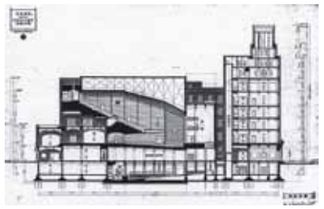
日清生命館（現・大手町野村ビル）［1932］
ルネサンス様式の骨格を残しながら、交差点に面する角に時計塔を、他の3つの角にも小尖塔を配し、ゴシック的垂直性を加味している。外壁のテラコッタや各部の装飾など、佐藤の作品の中でも特に質の高いもののひとつである。なお、この建物は改築に伴い、現在はファサードのみ保存されている［出典：『佐藤功一博士』］

早稲田大学キャンパスから見た大隈講堂［1927］
キャンパスの軸線に対して正対させず、斜めに振っている。動的な効果が目覚ましい［写真：筆者］

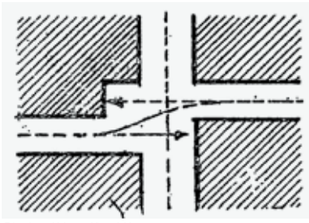
［1］『INAX REPORT』No.170.2007.4、p04–参照
［2］伊藤三千雄「佐藤功一——都市景観への視点」『日本の建築 明治大正昭和8 様式美の挽歌』［三省堂／1982］
［3］『LIXIL eye』no.5.2014.6、p04–参照
［4］『INAX REPORT』No.190.2012.4、p04–参照
［5］今井兼次「故佐藤功一博士の作品」『建築雑誌』1941.11
［6］今井兼次「佐藤功一先生と作品」『佐藤功一博士』［田辺泰・猪野勇一編、彰国社／1953］
［7］『LIXIL eye』no.6.2014.10、p04–参照
［8］池原義郎「佐藤功一——万古不易を求めて」『光跡—モダニズムを開花させた建築家たち』［新建築社／1995］

［撮影：フォワードストローク（特記は除く）］

早稲田大学出版部［1927］
隣接する大隈講堂と同じ年に同じ設計者によって建てられた［写真：筆者］

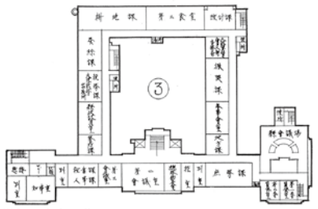


市政会館および日比谷公会堂断面図
コンペ案に比して、オーディトリアムの形状は空間全体が一体化するような構成になっている。佐藤武夫の建築音響学の成果による変更であろう［所蔵：日比谷公会堂］



「都市の美観に就て」第５図
［出典：佐藤功一「帝都復興と建築問題に関する講演会録―都市の美観に就て」］

日本勧業銀行本店（設計：渡邊節）［1929］
渡邊事務所の製図主任は早大時代に佐藤に学んだ村野藤吾であった。一方、施工を担当した清水組の技師長は、帝大時代の佐藤の同期で卒業後も極めて親交の深かった田辺淳吉であり、佐藤が日本勧業銀行本店の図面を事前に入手し、閲覧した可能性も考えられる［出典：『建築家 渡邊節』［社団法人大阪府建築士会／1969］］



滋賀県庁舎３階平面図
方位は図の上が南である。"寄せ廊下"の手法によって、主要な居室が南および東からの採光を実現していることが分かる［所蔵：滋賀県庁］

法が目覚ましく、建物全体が周囲の景観に動的に連続していく。

さらに重要なのは、大隈講堂と通りを隔てて建っていた早稲田大学出版部［1927］との関係である。外壁に張られた同質のタイルやテラコッタ、腰回りの石張りの素材的統一など、各部に見られる造形的統一などの点において、両者はデザイン上の連続性が明らかに意図されている。佐藤は、「長い街路が通つている場合には、横丁の有る毎に、様式を変化させても宜しい」とし「広場とか、街路の交差点」にはむしろ「変化を必要とする」と述べている［9］。大隈講堂と早大出版部は、細部の意匠や素材感に連続性を持たせながら、積極的に様式や高さなどに変化を与えることによって、ゴシック様式の高塔を持った大隈講堂と低層の早大出版部との対比を企図したものと考えられよう。つまり、複数の建築が生成する"都市美観"を志向・実践したものであると同時に、大隈講堂単体で表現した"高―低"の構成を、複数の建物がつくり出す風景に転移させたものと捉えることもできるのである。

一方、日比谷公会堂の設計競技は大正11年［1922］11月に行われ、佐藤が一等当選したが、地盤軟弱のためと建築認可の遅延などによって予想以上の時間を費やし、昭和4年［1929］10月19日に落成した。実施建物は当初の設計競技時とは別の敷地に建設され、意匠も大きく異なるものとなった。この変更について考える時、興味深いのは日比谷公会堂が面する交差点の形状である。突き当たりを持つ交差点の形状は、「都市の美観に就て」［10］で佐藤が提示する第5図、すなわち「街路の交叉すべき所、しかも其の交叉路の各が一直線をなし得ぬ場合」に合致する。そこで佐藤は「交通の支障さへなければ、そこに集る街路はこういふやうに喰違ひになる方が美観上に於ては却ってよい場合があるといふ事がいひ得らる>のであります。なぜかといふと各の街路からそのつき当りの美しい建築が望み得られるからであります」［10］と述べている。日比谷公会堂の主たるファサードが面する道路が突き当たる地点には、渡邊節［11］の設計によるルネサンス様式の重厚な日本勧業銀行本店が日比谷公会堂と同じ昭和4年［1929］に竣工している。水平性の強い日本勧業銀行本店を対面道路の突き当たりに持つ日比谷公会堂の設計に当たり、佐藤はそれとは対照的なゴシック様式の垂直的造形を投じ、両者のもたらすダイナミックな視覚効果を意図したのであろう。

大隈講堂、日比谷公会堂という2つのオーディトリアムで佐藤が企図したのは、多目的ホールがもたらす文化の近代化のみならず、複数の建築による都市美観を創造することであった。それは日本の都市認識において、官庁集中計画［1886-90］に象徴される明治期の俯瞰的な都市認識として、路上からの視点によるダイナミックな都市認識＝近代的都市認識への転換を先導するものであったと言えよう。

"住み良さ"の展開―住宅の延長としての学舎・庁舎建築

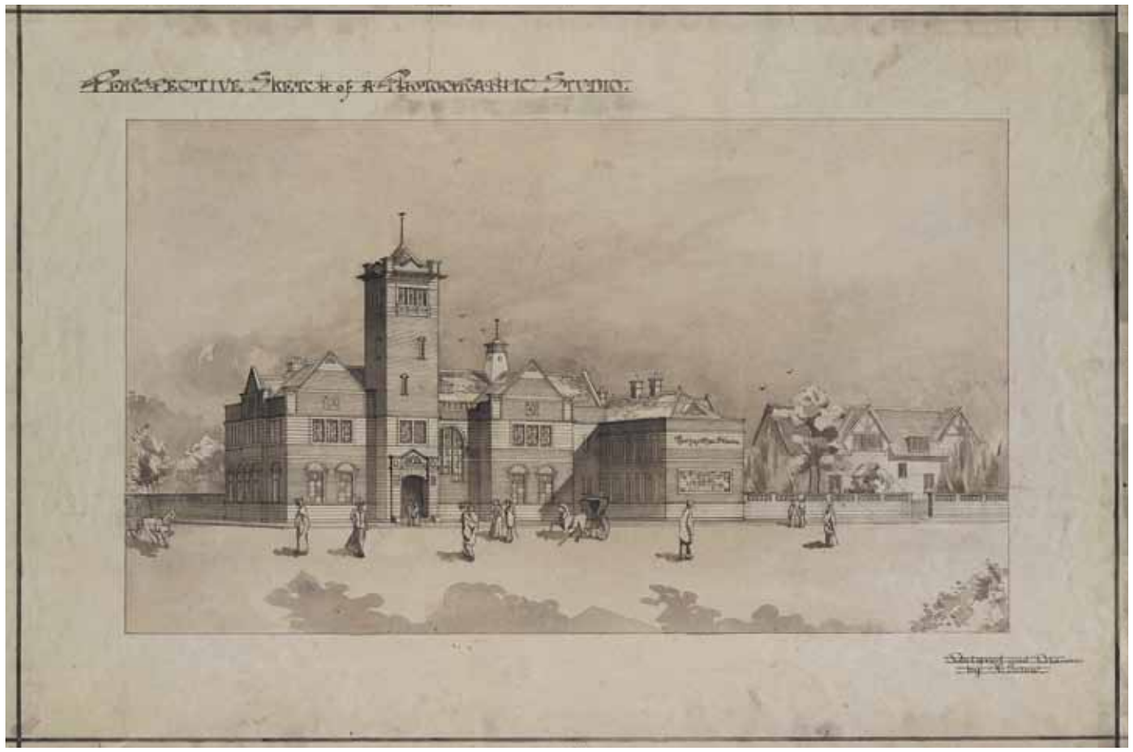
佐藤功一の創造活動において、昭和7年［1932］という年は、中期から後期への展開を告げる画期となった。この年、前述の丸の内野村ビルや富山房といった"佐藤張り"の佳品が世に出る一方、津田英学塾（現・津田塾大学本館（ハーツホン・ホール））［1932］が竣工し、全く新しい方法論が示される。

津田英学塾は、佐藤が得意としたルネサンス様式のモダン化を基調としながら、池原義郎も指摘するように、いわゆる「帝冠様式的処理が加えられた」［8］独特の外観が特徴的な建物だ。しかしここで重要なのは、外観よりも平面計画である。全体的な形状は一般的なコの字型だが、通常なら中庭を囲むように配される廊下が、北西に寄せられていることに注意しなければならない。明らかに各居室の採光を優先させた、"寄せ廊下"ともいうべき特異なプランである。

この手法は、その後も一連の庁舎建築にことごとく適用される。昭和初期の時点ですでに佐藤は群馬県庁舎（現・群馬県庁舎昭和庁舎）［1928］、宮城県庁舎［1931］を手掛けていたが、それらのプランは取り立てて言及すべき特徴を持つものではなかった。一方、昭和12年［1937］から14年にかけて、帝室林野局庁舎［1937］、栃木県庁舎（現・栃木県庁舎昭和館）［1938］、滋賀県庁舎（現・滋賀県庁舎本館）［1939］という3つの庁舎建築が相次いで竣工しているが、いずれも寄せ廊下が採用されている。

冒頭で述べたように、佐藤はいち早く"住宅"の重要性に注目し、建築教育のカリキュラムに取り入れた建築家であった。おそらく彼は、住環境における最重要な要素である"採光"への配慮をまず、自邸［1926］、反町茂作邸［1927］などの住宅作品で実践した後、学校建築である津田英学塾の設計に応用し、さらに晩年に至り、庁舎建築にまで導入したのだと考えられる。

伊藤三千雄が指摘するように、「建築は生活を支える科学であるという立場」によって、「建築の機能性、合理性を実証的に論じ（中略）様式芸術に固執する伝統的な狭い世界から一歩踏みだし、次の時代の幕開けを告げるプレリュード」［2］を奏した建築家こそ、佐藤功一であった。都市を歩く個人の視線を重視した"都市美観"の創造、建物内で執務する個人の"住み良さ"を再優先させた"寄せ廊下"のプラン。その根底に、住宅をすべての基調としながら、生活者の視点に立って建築・都市を創造しようとした佐藤功一の建築観があったことは言うまでもない。



佐藤功一卒業設計「A PHOTOGRAPHIC STUDIO（写真館）」［1903］
左右非対称の全体像に塔を象徴的に付加している。この手法は、シンメトリーを採用した佐野利器、松井清足、渡邊浚郎を除く他の同期卒業生たちの作品にも指摘されるものであり、特に佐藤特有のものではない。むしろ興味深いのは、様式的色合いの薄さとテーマ設定であろう。エントランス部分の幾何学化された装飾などには、当時最新のゼツェッシオンの影響を指摘することができる。また、切妻屋根を多用した素朴な作風からは、大建築への志向よりは小規模な住宅的特質を見ることもできる［所蔵：東京大学大学院工学系研究科建築学専攻］

よねやま・いさむ――建築史家・東京都江戸東京博物館研究員／1965年生まれ。1993年、早稲田大学大学院理工学研究科博士後期課程単位取得。博士（工学）。早稲田大学非常勤講師、日本女子大学非常勤講師などを経て、現職。
主な著書：『建築MAP京都』［共著、TOTO出版／1998］、『建築MAP横浜・鎌倉』［共著、TOTO出版／2002］、『痛快！ケンチク雑学王』［共著、彰国社／2004］、『日本近代建築大全 東日本篇・西日本篇』［講談社／2010］、『米山勇の名住宅観賞術』［TOTO出版／2011］、『けんちく体操』［共著、エクスナレッジ／2011］、『クイズでわかる近代建築100の知識』［共著、彰国社／2012］、『時代の地図で巡る東京建築マップ』［共著、エクスナレッジ／2013］など。

［9］ 佐藤功一「家並と街路樹」『新しい東京と建築の話』［時事新報社／1924］
［10］ 佐藤功一「帝都復興と建築問題に関する講演会録―都市の美観に就て」『建築雑誌』1923.12
［11］ 『INAX REPORT』No.188,2011.10、p04-参照

早稲田大学大隈記念講堂

竣工年：1927年
所在地：東京都新宿区戸塚町1-104
構造・規模：鉄骨鉄筋コンクリート造、鉄筋コンクリート造、地下1階、地上3階、時計塔付
【重要文化財】

1　西面全景
塔屋の垂直性、３連のチューダー・アーチがゴシック様式の特徴を示す一方、スクラッチタイルを全面に張った重厚な外壁は、ロマネスク様式の雰囲気を醸し出している
2　１階北側歩廊
大隈庭園に面した歩廊は、連続する半円アーチ、リブ・ヴォールトなど、ロマネスクの僧院を彷彿とさせる情感豊かな空間である
3　１階大講堂ロビー
正面の３連のチューダー・アーチから建物内部に入ると、最初に待ち受ける空間。大講堂の形状に合わせ、緩やかにカーブしている
4　大講堂の演壇から客席を見る
大きくカーブする壁面はそのまま天井と一体化する。天井は宇宙、巨大な天窓は太陽系を表現しているとされる。表現主義的な造形がちりばめられた豊潤な空間である。佐藤武夫による建築音響学の成果を反映した、日本最初のオーディトリアムでもある

市政会館および日比谷公会堂

竣工年：1929年
所在地：東京都千代田区日比谷公園1-3
構造・規模：鉄骨鉄筋コンクリート造、地下1階、地上6階、塔屋4階
【東京都選定歴史的建造物】

1　市政会館玄関
大隈講堂では、エントランス部分に3連のチューダー・アーチを用いたが、市政会館では3連扉としながらも、極めて直線的な構成でまとめている
2　エレベータホール
全体的に直線が支配する空間に配されたセグメンタルアーチの曲線は、強い印象を与えている。壁面の水色のタイルは、日本陶業製。佐藤は「建築の美観にタイルは重要な役割をするものであるから、自分の理想通りのものを製造してくれる様に」と日本陶業の深谷辰次郎に依頼し、完成品の選定に心血を注いだと言われる
3　日比谷公会堂北面全景
日比谷公園に面した正面。市政会館側のファサードとは対照的に低く抑えられたヴォリュームが、公園の緑の中に自然に溶け込んでいる。壁面のバットレスが、市政会館との連続感を強めている
4　オーディトリアム
大隈講堂に引き続いて佐藤武夫が音響設計を担当し、優れた音響を誇るホールとして定評がある（現在、改修中）［提供：日比谷公会堂管理事務所］
5　市政会館南面全景
佐藤の作品の中でも、ゴシック様式のダイナミックな垂直性が最も際立って感じられる外観である。バットレスの寸法と間隔は上層になるにしたがって逓減（ていげん）し、ファサードの上昇性を高めている

滋賀県庁舎本館

竣工年：1939年
所在地：滋賀県大津市京町４−１−１
構造・規模：鉄筋コンクリート造、地下１階、地上４階、塔屋付
【国登録有形文化財】

1　玄関ホール
装飾を抑えたモダンな空間だが、中央階段の手すり壁にはテラコッタの装飾、踊り場にはステンドグラスが配され、華やいだ雰囲気で来庁者を迎える
2　２階東側廊下
佐藤が晩年に到達した境地を如実に示す寄せ廊下。ロの字型のプランをとりながら、廊下は中庭を囲まず北西側に寄せられている。これにより、主要な居室のほぼすべてに南か東からの採光が可能となる
3　貴賓室（現・4−A会議室）
貴賓室においても装飾性は弱く、建物全体の合理的な性格と違和感のない空間となっている。壁のピラスター（付け柱）や天井周りのデンティル（歯飾り）など、控えめな装飾要素が古典的な格調をもたらしている
4　北面外観
水平性の強い左右対称の全体像は、ルネサンス様式が基調となっている。しかし、様式建築につきものの装飾はほとんど廃され、全体的にモダンな性格が強い。中央部大オーダーの柱頭飾りも古典主義を逸脱した中世的なものである。軒上の要所要所に配されたアクロテリオン（ギリシャ・ローマの建物における屋根の隅飾りに端を発する装飾）がユニークな装飾効果を上げている

略歴 Biography

明治11年［1878］ 7月2日、栃木県下都賀郡国分寺村字小金井に大越東七郎の次男として生まれる
明治36年［1903］ 7月11日、東京帝国大学工科大学建築学科卒業。卒業設計「A PHOTOGRAPHIC STUDIO(写真館)」。卒業論文「Description on the Photographic Studio」。9月4日、三重県技師、高等官七等。11月20日、従七位
明治37年［1904］ 大工棟梁・佐藤茂八の養子となる
明治41年［1908］ 6月、宮内省内匠寮御用掛。12月21日、依願退職
明治42年［1909］ 1月、早稲田大学から建築学研究のため欧米各国に派遣されることが決まる。4月22日、渡欧米
明治43年［1910］ 8月29日、帰国。9月、早稲田大学理工科建築学科本科開設に伴い、同大学講師
明治44年［1911］ 6月、早稲田大学教授。12月、早稲田大学理工科建築学科本科主任
大正6年［1917］ 柳田國男と共に「白茅会」を発起し、石黒忠篤、細川護立、大熊喜邦、田村鎮、内田魯庵、木子幸三郎、今和次郎らが参加
大正7年［1918］ 夏、神奈川県内郷村で10日間の民家調査を行うが病に倒れ、静養（-大正8年4月）。8月、小石川指ヶ谷の自宅に佐藤功一建築事務所開設
大正8年［1919］ 6月28日、工学博士
大正10年［1921］ 4月、早稲田大学理工学部建築学科主任教授退任。9月、東京女子高等師範学校講師
大正12年［1923］ 11月8日、帝都復興院建築局事務（-大正13年2月23日）
大正13年［1924］ 1月、建築学会副会長（-大正14年12月）
大正14年［1925］ 4月、日本女子大学教授
昭和2年［1927］ 11月、洪洋社から『住宅の平面計画』出版（木村幸一郎と共著）
昭和5年［1930］ 4月、早稲田大学理工学部建築学科内に「佐藤功一博士文庫」設立
昭和6年［1931］ 3月、早稲田大学出版部から『住宅建築衛生篇』出版
昭和9年［1934］ 1月15日、東京市庁舎建築懸賞図案審査員（-6月15日）
昭和11年［1936］ 10月、会計検査院技術顧問員
昭和12年［1937］ 1月、紀元2600年記念日本万国博覧会会場計画委員会委員。8月、次男・茂次が佐藤功一建築事務所入所（-昭和14年12月）。広島市公会堂（計画案）
昭和13年［1938］ 佐藤功一建築事務所上海支所開設（担当：茂次、-昭和15年）。5月、東宛書房から『匠房雑話（学芸随筆第3巻）』出版
昭和14年［1939］ 6月13日、紀元2600年記念宮城外苑整備事業審査委員会委員。7月、建築学会住宅問題委員。11月7日、上野・精養軒で「還暦祝賀会」（早苗会主催）。12月、建築学会評議員
昭和15年［1940］ 5月、大日本忠霊顕彰会顧問。福島県庁舎（計画案）
昭和16年［1941］ 4月、大日本国防衛生協会理事。5月、日刊土木建築工業新聞社から『住宅雑纂（佐藤功一全集第4巻）』出版。6月22日、逝去（64歳）。6月25日、築地本願寺で葬儀ならびに告別式。染井墓地に埋葬（墓石デザイン：伊東忠太）
昭和17年［1942］ 3月、日刊土木建築工業新聞社から『建築談叢（佐藤功一全集第3巻）』出版。6月、遺俳句集『すひかつら』私版
昭和28年［1953］ 6月、彰国社から作品集『佐藤功一博士』出版

主な作品 Works

●印は現存

大正2年［1913］ 茨城県物産陳列館（茨城）
大正4年［1915］ 明治記念新潟県立図書館（新潟）
大正6年［1917］ 日清生命保険株式会社本社（東京）（内藤多仲、松下新作、金田恭介と共同設計）
大正9年［1920］ 日清生命保険株式会社大阪支社（大阪）
大正11年［1922］ 下野新聞社（栃木）
日清生命保険株式会社名古屋支店(愛知)
大正12年［1923］ 読売新聞社（東京）
上毛実業銀行（群馬）
信濃毎日新聞社（長野）
下野新聞東京支社（東京）
大正13年［1924］ 実業ビルディング（東京）
日清印刷株式会社工場（東京）
大正14年［1925］ 下仁田銀行（群馬）
日本女子大学寄宿舎（東京）
大正15年［1926］ 如水館改修（東京）
帝国興信所（東京）
自邸（東京）
昭和2年［1927］ 三会堂（東京）
國學院大學図書館（東京）
●岩手県公会堂（岩手）【国登録有形文化財】
早稲田大学出版部（東京）
●早稲田大学大隈記念講堂（東京）【重要文化財】
都城市公会堂（宮崎）
●佐賀図書館（現・徴古館）（佐賀）【国登録有形文化財】
反町茂作邸（東京）
昭和3年［1928］ ●武蔵高等学校講堂（現・武蔵大学大講堂）（東京）
●名古屋新聞御誓文記念壇（現・鶴舞公園普選記念壇）（愛知）【名古屋市指定有形文化財】
●群馬県庁舎（現・群馬県庁舎昭和庁舎）（群馬）【国登録有形文化財】
日本勧業銀行有楽町支店（東京）
昭和4年［1929］ 平等小学校（山梨）
日本女子大学児童研究所（東京）
飛行館（東京）
●市政会館および日比谷公会堂（東京）【東京都選定歴史的建造物】
昭和5年［1930］ 協和銀行芝支店（東京）
●米子市庁舎（現・米子市立山陰歴史館）（鳥取）【米子市指定有形文化財】
●群馬会館（群馬）【国登録有形文化財】
湯沢三千男邸（東京）
昭和6年［1931］ 東京動産火災保険株式会社本社（東京）
宮城県庁舎（宮城）
昭和7年［1932］ ●津田英学塾（現・津田塾大学本館（ハーツホン・ホール））（東京）
第三十六銀行東京支店（東京）
●日清生命館（現・大手町野村ビル、下層階外壁のみ保存）（東京）
富山房（東京）
昭和8年［1933］ 丸善株式会社名古屋支店（愛知）
●足立正邸（神奈川）
日本赤十字社宮城支部病院（宮城）
昭和9年［1934］ 東京動産火災保険株式会社京都支部（京都）
電気協会会館（東京）
●神田神社（大江新太郎と共同設計）（東京）
東京動産火災保険株式会社横浜支部（神奈川）
マツダビルディング（東京）
田口邦重邸(伊東忠太と共同設計)（東京）
昭和10年［1935］ 東京動産火災保険株式会社名古屋支部（愛知）
林屋友次郎邸（東京）
山陽記念館（広島）
東京瓦斯株式会社渋谷営業所（東京）
昭和11年［1936］ 東京瓦斯株式会社荏原営業所（東京）
丸山商会（東京）
●高田早苗銅像台座（東京）
昭和12年［1937］ N.H.K.川口放送所（埼玉）
N.H.K.鳩谷放送所（埼玉）
駒澤大学講堂（東京）
東京瓦斯株式会社荒川営業所（東京）
帝室林野局庁舎（東京）
●大隈記念像（東京）
昭和13年［1938］ 巣鴨商業学校校舎（東京）
東京動産火災保険株式会社三輪支部（東京）
東京動産火災保険株式会社池袋支部（東京）
●栃木県庁舎（現・栃木県庁舎昭和館）（栃木）
昭和14年［1939］ 南洋海運株式会社日蘭丸一等公室
●滋賀県庁舎（現・滋賀県庁舎本館）（国技博と共同設計）（滋賀）【国登録有形文化財】
広島赤十字病院（広島）
日清生命保険株式会社新館（東京）
昭和15年［1940］ 大野厳邸（東京）
広島県農業協同組合事務所（広島）

※この頁は、『佐藤功一博士』［田辺泰・猪野勇一編、彰国社／1953］、伊藤三千雄「佐藤功一――都市景観への視点」『日本の建築 明治大正昭和8 様式美の挽歌』［1982／三省堂］をもとに、筆者と編集室が制作したものです。

取材協力：公益財団法人後藤・安田記念東京都市研究所／滋賀県庁／東京大学大学院工学系研究科建築学専攻／早稲田大学
おことわり：08-13頁の作品名称のみ文化財指定名称とし、他は原則として竣工時の名称を使用しています

八幡浜市立日土小学校

愛媛県八幡浜市立日土小学校は、市の中心地から約6km離れた山間部にある。設計者・松村正恒は武蔵高等工科学校（現・東京都市大学）に学んだ後、土浦亀城建築設計事務所で建築家人生をスタートさせたが、６年後には農地開発営団に移籍。終戦を機に故郷に戻って1947年、八幡浜市役所に奉職した。学校や病院建築の実積を積みながら、渾身の力で設計したのが日土小学校である。クラスター型教室配置を実践し、それによる両面採光も可能にした。同時に川に張り出したベランダや鉄骨階段を介して自然と建築を一体化してみせた。1960年、『文藝春秋』主催の「建築家ベストテン―日本の十人」に選出され、無名の公務員は“地方で活躍する建築家”として、にわかに注目された。同年、市役所を辞し、松山市に設計事務所を開設。以後400に及ぶ作品を輩出し、生涯現役で活躍した。
日土小学校は2008年、現状調査を経て改修・改築工事に着手し、翌年、竣工した。日本建築学会賞（業績）、ワールド・モニュメント財団／ノール モダニズム賞を受賞し、重要文化財にもなった。文化財的な価値と高度な教育施設が共存する木造モダニズム建築は、現役の小学校として次代に継承されつつある。

［撮影：フォワードストローク（特記は除く）］

竣工時の概要

所在地	愛媛県八幡浜市日土町2-851
建築面積	中校舎：399.37m²
	東校舎（トイレ棟・開放廊下含む）：478.26m²
延床面積	中校舎：643.58m²
	東校舎（トイレ棟・開放廊下含む）：765.24m²
構造	木造
規模	地上2階
工期	中校舎：1955.11-1956.4
	東校舎：1958.5-10
設計	松村正恒（八幡浜市土木建設係）
施工	中校舎：浜上建設
	東校舎：藤本次郎

改修・改築時の概要

敷地面積	7,675.18m²
建築面積	中校舎：435.90m²
	東校舎（トイレ棟・開放廊下含む）：449.47m²
	新西校舎：346.58m²
延床面積	中校舎：675.56m²
	東校舎（トイレ棟・開放廊下含む）：723.06m²
	新西校舎：621.04m²
構造	木造
規模	地上2階
工期	2008.8-2009.6
調査・基本設計・監修	
	日本建築学会四国支部日土小学校保存再生特別委員会
実施設計	中校舎・東校舎：和田耕一・名本蒼由美
	新西校舎：武智和臣・山内和也
施工	中校舎・東校舎：一宮工務店白滝本店
	新西校舎：小西建設

15頁―日土小学校を俯瞰する：校舎が対面するミカン山には民家が点在し、四方には斜面を切り開いた段々畑が続いている。その頂上近くまで登り詰めた中当（なかとう）地区からの俯瞰。切妻屋根の東校舎と中校舎、フラットな屋根の新西校舎に沿って蛇行して流れているのが喜木川で、写真上部のかすんで見える宇和海（愛媛県と大分県の間にある豊後水道の愛媛県側の海）に注いでいる｜16-17頁―向かい側のミカン山からの全景：1999年、DOCOMOMO 20選に選定され、日土小学校の建築的価値が住民にもようやく理解され始めた頃、2004年の台風18号で被災。それを機に建て替え案が浮上し、やがて市を二分する運動に発展した。2005年12月、建築史家・鈴木博之氏を中心としたシンポジウム「八幡浜の文化資産を考える―日土小学校の再生を目指して」が開かれ、保存再生の具体案が示された。さまざまな議論を経た後、2008年8月、再生計画の提案に沿うかたちで改修・改築工事に着手し、2009年6月、竣工した｜18-19頁―喜木川から見る：手前から新西校舎、中校舎、東校舎。ベランダや鉄骨階段を校舎から川に突き出した親水性あふれるこの光景は、竣工から50年を経た現在でも、見る人を魅了し続けている｜20頁上―運動場側から見る：左から東校舎、中校舎と新西校舎。現在は、右手前に体育館がある｜20頁下―東校舎の昇降口周り：昇降口の庇の高さを抑えて上部にハイサイドライトを設け、光を採り入れている。右手の光庭からも自然光がふんだんに降り注ぎ、北口とは思えない明るい昇降口になっている。また、靴箱は背板を低くして向こう側を透かせ、足元も浮かして設置。風も光も通り抜ける仕組みになっている。この昇降口は、今回の改修・改築工事で復元されたもの。実際には、中校舎の主玄関昇降口を使用している｜21頁上―東校舎2階のクラスター型教室配置の入り口と廊下：教室を廊下から切り離して2教室を枝状の廊下と階段でつなぎ、廊下側と運動場側から光と風を取り入れ両面採光も実現した。廊下のベンチは腰板上部を光庭側に迫り出し、子どもたちが思い思いの使い方ができるように工夫されている｜21頁下―新西校舎：設計者・松村正恒の思想を踏襲し、新しい技術や計画論で新たに設計された。これからの学校建築の在り方を示唆する建築を目指した

戦後木造モダニズム建築としての八幡浜市立日土小学校の保存再生

曲田清維
Kiyotada Magata

八幡浜市立日土小学校と松村正恒

愛媛県八幡浜市の中心部から山あいに入って喜木川を少し上ると、川沿いに端正な姿の校舎が目に入る。2009年6月に保存再生された八幡浜市立日土小学校は、中校舎と東校舎の２つの校舎を保存改修し、新たに西校舎を建て替えたものである。

日土小学校は八幡浜市に勤務していた松村正恒［1913–93］の設計で、中校舎が1956年、東校舎が1958年に竣工し、以来半世紀余を経た。松村はかつて日土小学校を振り返って次のように記している。

「場所は、川幅が十米ぐらいの岸辺に川の上に迫り出して建っている。堰きとめられて川は水鏡、向かいの岸は急勾配の蜜柑山。テラスに桜の花が散り、五月の薫風にのって蜜柑の花の香りが教室にただよう、蛍の乱舞する夏の宵、柿の色、蜜柑の朱、落葉のいろどる冬の河」［1］。

松村は愛媛県大洲市新谷の生まれで、武蔵高等工科学校（現・東京都市大学）を卒業後、土浦亀城建築設計事務所などに勤務。そして終戦と共に帰郷し、故郷に近い八幡浜市役所に勤め、多くの公共建築の設計に携わった。特に学校建築については評価が高く、1960年の『文藝春秋』誌上では前川國男や丹下健三らと共に「建築家ベストテン―日本の十人」［2］に選ばれている。

日土小学校の中校舎、東校舎は、切妻屋根の木造２階建てで、校舎は細部にわたってペンキで彩色され、川に突き出た図書室前のベランダやテラス、外部鉄骨階段は、水面に映ってなお美しい。教室は廊下を分離したクラスター型（ブドウの房状）教室配置であり、教室の静寂性と両面採光が可能となっている。また緩やかな階段、本棚とベンチのある廊下、ベランダのある図書室など、すべての空間が子どもにとって心地良い居場所となっている。構造的には木と鉄骨を組み合わせたハイブリッドな構法が使われ、広く明るい空間の確保とカーテンウォールの外壁を可能にしている。外観デザインは水平連続窓を強調した外壁と切妻屋根の構成とし、風土に対応したモダニズム建築となっている。

このように日土小学校は子ども中心主義としての戦後民主主義教育を体現したものであり、また木造モダニズム建築として貴重な存在となっている。1999年にはモダニズム建築見直しの機運と相まってDOCOMOMO 20選にも選ばれ、価値が認識され始めたが、地域社会の多くの人々が認めるには、その後の検証と保存改修の在り方を待つこととなる。

保存再生活動の軌跡

保存再生には“学校”ならではの困難が横たわり、行政、学校関係者、保護者、地域住民の意見調整が必要であった。保存の提起は1999年７月、フォーラム「子どもと学校建築」（日本建築学会四国支部主催）に始まり、その後、2004年８月の日土小学校を舞台にした「夏の建築学校 in日土」などの緩やかな保存活動が地道に繰り広げられていった。しかし、直後の９月の台風18号による東校舎破損を機に、地元では保存改修か新築かで意見が大きく分かれた。2005年９月には教育委員会による「八幡浜市立日土小学校再生検討委員会」が設置され、学校関係者、地元住民、学識経験者などによる厳しい議論が続いた。打開の糸口は同年12月に開催された「八幡浜の文化資産を考える―日土小学校の再生を目指して」（同支部主催）で見え始め、鈴木博之氏、腰原幹雄氏、吉村彰氏、花田佳明氏といった建築史や構造計画、建築計画などの専門家による講演とディスカッションが行われた。また学会メンバーが作成した改修案をシンポジウムで発表し、保存再生の可能性を目に見えるかたちで訴えた。その後、これらのメンバーが中心となって保存再生作業が続くことになる。

2006年３月には幾つかの妥協案を含みつつも、保存再生を基本にした報告が答申された。答申概要は、東校舎は改修し特別教室として使い、中校舎は職員室周りを中心に若干の改修を行うとともに、さらに小規模な普通教室を増築するというものであった。学校関係者や地域住民の“安心・安全な学校”を求める声に検討委員会が何とか見い出した着地点であった。

保存再生の設計と工事概要

基本調査および基本計画は、日本建築学会四国支部に委託され、同支部に設けられた「日土小学校保存再生特別委員会」［3］が作業に取り組んだ。

基本計画の柱は「現代的な教育環境の実現」、「重要文化財を目指した改修」、「安全・安心で健康的な校舎づくり」であった。その具体的な方向性は、①文化財として価値を尊重し、基本的に当初の状態に戻す、②構造補強を行い、現行基準法以上の耐震性能を確保、③東校舎の教室意匠の保存と特別教室への変更、④遮音性や設備機能の向上、⑤新しく西校舎を建設し、普通教室を確保すること、とした。実施設計は残念ながら入札となったが、幸運にも保存再生特別委員会のメンバーである和田耕一氏の設計事務所が落札した。

2008年８月に始まった保存再生工事は実際、困難を極めた。構造補強は文化財的価値を損なわないよう、床、壁、天井の内部で行うことを原則とし、既存の丸鋼ブレースは２重にして違和感のないよう工夫した。セメント瓦の葺き替えは、偶然にも当時の型枠が高知県で見つかり復元可能となった。色彩の復元は謎解き模様であった。築後50年の間に5、６回の塗装が行われ、各部の当初の色を見つけるのに苦労した。既存の上部から順次剥いでいき、最下部の色彩を採用した。補導室（現・相談室）の設えでは新たな発見もあった。南面の壁は紺色の伊予絣に金揉み和紙の市松模様という斬新なデザインである。ただ傷みが激しく、それらを保存した上で合板下地に同じ仕上げをしながら、中央部は実物が見えるようアクリル板で覆い、新旧の対照を明確にした。難問のひとつは川側の景観にかかわるもので、川に張り出した鉄骨階段や外部ステージの修復であった。文化庁との協議でも「川側の景観こそが重要」と、その保存の在り方が実施設計の段階から重くのしかかっていた。ここでは県河川課、建築指導係、文化庁との厳しい協議のもとに復元改修し、用途変更をもって落着した。

新西校舎についても触れたい。新西校舎の建設は中校舎での教室不足を補うということで、４つの普通教室を確保した。減少する児童数を鑑み、必要面積を絞りながらも共有面積を精一杯確保し、また外観も既存の中・東校舎との対比を慎重に考慮しながら設計した。その結果、新西校舎は不足教室を補うばかりではなく、未来の教育空間を先取りしたかたちで子どもにも保護者にも大いに歓迎された。

保存再生の実施設計から改修・改築工事に当たっては、保存再生特別委員会が「監修委員会」として機能し、細部にわたって検討と検証を重ね、保存再生における「オーセンティシティ（真純性）」の確保、さらには中校舎、東校舎と新西校舎の機能・デザインなどの「インテグリティ（統合性）」の配慮に最大限の指導性を発揮した。

モダニズム建築保存再生の良き見本

2009年８月の完成記念見学会では、子どもや保護者、卒業生など大勢の人々で賑わった。保存活動のスタートから実に10年を経ていた。保存再生された日土小学校は、現代的な教育環境を獲得しながら“地域の大切な文化財”として“使い続ける学校”に生まれ変わった。学校には交流ラウンジや多目的室などが新しく設けられ、以前にも増して、地域の要として活用することが可能となった。また、地域の内と外をつなぐ場として、学校を中心としたスクールコミュニティとでも言うべき位置付けもされつつある。

2012年５月には、日本建築学会賞（業績）を受賞し、同年11月には、ワールドモニュメント財団のノール モダニズム賞の栄誉に輝いた。ニューヨーク近代美術館における授賞式では「優れたモダニズム建築として、また、完璧な修復・保存プロジェクトの模範として、日土小学校は国際的にも高く認知されることになりました」と高く評価された。その年の暮れには国指定重要文化財に指定される。戦後建築で４番目、木造建築では初めての指定である。“文化財として使い続ける学校”という地域の小さな公共建築物が果たした役割は、とても大きいものであった。

補導室（現・相談室）

［1］『老建築稼の歩んだ道』松村正恒著［青葉図書／1995］
［2］「建築家ベストテン―日本の十人」『文藝春秋』1960.5
［3］委員長：鈴木博之（東京大学教授、建築史、故人）、委員：曲田清維（愛媛大学教授、建築計画）、花田佳明（神戸芸術工科大学教授、建築計画）、吉村彰（東京電機大学教授、学校施設計画）、腰原幹雄（東京大学准教授、構造計画）、賀村智（日本建築学会四国支部、建築工学研究所代表取締役、建築設計）、和田耕一（同支部、和田建築設計工房主宰、建築設計）、武智和臣（同支部、ATELIER A&A代表取締役、建築設計）、三好鐵巳（同支部、アトリエ3主宰、建築設計）（所属はいずれも当時）

まがた・きよただ――愛媛大学名誉教授・愛媛大学社会連携推進機構教授／1949年生まれ。1974年、京都大学工学部建築学科卒業。1978年、愛媛大学教育学部助手。講師、助教授を経て、1994年、教授。愛媛大学教育学部長、愛媛大学副学長を歴任。2015年４月より現職。
主な編著書：『まちづくり学習（まちづくり教科書 第６巻）』［丸善／2004］、『地域の住まい学習』［ドメス出版／2007］、『日土小学校の保存と再生』［八幡浜市教育委員会監修、「日土小学校の保存と再生」編纂委員会編、鹿島出版会／2016］など。

特集［座談会］

新時代に挑戦した先駆者

●聞き手●
古谷誠章
Nobuaki Furuya
建築家

●ゲスト●
花田佳明
Yoshiaki Hanada
神戸芸術工科大学教授

和田耕一
Koichi Wada
建築家

武智和臣
Kazutomi Takechi
建築家

木造モダニズム建築の資産と高度な教育施設の機能が共存する八幡浜市立日土小学校。

松村正恒さんとの出会い
私たち４人の場合

古谷｜『LIXIL eye』のこの特集は、基本的には戦後、日本の近代建築が形づくられてきた中で、時代を画した建築を取り上げまして、それがどういう時代背景、あるいは技術の裏付け、社会の要請で生まれたかということについて、お話を伺ってまいります。実は、「建築ソリューション」の企画が始まった時に、僕が最初に思い浮かんだ幾つかの建築のひとつが、この日土小学校なんです。戦後は、経済成長もありますけれども一方で民主主義、そして国民の一人ひとりが主役になるという考え方が根付いていくことも、日本が大きく転換した重要な事象になるわけです。わが国の学校、特にこの日土小学校は、どうしてこんなに早い時期に、これだけ進歩的な学校が、しかも充実した質を伴って生まれたんだろう。とても大きなテーマだと思っていました。今日は大変楽しみにしておりましたので、どうぞよろしくお願いします。このコーナーは、通常は鼎談形式でお伺いしてきましたが、今回は３人のゲストをお迎えし、初の座談会形式でお話をお伺いします。

お招きした方は、花田佳明さん、和田耕一さん、武智和臣さんです。当時のことをよくご存じで、今回の改修・改築にも携わられました。最初に花田さんから…。花田さんは後に松村正恒さんを研究なさって彼が生み出した建築の背景を克明に調べ、今では松村さんを語る上では生き字引のような存在でいらっしゃいます。出会いの頃のことを改めてお聞かせいただけますか。

花田｜今日は和田さん、武智さんがいらっしゃいますし、他にも保存にかかわった松山の方々はたくさんいらっしゃいますけど、その多くは生前の松村さんをご存じなんですね。僕だけお目に掛かったことがない、そういう立場なんです。そして僕は正直言って、最初は松村さんのお名前も日土小学校も知りませんでした。『建築ジャーナル』という雑誌で、「四国の公共建築を見て、みんなで議論しよう」という企画［1］がありまして、京都工芸繊維大学の中川理さんと当時は前川建築設計事務所にいらした松隈洋さんと回ったんです。行く前に何を見ようかと相談したんですが、その少し前に『日経アーキテクチュア』で、松村さんが設計された狩江小学校を解体するに当たってお別れ会が開かれたという記事［2］を何となく見ていたものですから、「愛媛にはそういう人がいて、小学校が面白いらしい」という話が出ました。それから『無級建築士自筆年譜』［3］が出版されてまもなくでしたので、そんな資料をパラパラ見て、「まだ残っているらしいから日土小学校に行ってみよう」ぐらいの気分で行ったんです。ですから空間のイメージは全く持っていませんでした。内子町で原（広司）先生の大瀬中学校を見た後、ギリギリで日土小学校に着きました。３時半ぐらいだったと思いますが、下校が始まっていました。1994年でしたが、あの頃はおおらかで、「ちょっと見せてください」、「どうぞどうぞ」で…、わーっと飛び込んだ。そして東校舎の昇降口に入った瞬間にびっくりしまして、もう夢中で写真を撮りまくりました。後で編集者から「花田さんは泣きながらシャッターを切っていた」とからかわれましたけど（笑）、こんな建築は見たことがない…と、本当にびっくりしました。

古谷｜そうでしたか、ありがとうございました、続きはまた後ほど伺います。和田さん、武智さんは、保存運動にも取り組まれた立役者ですが、和田さんは松村さんの東校舎・中校舎の改修を、武智さんは西校舎の建て替えをなさった。共に地元の建築家の方々ですから、当然、生前の松村さんをよくご存じですね。

和田｜われわれアトリエ派は、若い頃は松山市内でバラバラに設計していたわけですが、松村さんはあこがれの建築家で、雲の上の存在でした。今から35年くらい前でしょうか、松村さんは、われわれが設計した住宅を「設計図を持って来い、見てあげよう」と言われましてね、通称・松村教室という会があったんです。建築学会の主催だったと思いますが、松村さんに図面を見ていただく会なんです。松山市内を中心とした愛媛県内の松村ファンが集まっていたわけです。

古谷｜出来上がったものを持っていくんですか？　それとも設計の途中？

和田｜出来上がった図面を持って行って、先生がチェックされるわけです。われわれは若いですから、これ見よがしのデザインをしているわけですよ。ところが、その一番の見せどころを「これが無駄だ」、「良くないよ」と見抜かれてしまうわけです（笑）。「立面で凝ったり、嫌らしくなったり、もの欲しそうなデザインはダメだ」と（笑）。軒が長い空間だと「長すぎる」と言われるし、短くしたら「格好は良くなったけど、意味ないよ」と叱られる。じゃあどうすればいいんだ…と。今考えると禅問答のような感じでしたね。

古谷｜なるほど、禅問答ですね。

和田｜先生は「それで本当に良いのか」、「どこまで考えたんだ」と教えていたんでしょうね。

古谷｜自分で考えなさいということですね。

和田｜そうそう、まだまだ中途半端だと。それとは別に、個人的な話で恐縮ですが、特別に松村さんにあこがれを持ちましたのは、私の父親が小さな工務店をやっていまして、ある時、松村さんが設計された医院付き住宅を請け負ったわけです。そして、メンテナンス工事をいつも手伝わされたんです。父はディテールにすごく難儀していまして、シンプルに見せるための納まりはすごい技術がいると言っていました。同時に、それを見ていて、建築家とはこういうものか…とも思ったんですね。そんなこともきっかけになって、松村さんにはとてもあこがれを持っていました。

古谷｜なるほどね。ところで、その合評会は何人ぐらいの方がいらっしゃったんですか。

武智｜10人ぐらいでしょうか。

古谷｜定期的に集まる感じですか。

和田｜ふた月に１回くらいでしたね。だから、松村さ

松村正恒［写真：渡辺義雄］
1913年、愛媛県に生まれる。1935年、武蔵高等工科学校建築工学科卒業後、土浦亀城建築設計事務所。1941年、農地開発営団。1947年、八幡浜市役所。1960年、松村正恒建築設計事務所開設。1961年、松山東ロータリークラブに参加。1990年、新日本建築家協会終身正会員第１号。1993年、逝去（80歳）

［1］「特集：批評の可能性を求めて４ 四国・公共建築行脚からの発見」『建築ジャーナル』1994.11
［2］「インタビュー：松村正恒氏 気骨の設計者が語る、徳は孤ならずの信念」『日経アーキテクチュア』1991.10.14
［3］『無級建築士自筆年譜（住まい学大系060）』松村正恒著［住まいの図書館出版局／1994］

んは出て来られないこともありました。

古谷｜なるほど。武智さんも参加されていた？

武智｜はい。松村さんと直接お話ができたのは、松村教室に参加したからです。その後、「そろそろあなたも建築家協会に入らないか」と、松村さんが直接私に言って下さったんです。松村さんはすでに松山の日銀の保存運動とか社会的な活動もされていたんです。われわれアトリエ派はほとんどクライアントと1対1の勝負しかしていなかったんですが、そこで初めて“家協会”の存在とか、社会的な運動みたいなものを実感するわけです。当時、愛媛県では家協会に入っておられた方はたしか2名と聞いていました。後に数名の先輩が入って、われわれが勧誘されたわけです。

古谷｜まだJIAになる前の家協会ですよね。

武智｜そうです。「恐れ多くてとても入れません」とお断りしたのを覚えています。

古谷｜お断りになったんですか（笑）。

武智｜えぇ、まだそういう器ではない。でも松村さんの薫陶を得た先輩たちに、「木の建築フォラム」とか、日土小学校の活動に誘われて一緒にやることによって、組織じゃなければ動けない、個人では無理があることが何となく見えてきた。その延長でずっと日土小学校にかかわることができたんです。

古谷｜そうだったんですか。ちなみに僕の話をしますと、松村さんを知ったのは、当時まだ広島にいる頃で、建築家の多田善昭さんが「松村正恒という建築家の講演会が松山であるから行こう」と誘ってくれましたので、宇品港から船に乗って聞きに行ったんです。松村さんがお亡くなりになる前の年で、『無級建築士自筆年譜』[3]の企画が始まった頃だと思うんです。当時は僕も、そういう方がいる程度の予備知識しかなかったし、講演会では松村さんが模造紙を使ってお話をされたのが印象に残っているのですが、その後、『無級建築士自筆年譜』が出版されたんですね。そのシンポジウムが松山で開かれましたので、再び参加しました。松村さんはお亡くなりになっていましたけど、高松の山本忠司さんとか編集者の宮内嘉久さんが来られた。シンポジウムの後、日土小学校の見学会があって、それにも参加したんです。そして、日土小学校に入った途端に、生前にお目に掛かった時の松村さんの印象と建築の空間が初めて融合したんです。「これが昇降口か、これが張り出したベランダか！」と思ったのが、僕の最初の印象です。もう一生逃れられないほど強い印象を受けました（笑）。そこに立った瞬間に、ここは良いところだな、立ち去り難いな、そういう気分にする学校だと思いました。ちょっと余談になりましたけど、これがここにいる4人の建築家と松村さんとの馴れ初めになりますね。

日土小学校の設計について
まず、配置計画から

古谷｜最初に日土小学校の配置計画から見ていきたいと思います。もともと1910年に建った旧校舎が南側の川沿いに建っていて、順次、建て替えるわけですが、松村さんが建て替えた東校舎・中校舎も結局は川沿いに設計された。普通は北に校舎を寄せて、南に運動場を残すのが一般的だと思いますが、日土小学校は逆ですね。僕は建て替える時にやむを得ずそうなったのかと思ったのですが、もともと南に寄って建っていたんですね。これはどうしてだったんでしょうか。

武智｜喜木（きき）川を意識していたんじゃないですか。それと段差がありますので、見通しが悪くなってちょっと危険な感じもありますし…。

古谷｜道路から下がって入るからですか？

武智｜そうです。北側に校舎を寄せると、谷あいのようになって怪しい空間が出来ますので…。

古谷｜なるほど。集落は運動場の北側の斜面にポツポツ建っていますので、南側に校舎を寄せてあると、うちの子が今あそこで勉強している…と、ちょうど家から見える感じなんですね。学校が学校だけではなくて、集落全体と共にある感じは、空間的にもつながっているからなんですね。

和田｜そうそう、そうだと思います。

花田｜川の向こうはミカン畑ですから、ちょうど学校と集落が運動場を介して向かい合う位置関係なんです。たぶん最初の校舎をつくる時も、何となく村の人がそういうことを感じて配置計画したんじゃないですか。道路から玄関が見えている方が、すごく自然な感じがしますよね。

武智｜そうですね。もう一つ、これは想像ですが、一般には、例えば玄関を構える場合、玄関部分の背景はもっと閉鎖的にしないとシンボリックにならないはずですね。ところが日土小学校では、松村さんは、どこが玄関か分からない、そういうスタイルなんです。

和田｜むしろ玄関を嫌がっていましたね。象徴的な玄関は子どもたちにとってはいらない。どこからでも入ってきていい、これが学校なんだと。たしか議会でも、玄関らしいものをつくりなさいという教育委員の主張と闘っていました。

花田｜昔の人の感覚で言うと、情けない入り方と言いますか、教師も通用口のようなところから入るとか、子どもたちと同じ場所から入るようにしたり、戦後まもなくの校舎では、松村さんも玄関から権威とか象徴性を奪うようなデザインをしていると思います。そのうち、徐々に両面採光にテーマが移っていくんです。

古谷｜確かに日土小学校でよく言われる成果のひとつは、クラスター型の教室配置と両面採光による自然採光と通風にありましたからね。当時は、照明は学校にはほぼ必要がないぐらいの時代でしたが、日土小学校ではそれが必要不可欠だった。その辺りの話を簡単にご説明いただけますか。

花田｜クラスター型の配置計画は教室と廊下を分離し、教室を枝状の前室を介して廊下につなぐやり方です。一方、両面採光は、東校舎で廊下と教室の間に光庭を設けることで、教室の左右両側から光と風を取り入れた。松村さんは、それまでの学校でいろいろ試作してきましたが、日土小学校はその完成形だったと思います。

古谷｜そうですね。ただ、松村さんが考えたようなことは日本中どこでもテーマだったはずなのに、他では満足に考えられなかった。これはどういうわけだったのでしょう。

花田｜はっきりは分かりませんが、日本には明治以来の権威的な学校建築の伝統がありますよね。同時に戦後、文部省が出した木造校舎の標準の手掛かりは片廊下ですから、単純にそれに従ってつくっていたからではないでしょうか。

古谷｜そういうものだと思っていた？

花田｜はい。それ以上のことを考える人もいなかったし、機会もなかった…ということでしょうね。日本ではようやく、唯一、吉武（泰水）先生が大学の研究としてやっておられた。

古谷｜でも松村さんは、そのご研究を知って、感化されたという感じではないですね、ほとんど同時代ですよね。

花田｜同時代と言いますか、ちょっと後なんです。僕が調べた限りでは、松村さんは戦前から漠然とかもしれませんが、クラスター型を知っていたと思います。欧米やヨーロッパの学校建築にはクラスター型なんていくらでもあります。そういう学校を紹介した洋書を戦前に手に入れて読んでいましたので…。

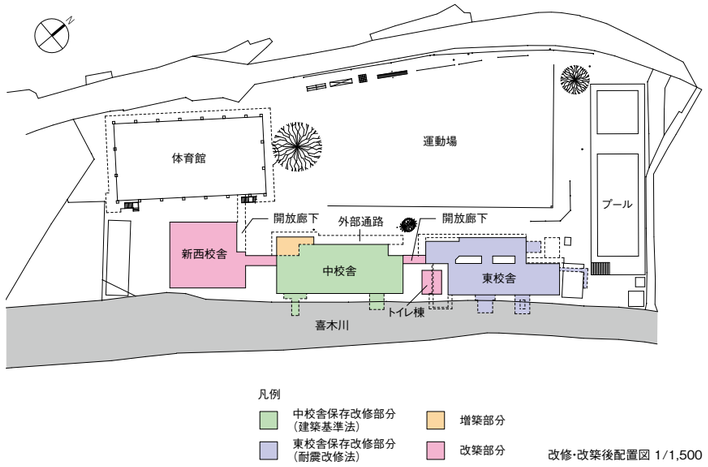
古谷｜なるほど。八幡浜市役所に勤めてからも、幸い良い上司がいたから『アーキテクチュラル・レビュー』を購入して読んでいたと書かれていますね。洋書ですから、大目に見てもらえたのはありがたかったでしょうね。

話は戻りますが、前の校舎は“33間の校舎”と言われて、すごく長い校舎だったそうですね。それを1期、2期と分節して建て替えた。分節したことによって遊び場の概念とか居場所をつくるとか、つまりアーティキュレートする感じが生まれて、前の校舎とは違うものに生まれ変わったということですね。

花田｜結果論でしょうけど、あの長い校舎を半分に切って、松村さんは東校舎と中校舎を建てられた。それが大変効果的だったと思います。川とつながった感じも強調されましたし。

古谷｜校舎が南側に建っているために、運動場からの昇降口が廊下の方に寄り付く形になりましたね。通常なら北側廊下は陰気でジメジメする可能性がありますけど、日土小学校では光庭もあるし、さらに欄間の扱いとか、あるいは2階の廊下と教室のレベルをずらしてあるとか、北側が何とも素晴らしい空間になっている。ここの空間計画とか断面計画について松村さんが書き残されたようなものはないんですか？

花田｜それはちょっと思い浮かばないですが、とにかく松村さんのデザインは、八幡浜市役所にいたわずか13年の間に、一気に日土小学校に向かって、すごい速度で進化していくんです。“いろんなものをずらして光を入れる”というボキャブラリーを、廊下部分に集結させると日土小学校のようになる。ですから、意味とか意図を書き留めておくというよりは、松村さんが自分で見つけたボキャブラリーを自分の建築の仕組みの中で展開していった結果…という感じが、僕はしているんです。



改修・改築後配置図 1/1,500

日土小学校 改修・改築後配置図［提供：八幡浜市］
中校舎［1956］は当初の姿に戻すことを基本にしつつ、職員室周りを中心に機能的な要望を満たす改修を行った。東校舎［1958］は普通教室から特別教室へ用途を変更したが、ほとんどの部分は当初の姿に戻した。また新西校舎は、建築と教育の両面において新しい考え方でデザインした［解説：花田佳明］

古谷｜先ほども申しましたが、日土小学校に行って僕が最初に驚いたのは昇降口と廊下の空間で、靴箱が透けて浮いているとか、光庭があって思いのほか明るい光が入っていたことです。特に靴箱を見た時、一番下が浮いているのがとにかく印象的でした。一目見た時から、これは良いと思いました。

花田｜そうですよね。それからもう一つ、松村さんは梁と柱の角を徹底的に丸面取りしていますので、何となく校舎全体にフワーッとした雰囲気があるんです。途中に壁を入れる時も、柱と梁が丸面取りされているために、そこをボートやベニヤでふさごうとすると、丸面取りの半径分は必ず面が下がらざるを得ませんから真壁とは言えないし、大壁でもない。それらの中間のあいまいな雰囲気になるんです。大壁にしてしまうと近代建築的な壁による幾何学的構成に見えてしまいますが、そうではない。でも真壁にもなりきらないから、日本的なものにも見えない。ちょうどその間の微妙な状態になって、松村さん流の空間の質が生まれていると思うんです。僕らはそれを“優しい”とか、“子どものための”と表現している。

古谷｜それは、ある合理性のようなものを追求していったら自然にそうなった…みたいなことですか？

花田｜そうですね。

武智｜気が付かれたかもしれませんが、東校舎の昇降口の入り口建具を全部取っ払うと、梁はやじろべえのように見えてきます。

古谷｜そうそう、持ち出していますからね。

武智｜それで鴨居を吊るして、18枚の入り口の戸が3枚1組で建具が自由に動くようになっているんです。普通ならば、柱を立ててその間に建具を走らせればいいのに一切、柱を立てていない。彼はどれだけ透明性

復元した東校舎の昇降口

にこだわっていたのか。本当にそういう意図があったのだろうか…という気がしますね。

古谷｜全面的に戸を開けて使っていたような例とか写真とかはないんですか？

花田｜見たことはないですね。

武智｜昇降口ですから、そんなに空間的な機能はないですし、画一的ですからね。

花田｜柱があっても困ることはなかったわけですから、それをなくしたのは松村さんの“美学”ですよね。

古谷｜そうそう、美学ですよね。ですから日土小学校は、合理性だけではどうもにもならない。さりげないんだけど、どこかに、ある種の美学が入っているんですよね。

武智｜まさにそうですね。

松村さんの空間性
建築に余計な意味をまとわせない

古谷｜花田さんは精力的なご研究を積まれて、松村さんの空間性、例えば人をして立ち去り難くするような空間、建築を生み出す根底的なものは、どんなところにあったと考えられますか。

花田｜難しい質問ですね（笑）。今日はそういうご質問があるかとは思っていましたが…。最近、機会があって、大阪の『建築と社会』にも書いたんですが[4]、僕が松村さんのことを調べ始めた時は、スケールがとても良いとか、優しい建築、子どものための建築とか、そういう言葉が思い浮かびましたし、いろんな方に松村さんの建築の感想を聞いても、そういうお答えが多かった。ただそれだけでは自分があれほど感激した理由が説明できない気分がずっと残りました。でもなかなかそれを言葉にできなかった。保存運動が始まりいろいろやっているうちに、最後に博士論文[5]をまとめて本[6]にする段階になって、ゆっくり考えてみたんです。松村さんの建築は、近代建築、あるいはモダニズム建築で、確かにそういうモチーフは使っています。しかし、他のモダニストと比べた時にやっぱり違う点が幾つかあって、それが僕らを感動させるのかなと思い至ったんです。そのひとつが、建築に余計な意味をまとわせない…というのでしょうか。例えば、数年前に丹下展[7]がありましたけど、あの時のカタログにも書いた[8]のですが、丹下健三という代表的なモダニストが、ル・コルビュジエや欧米のいろいろな近代建築家が発明したボキャブラリーに日本的な伝統をかぶせて、自分なりのものをつくりました。逆に高松の山本忠司さんとか瀬戸内の浦辺鎮太郎さんは、地方性・地域性など、もともとあった日本の伝統的なボキャブラリーにモダニズムの要素をかぶせて、ちょっと脱色したと言いますか、コテコテの地域性とか伝統的なモチーフではなく、少し現代的にする時に近代建築のボキャブラリーを使っている。いずれにしろ丹下さんにしても、そういう地域主義と呼ばれる人にしても、自分なりの建築の中に何か意味を持たせようとしている。一方、松村さんの建築は、屋根が架かってはいますけど、雨が漏ったら困るぐらいの理由で架けているにすぎないし、ル・コルビュジエのモチーフを持ってきているかというとそんなことはしない。自分の建築を通して伝統や地域、近代建築史的な意味、観念的な意味、あるいは自分の中の非常に個人的な思いといった意味を表現しようとはしていない。むしろそういうことを徹底的に排除している…というようなことを思ったんですね。

古谷｜なるほど。

花田｜かなり無理やりの抽象化なんですが、松村さんという人は、建築がまとう意味を徹底的に捨てようとしたと思うと、何となく納得できることがいろいろあった感じがするんです。

古谷｜なるほどなるほど。意味や理屈でつくっているわけではないんですね。

花田｜例えば川に迫り出したベランダとか鉄骨階段も非常に評価されるんですが、落ち着いて眺めてみると、機能的な意味があるようでない。全部の教室に階段が付いているかというと、そうではない。たまたま付いているという感じがある（笑）。

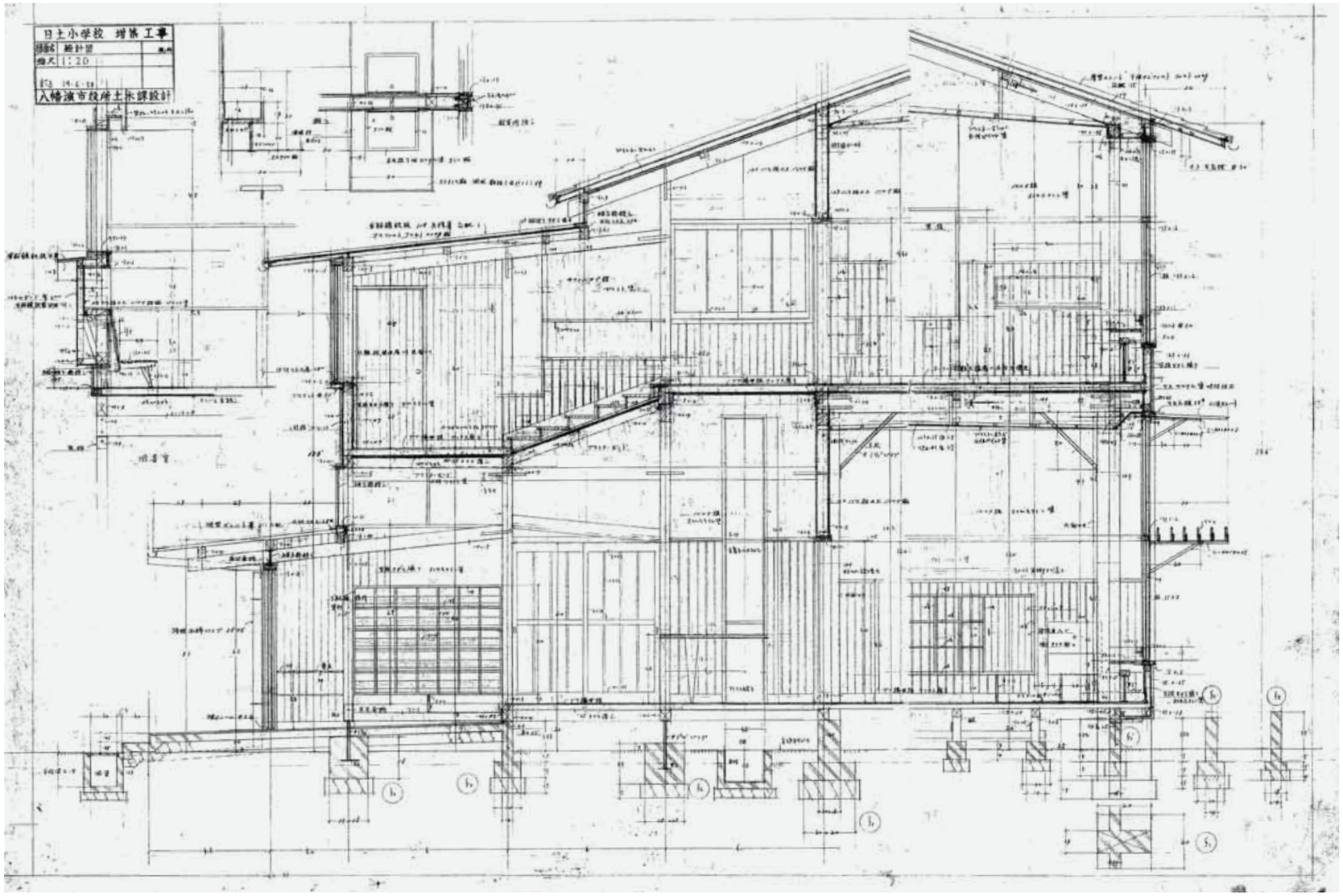
古谷｜そうそう、そうですよね（笑）。でもなくてはならないような…。

花田｜モダニストなら本来、階段を付けるなら機能的に、あらゆる部屋から安全に避難できるように付ければいいのに、全然そうはなっていなくて、建築の原理の中でここにそういうものがないとバランスが取れないとか、何だかちょっと別な理由があるようにも見えるんです。そんなことをいろいろ考えますと、いわゆる近代建築の巨匠たちとは違うところに松村はいる…。何となく僕らはそういうことを感じ取っているのではないかと思ったんです。

古谷｜今の“余計な意味を持たせていない”と伺うと、なるほどと合点がいきますね。僕は先ほど、立ち去り難い思いをどうして人に与えるんでしょう…と言いましたのは、僕なりに解釈すると“松村さん自身がそこにいるからだ”みたいな感じがするんです。つまりそれは、その校舎のある場所に自分も立っている…という感じです。ご自分が好んで飽きずに立っているぐらいだから、人も立ち去らないで立っている…。

花田｜そうですね。

古谷｜ここにこんなものがあったらいいなと思うと川に張り出してみたり、そのまま形にしてつくり出したり、そういう自然さがあるんです。そう思いましたのは一番最初に日土小学校が『建築文化』に出た時の号に、短文の解説[9]が出てるんです。すごく情緒的なんですよ。「山のせまった谷あいに、せまい敷地を求めて学校が建っていた。拡げようもない。改築を機に、大木を倒して河に近づけた。惜しかったけど。静かな流



日土小学校 東校舎矩計図［所蔵：八幡浜市］
クラスター型教室配置の東校舎を教室―前室―廊下の位置で切った断面である。教室側と昇降口・廊下側の階高の違いを利用し、あちこちの開口部から光や風が入る巧みな空間構成になっている。川側（図の右手）の外壁は柱から切り離されたカーテンウォールになっており、小庇やルーバーなど光を制御する仕掛けが設置されている様子がよく分かる［解説：花田佳明］

［4］ 花田佳明「日土小学校と建築家・松村正恒から考えた「もうひとつの」建築と建築家について」『建築と社会』2016.2
［5］ 花田佳明「建築家・松村正恒に関する研究―八幡浜市役所における活動を中心にして（博士論文）」［東京大学／2009］
［6］ 『建築家・松村正恒ともうひとつのモダニズム』花田佳明著［鹿島出版会／2011］
［7］ 展覧会「丹下健三 伝統と創造―瀬戸内から世界へ」（香川県立ミュージアム）2013.7.20–9.23
［8］ 花田佳明「瀬戸内の建築家をめぐって 松村正恒 近代と非近代を巡る瀬戸内の旅」『丹下健三 伝統と創造―瀬戸内から世界へ』［美術出版社／2013］

［9］ 松村正恒「日土小学校」『建築文化』1960.2

れである。テラスに桜の花が散り、糸をたれると魚がはねる。5月の薫風にのって、ミカンの花の香りが教室にただよう。蛍の乱舞する夏の夜、柿の色、ミカンの朱、落葉の沈む冬の河。いつ訪ねても、あきることのない清くすんだ環境である」。この6行の文章は、そこがどういう場所であるかを平明に物語っている。松村さんの素朴な心情を表わしている気がします。そして環境につながるもの、人工物である建築もごく自然にそこに付け加えるかたちでつくる必要があることを訴えている気がするんです。

花田｜僕もその文章は好きでよく取り上げるんです。確かに日土小学校の周辺環境の描写であることは間違いないですが、ただ日土小学校が建っていなかったら生まれなかったとも言えます。日土小学校があそこに建ち、鉄骨階段が川に迫り出し、ベランダが出来たからこそ獲得できた自然との新しい関係が書かれているのではないか。ですから松村さんの建築というのは、愛媛県の伝統とか近代建築に対立する地域主義を体現しようとしたのではなく、人と環境との面白い関係を取り出すためにプラグインされた装置でいい、建築とはそういうものだという思いを持っておられたのではないか。そしてプラグインされた時に引き出されるものが、古谷先生がおっしゃった“松村さんがいるような感じ”、つまり松村さんの思想そのものになったのではないか。日土小学校の中にいると、本当の教育や学校とはこういうものだ…、みたいな感じがしてきて、人びとは立ち去り難くなる。そしてそれが、何となく本当のものを見たとか、懐かしい感じがするとか、いろんな言葉になっていくのだろうと思います。

古谷｜豊かな環境と言っても、これ見よがしな絶景ではなく、ごく普通の川とミカン畑なんですよね。それがとても身近に感じて、こちらの感受性が豊かになるような場所、足掛かり、居場所として建築がある…、そういうことですかね。

ちょっと話が飛びますが、『建築文化』の1文で、もう一つ印象に残ったものがあるんです。「中庭のあることは、不十分ながらも良い結果をもたらしているようだが」[9]と書いてある。この「不十分ながら」とおっしゃっているのは、1階がまだちょっと暗いかな、ジメジメしてるかなということですが、「廊下の利用法は、わたくしの考えているようには活用していない」[9]という文章で締めくくられているんです。これはどういう利用法を期待されて、それができていなかったと言っているのでしょうか。

花田｜僕が想像したのは、2階の廊下です。光庭側に壁を柱より持ち出し、ベンチや掲示板を設けています。また、教室に入っていく前室の左側にちょっと花台みたいなものが用意されています。あの辺りがもうちょっとうまく使ってくれたら良いのに、と思われたのかと想像したんですが…。

和田｜それもあるかもしれませんが、ひょっとしたら、廊下をもう少し広くしたかったのではないか…と思ったんです。と言いますのは、次に設計した狩江小学校になりますと、少し広くなっているんです。ですから、日土小学校で少し広くしようと思われて、次の作品にそれが反映されたのではないかと思いました。それと私は鉄骨階段にしても、廊下にしても、あれは子どもの遊び場ではなかったかと思うんです。よく考えますと、校舎が建ったのは大変貧しい時代ですよね。遊ぶところと言ってもそんなにないわけです。ですから階段はジャングルジムのようで、子どもは高いところが好きですし、本能的に上から下をのぞくのは大好きでしょ。松村さんが何年後かに日土小学校に行った時、鉄骨階段は本来の使い方をされていなかった。危険だからと、実は閉鎖されていたんです。

古谷｜なるほどね。大らかな空間なんですけれどね。

和田｜窮屈な学校ではない証拠として、あの廊下があった。ベンチの付いている廊下では、お行儀悪い姿勢で本を読んでいても怒られたりはしない。そして、その延長上に補導室（現・相談室）がありますが、あの補導室も、校長室よりはるかに素晴らしい場所。お金も掛かっていますし、環境も抜群じゃないですか。

古谷｜そうそう、そうですよね（笑）。

和田｜悪ガキが叱られる時に閉じ込められるのは、あの時代であれば窓のない監獄のような部屋になりますよね。ところがあの補導室は実に開放的で、自分たちの家が見えますし、同級生たちが運動場で走り回っている姿も見える。そういうことを見て、平常心を取り戻すための補導室かなぁと思いますね。そこから考えると、まさしく当時の時代背景が重ならないと、あの学校の実体は見えないのではないか。それは、われわれが改修する時に大事にしたことでもありました。「自分たちがどう受け取ったか」が命題でしたからね。

寂しい原風景が…
学校や病院におのずと関心が向いた

古谷｜松村さんは、土浦亀城事務所時代にも子ども施設の調査をされているようですね。この関心はどこからきたんでしょうか。

和田｜竹内芳太郎さんとの出会いですかね。竹内さんは民家や農村建築のご研究をなさっていたと聞きますし、松村さんは土浦事務所を辞めてから、農地開発営団建築課長の竹内さんの下で働くために、新潟に移住するんです。

花田｜それもありますが、想像するにやっぱりお生まれでしょうか…。

古谷｜ご自身が里子だったこととかですか？

花田｜大洲（おおず）の旧家に生まれながら、早い時期にお父さんが亡くなったり、お母さんと別れ別れで育ったり、ちょっと寂しい原風景がありましたでしょう。ですから、子どもたちとか貧しい人には優しくしようと思われた。もともとの気質として正義感が強くて社会派だったし、武士のような面もありました。それらがミックスされる中で、東京に出て勉強を始めたわけですが、建築家としてそういう思いや生い立ちを何かに反映するとしたら、やっぱり学校とか病院、幼い人間、弱い人間に対する施設におのずと関心が向いたと思います。

古谷｜なるほど。それと、たまたま戦後、子どもがだんだん増えてきて、学校の建設が急務だという背景もあったんですね。

花田｜はい。それは八幡浜市役所に入って、まさに戦後、菊池清治という市長が登場し、松村さんがインフラ整備を担当するわけです。その中で学校と病院は大きなテーマでつくらざるを得ませんから、主要なものは全部、松村さんに任せていった。そういうことが順番にうまく動いていったんじゃないかと思いますね。

古谷｜当時の住宅環境を考えれば、せめて学校に生活の場としての豊かさとか親しみやすさがあれば、子どもにとっては大きな救いになる。そういう気持が働いていた感じがしますね。

花田｜そうですね。やっぱり松村さんは学校、あるいは先生とか、教育に対する期待感がすごく大きい人だったと思いますね。

古谷｜それから学校の役割は、早くから生涯教育の場として考えておられた。子どものためだけじゃなく、集落と言いますか、その地域の大人のためにも学校がある、とずっと言われてきましたよね。

和田｜青年が集まったり、集会をしたり。

花田｜その辺は学校建築のプランニングに一番反映しやすいテーマですよね。そこに松村さんは気が付いておられて、新谷（にいや）中学校で最初にそれを具体化して、特別教室群が独立して使えるような平面計画を実現しましたし、最後の狩江小学校では、完全にそこが切り離せるようなプランニングをつくっています。今で言う、コミュニティスクールのアイデアは最初から持っていたと思います。

古谷｜そうそう、まさにコミュニティスクールですね。

八幡浜市役所時代の松村さんを
エンカレッジし続けたのは…

古谷｜四国の人口4万人足らずの市にいらっしゃって、松村さんは、どうして世界的な関心と視野を持ち続けることができたのか。それは稀有なことですよね。そういう関心は、やっぱり東京に出て武蔵高等工科学校（現・東京都市大学）で蔵田周忠（ちかただ）先生に出会ったり、土浦事務所での仕事が、初期の重要な体験としてあったからでしょうね。

花田｜武蔵高等工科学校入学については浪人もしましたし、少し自分を卑下するような気持もあったようですが、ただ、そこにいらしたのは、ヨーロッパ帰りの輝くような蔵田先生だったわけですから、たぶん自分を励ます手掛かりだったと思います。そして可愛いがられていろんな翻訳の仕事ももらって、若い頃は自分を助けてくれた方という思いを持っていたと想像します。しかし彼の薦めで土浦事務所に入ってみると、トレンディなお金持ちの仕事ばかりだった。それに反発を覚えて農地開発営団に行きますが、蔵田先生とは戦後も長いお付き合いをします。一方では自分の作品を蔵田先生に常に報告し、『建築文化』に載せてもらったりもしています。生涯慕い続けた唯一の先生だったと思います。

古谷｜土浦さんに対してはどうだったんですか？

花田｜蔵田先生に対してよりは、少しドライな思いを持っておられたのではないでしょうか。手紙からは、そういう印象を持ちました。

古谷｜なるほど。では、八幡浜市役所で仕事を始めてから、松村さんをエンカレッジし続けたのは内田（祥哉）先生ということになりますか。

花田｜松村さんにとって内田先生による発見は限りなくうれしいことだったと思います。戦後、八幡浜市役所で設計した、日土小学校を始めとした初期の作品も蔵田先生にお伝えして『建築文化』で紹介してもらっているんですが、蔵田先生から来た感想を読む限り、「蔵田先生には真に理解してもらえなかった」と思いながら付き合っていたように思います。

古谷｜蔵田さんは、日土小学校をご覧になったんですか？

花田｜少し後になってから、日土小学校に来てご覧になりますが、初期の作品は見ていない。松村さんは、たぶん少しモヤモヤしたものがある中で、内田先生から「新谷中学校をぜひ『建築学大系』の一冊に載せたい」という手紙を頂いた。その喜びたるや、松村さんにとっては言葉にならないほど大きなものであっただろうと想像します。

古谷｜この時すでに内田先生は「日土小学校は突如として生まれたわけではないのである」と書かれて[10]、それまでの研鑽の上に日土小学校が出来上がっていると指摘されています。そしてクラスター型や両面採光は、吉武先生がすでに研究としてやり始めていたのですが、ほぼ同じ時期に、松村さんの日土小学校が実作として生まれていたわけです。

花田｜その後、内田先生経由で建築学会関係のいろんな本に紹介されますし、松村さんにとってはアカデミックな世界に対する蔵田先生とは別の手掛かりが出来た感じがすごくあったと思います。ただ、松村さんの作品は、それより前にも意外と雑誌に紹介されていて、それは蔵田先生のおかげだと思います。初期の木造の学校建築や病院関連施設も紹介されていますし、日土小学校とか新谷中学校も載っていた。それは蔵田先生絡みの人脈とか彰国社の編集者の関係だと思いますね。

古谷｜年齢で言うと、内田先生より松村さんの方が10歳くらい上ですか？

花田｜そうです。内田先生は年下ではありますが、松村さんは非常に尊敬していました。

『文藝春秋』の特集
「建築家ベストテン―日本の十人」

古谷｜衝撃的なことが起こるのは『文藝春秋』の「建築

[10] 内田祥哉「日土小学校を見て」『建築文化』1960.2

家ベストテン」[11]ですね。日土小学校の東校舎が竣工したのは1958年で、「建築家ベストテン」の審査は1960年と書いてありましたので、結構早い時期に実施されたコンテストなんですね。

花田｜『文藝春秋』の1960年5月号にその時の審査経緯が載っていまして、とても面白いんです。当時、松村さんはほとんど知られていなかったと思いますが、7人いた審査員の中で、建築家の生田勉さんと建築評論家の神代雄一郎さん、川添登さんの3人が松村さんに票を入れ続けたようです。何回か審査が繰り返されたらしいのですが、そのたびに他の人の票は増えたり減ったりするのですが、松村さんは、その3人のおかげで、地方で頑張っている建築家として残るんです。そして、前川(國男)さんや丹下さん、村野(藤吾)さんと一緒に、ベストテンに選ばれるんです。

古谷｜そしてベストテンに選ばれてから、きっと、誰だこの人は…となったはずですね。その後、日本の建築界での反応とか反響は、何かあったんですか。

花田｜その辺が不思議なんです。1960年に日本の建築家ベストテンにまで入り、建築家と2人の評論家に推されて、ある種のデビューを果たすわけです。松村さんは、「これでいけるぞ」と思われたのかどうかは分かりませんが、松山に出て独立をされるわけですよ。

古谷｜あぁ、なるほど。

花田｜しかし、それ以降は建築雑誌に紹介されるようなことは減ってしまった。同時に建築のアカデミックな方面でも、『建築学大系』とか『資料集成』に載る頻度は一気に下がるわけです。その理由は明らかで、学会の推す学校建築は、その後はオープンスクールが主流になりましたので、その視点から外されていきました。建築ジャーナリズムの方面でも、独立後の松村さんの作品は以前に比べて鈍くなりまして、注目されなくなり、やがて孤立していくんです。

武智｜と言うよりも、地域の建築家として忙しすぎたのかもしれません。

花田｜そうですね。独立後、400何十件の設計をされていますから、結局は、そういう日々のお仕事が忙しくなっていった。それと、独立後は大きなものを木造でつくる機会がなくなって、コンクリートになっていきましたし、コンクリートと松村さんのデザインはやっぱりあまり合わなかった…。そういう悪循環が繰り返されたのではないかと思います。

河川課でのエピソード
松村さんは、「私が責任を取る」と…

古谷｜次に、保存再生の話をお伺いします。松村さんは、学校建築は35年ぐらいで取り替わるのがちょうどいいというお考えをお持ちでしたね。日土小学校はそれを越える年月と、すごい価値を持ったわけですが、保存再生については、地元のおふたりはどうお考えでしたか。

和田｜まず、松村さんにとって日土小学校は特別だったと思うんです。今までにやってきたことがここで開花した。川に突き出して、それこそ自然と交わるんだというところは、本人はすごく楽しかったのではないかと思います。それまでは使命感があったでしょうし、次はあれをやらなければと、いつも宿題を抱えていらしたけど、特に松村さんの話によると、外部の鉄骨階段は河川法違反を承知の上で、「料亭なら壊すが、ここは学校だから、ここで育つ子たちがこれから先こんな良い場所で学んだと感謝されるはずだ」と言い切って、「私が責任を取る」とまでおっしゃったそうです。そういう意味で今回の改修では、われわれも同じ運命を辿ったわけです。河川課は「外部の鉄骨階段は撤去しなさい…」でしたし、文化財的な要素があることもなかなか理解してもらえなかった。やっぱり1年半掛かりました。松村さんと同じでした。

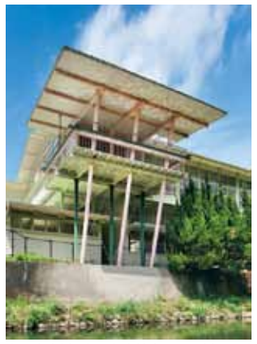
古谷｜なるほど。僕もパンフレットで今の河川課との経緯を読んで驚きました。木造学校建築の講演「木霊の宿る校舎」[12]に、その顛末が載っていたんです。読者の方はここまで読む機会がないと思いますので、ちょっとご紹介します。1期工事の時にも鉄骨階段とテラスが突き出していたんだけど、2期で鉄骨階段が出た時に「河川法違反だから土木事務所は工事を差し止める」と言ってきた。「私、そのときに言いました。これが料亭で川の上へ張り出して商売する、これは絶対に許せません。けれど、これは学校です。つまり、この学校で学んだ人が大人になり、異郷にあってふと思いだした時、学校のテラスの横に桜の木があった、もう散ったかな、五月になると、みかんの香りが教室に漂ってきた。夏はホタルが乱舞した、秋には柿やみかんが色づいて、冬になると枯葉が静かな川一面に沈んでいた。日暮になると宿直の先生が糸を垂れて小魚を釣りあげ夕餉の足しになさったものだ。あれが据え膳ならぬ釣膳だ、と過ぎし日をなつかしむことでしょう。所長さん大目にみて頂けませんか」[12]と。ここがたまらないんですが、「許してください」と謝るんですよ。ここに、気概というか気骨というか、「どうしてもこれを実現するんだ」という信念がある。そしてさらに、もう一度同じ困難に直面するにもかかわらず、皆さんは保存されたいと思われたわけですよね。

和田｜河川に突き出すことは、松村さんにとっては最も大事なところだったと思います。

古谷｜そうですね。校舎の中で、ある特別な場所をつくっておく。そこは遊びの場所と言えるかもしれないし、ぼーっとするための場所かもしれない。そういうものをつくっていく時の5本の指に入るような大事な場所ですもんね。

和田｜そうですね。突き出した鉄骨階段は、中校舎では1ヵ所だけですが、東校舎では欲が出たんでしょうね。図書室のベランダもそうですし、鉄骨階段はもっと過激な表現になった。使命感を持ちながらもっと挑戦的に…と思ったんでしょうか。

古谷｜でも、土木事務所の所長さんはよく許してくれましたね(笑)。



上―喜木川から見た東校舎｜下―川に張り出した図書室のベランダ

[11]「建築家ベストテン―日本の十人」『文藝春秋』1960.5
[12] 松村正恒「木霊の宿る校舎」「木の建築」No.3,1986.12

和田｜あの頃は、所長のOKが出れば占用許可が出た時代ですから、しぶしぶ許可してもらったんじゃないでしょうか。今回の河川課の方にも、「今度は重要文化財を目指しているんです」と言いまして、時代背景とか、その時代の学校の価値、日土小学校の価値、歴史とか意匠について、何度もご説明したのですが、今回もなかなか理解してもらえなかった。もう私の力だけでは無理だと思って、愛媛大学の曲田(清維)先生にもお願いして、一緒にお百度を踏みました(笑)。最終的には、県の土木部住宅課にも全面的にバックアップしていただけたんです。

子どもたちが映っている写真が見つかって
設計作業は急変

古谷｜改修計画をされている間に、子どもたちが映っている写真が見つかって、それによって、その後の方針が変わったと、どなたかお書きになっていましたね。

武智｜イーゼルを立てて絵を描いている写真ですか?

古谷｜そうそう、イーゼルの写真とみんなが東校舎のテラスに集まっている写真が出てきて、それが改修の時に大きな影響を与えたという記事がありました[13]。資料には「松村原図の特徴は速記で小さくて読みにくい。しかも詳細はメモ書きのように書いている。読み解いていくうちに、意図も伝わってきた。そんな時竣工当時のモノクロ写真」を花田さんが「発見され、その後の設計作業は急変した」と書いてありました。「その写真は昭和40年頃のもので、イーゼルに向かう児童や喜木川に突き出たテラスに集まり先生とひなたぼっこを楽しむ児童が映り込んでいた。これらは松村デザインの力であろう。これを反映するために、終盤だったにもかかわらず実施設計はこの時期から始まったと言っても過言ではない」という記事になっていました。

和田｜そうですね。正座して、しかもイーゼルでしょ。当時、イーゼルに向かって小学生が描いていたのは大発見ですよ。まるで美術学校の英才教育かな…っていうような感じの写真でした(笑)。今、こんな姿は見られない。つまり時代が見えるわけですよ。「あっ、この時代はこうだったのか」と。その時代の暗さと窮屈さを見ると、日土小学校は開放的で遊び場がいっぱいあって、環境から言うと自分の家よりはるかに良い場所なんですね。友だちもいるし、個にもなれるし、遊ぶことに対して結構、冒険的な場所もつくってもらっている。おそらくだけど、先生も一緒に鉄骨階段のところで、「気持ち良いよね」というような会話を子どもと同じ目線で楽しんでいたのではないか…と。

古谷｜さっきおっしゃっていた、遊び場をつくっていたのかなというのが、これにつながっていると思うんですが、要するに子どもたちにとっての居場所であり、先生も含めたみんなにとっての居場所なんですね。しかもここは授業を受ける場所というだけじゃなくて、1日の長い時間帯を子どもたちが暮らしている。

花田｜ですから改修計画の具体的なところに直接影響を与えたとか、何かが変わったというよりは、改修計画をするに当たってのわれわれの目標とか姿勢みたいなものを、その写真は正してくれた感じがします。

古谷｜なるほどね。

花田｜竣工からまもない時期だと思うんですけど、イーゼルを立てた写真の他に、東校舎の川に迫り出したテラスで団子になった子どもたちがいて、その中に女の子が佇んで遠くを見ている写真もあった。今時の学校に女の子がひとり佇んで遠くを見るような場所があるだろうか…と思いましたね。そういう学校だったことを、当時の写真が改めて認識させてくれましたので、改修計画とか、新校舎をデザインする時にも大きな手掛かりになっていきました。

武智｜建築空間だけではなくて、そういう子どもの居場所をそこここに仕掛けていた。そういうところを決して粗末にしてはならないことに気付いたんです。

入札の顛末
成立したこと自体が奇跡

古谷｜そういう情熱を傾けておられたわけですが、聞くところによると、実施設計が和田さんに決まるまでも、相当大変だったそうですね。

和田｜私たちは建築学会の一員として調査報告書をつくって、粛々と学問の世界で調査をすることになっていた。ところが鈴木(博之)先生が途中から「重要文化財を目指すんだ」と言われましてね、それから皆さんの目の色が変わりました。私たちも「建物が残ればいい…」と考えていたものが、目標が上がりましたし、その分、責任感も出てきました。ただ市としては、特に行政のシステムから言うと、設計料入札をしないわけにはいかなかったんですね。学会には武智さん、賀村(智)さん、三好(鐵巳)さんもいまして、みんな設計事務所なんですが、たまたま私が代表で入札に参加することになったわけです。私の事務所は公共事業をやったことがないにもかかわらず選手に選ばれて、書類の書き方も分からず、友人に教えてもらいながら参加したぐらいです。ほとんどボランティア状態の金額で入札した。ところが結果は、2者同額だったんですよ。同額の意味も分からないうちに、最後はクジ引きで決めるという話になりまして、そして引いたクジが当たった。これはもう奇跡としか言いようがなかったですね。

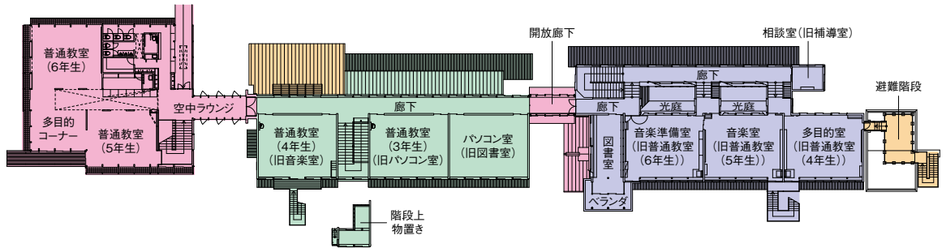
古谷｜本当に聞くだに恐ろしい話ですね。こういう質を評価しなきゃならないような時に、法律が盾になっているのは歯がゆいことですね。でも今の話を聞くと、成立したこと自体が奇跡でしたね。

花田｜最終的には、どの事務所が取っても、必ず監修者というかたちで学会のチェックを受けるという入札条件を付けて下さった。そこまでした上での入札ではあったんです。

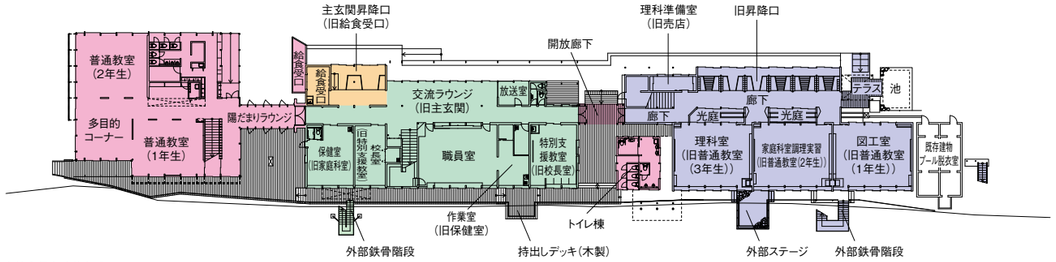
和田｜設計者は現場の監理者になれないルールがありますでしょう。

上―イーゼルに向かう小学生[所蔵:日本建築学会四国支部(松村家旧蔵)]｜下―東校舎のテラスで佇む少女[出典:『建築文化』1960.2]

[13] 和田耕一「小学校として使い続ける文化財を目指して 東・中校舎保存改修」『住宅建築』2008.12



改修・改築後2階平面図



改修・改築後1階平面図 1/700

凡例
- 中校舎保存改修部分（建築基準法）
- 東校舎保存改修部分（耐震改修法）
- 増築部分
- 改築部分

日土小学校 改修・改築後１階・２階平面図
［提供：八幡浜市］
中校舎１階では、職員室から運動場への視認性を高めるために、間仕切り位置や壁面デザインを変更した。また昇降口を東校舎から中校舎の職員室前に移して主玄関昇降口とし、人や物の出入りを集約した。２階では、音楽室を改造して２つの普通教室と新西校舎への廊下をつくった。東校舎は、１・２階とも普通教室から特別教室へ用途を変更したが、部屋の意匠は原則として当初の状態に戻した。東・中校舎の間にあるトイレ棟と開放廊下は、それぞれ機能的・法的理由から、当初の意匠を意識しつつつくり直した。西校舎は解体し、各階２つの普通教室がある新西校舎をつくった。川側には木製デッキを新設し、親水性を高めた。［解説：花田佳明］

上―図書室内部｜下―同ベランダ

古谷｜第三者監理ですか。

和田｜はい。監理者になれなかったので、現場ではどういうことになるか心配です。そこで市としては、“設計意図伝達”という業務を設けてくれたわけです。これは、設計者の責任の範囲で「現場でなければ伝わらない重要なことについては指示しなさい」というもので、それで助かったわけです。

古谷｜監理は別の事務所が？

和田｜そうです。現場では監理者と施工業者でやっているわけですが、設計意図伝達という業務の中で発言権を頂きましたので、現場監督にも市の担当者にも、「何か問題があればすぐ連絡をくれ」と頼んでおきましてね。それが唯一、命綱だったわけです。

古谷｜そうでしたか。そしていよいよ着手なさった。この日土小学校は木造ですし、木造と言っても古民家のような骨太の木造じゃなくて、非常に華奢でスレンダーな松村美学をもって出来ているハイブリッド構造で、鉄筋のブレースとかそういうメンバーも使われている。その中で耐震改修をしなければいけないし、素材的にも長持ちするものに置き換えなきゃいけない。今では手に入らないものもあったかもしれない。そんな状況で改修するのはすごく大変なことだったと思うんです。技術的には何が大変でしたか。

和田｜設計者は松村正恒ですから、それをいかに忠実に継承するかが最も大事なわけですね。また、改修工事費は一般的な学校の耐震工事予算なので、果たして文化財的な改修ができるのか、それが非常に不安でした。だからこそ、改修する時の考え方を徹底し、共有化することが大事だと決めていました。しかし私たちは文化財の専門家ではないですから、その後は知恵比べでした。難しかったことはいろいろありますが、強いて言えば色、着色ですね。

古谷｜色ですか。どうやってオリジナルの色を調べたのですか？

和田｜色は５回、多いところは６回塗り替えています。１番下の色をもとの色に決めて、ペーパーで１枚ずつはがしていくんです。日土小学校の場合は、各教室は違った色で塗られていて、だいたい３種類の色が使われていました。ブルーグレー系とモスグリーン系と…。

古谷｜サクラ色みたいな、ピンクですよね。

和田｜そうそう、サクラ色です。教室からこんなピンク色が出てきたら大変だろうと思いながら作業するわけですが、現場からはそのピンク色が出てくるんです（笑）。でもそれは忠実に守らなきゃならないでしょう。ところが塗ってみますと、その部屋は優しいというか、１番美しいんです。そして、木造部分はすべて着色しているわけで、していないところは工業製品になる。つまり、ベニヤ板は着色せずにオイルステインを掛け、ヒノキ、スギなど地元材の軸組はすべてペンキを塗っている。これが日土小学校の特徴です。
例えば、現場に入って慎重にチェックしていきますと、図書室に変な柱が出てきまして、よく見ると床柱のような柱で、山小屋風であり数寄屋風でもある不思議な空間なんです。さらに天井はスギ柾ベニヤで、その隣の天井は銀の揉み紙を貼っている。そして柱のペンキは塗りが４回のようだった。つまり、他のところより少なかったんですよ。

花田｜そうそう、和田さんから「塗っている回数がどうも１回少ない」と言われて、持っていた写真を改めてスキャニングし直してパソコンの画面で拡大してみると、確かに節が確認できたわけです。「和田さん、この柱は塗っていない。まるで床柱みたいだ」と（笑）。

和田｜そうなんですよ。こうしていつも花田さんとの電話合戦が始まったんですよ（笑）。

花田｜現場にいる和田さんからしょっちゅう電話が来たんです。例えば、「ピンク色なんだけど全部塗るぞ、いいか」、「現場から出てきたならしょうがないじゃないですか」みたいな話になりましてね…（笑）。そういう目で改めて見るといろいろ分かってきまして、それらの情報を今度は和田さんから現場に返して再現していく。そういうことをあちこちに関してやりました。

古谷｜なるほどね。構造の話も少し伺います。構造は腰原（幹雄）さんですが、ブレースは意匠を変えないでダブルにしたり、そういうデザインのコントロールで何とかもとのイメージを残せたそうですね。

和田｜みんなで相談してやりました。

花田｜教室が５スパンある中にブレース１個ではもちろん足りない。腰原さんが最初、「2ヵ所か3ヵ所入れられないか」と言うんですね。「そんなことは絶対ダメだ」と…（笑）。

武智｜われわれに選択肢を与えて、どれが一番、文化財にふさわしい改修かを見ている…。

花田｜幸い合わせ柱でしたので、「２連にできないか」、「なんとかしよう」という話になって２連で１ヵ所になりました。２階はシングルでいいと言われましたのでちょうど良かった。柱も合わせ柱じゃなかったのでラッキーでした。

古谷｜構造材自体は問題なかったんですか。腐食とか、材は健全だったんですか？

花田｜健全でした。

和田｜シロアリがいなかったんです。初めは、川のすぐそばなのでシロアリを心配していたのですが、地形的にこの川筋に沿って風が強く吹くんですよ。

花田｜その風で床下がよく換気されていたんです。

古谷｜それは良かったですね。そして50年を経て、これからも使い続けることになったわけですが、教室を特別教室化して機能を少し変更されましたね。この辺についてはいかがですか。

和田｜この時、腰原さんとみんなで協議したのは、耐震補強の方法です。東校舎は特別教室としてほぼ忠実に保存し、中校舎は機能を充実させることで間仕切り移動など大胆な改修になりました。当時、大阪の池田小学校でしたか…。

古谷｜あぁ、悲惨な事件がありましたね。

和田｜はい。侵入者が押し入って児童を傷つける事件がありまして、PTAの方がとても心配されたんです。最終的にはそれを受けて「大きく変えよう」となりまして、デザイン自体も変わりましたし、構造的にも大きく変わりました。現代の改修にとって重要なのはそこなんです。この壁を取っ払って新しく耐力壁を追加したということを、50年先の人たちに分かるようにしなければならない。この間仕切りは今の機能で追加した。だから復元する時は、取っ払ってもいいですよ、そういうメッセージを次の時代の人たちに伝えていく。おそらく木造の耐震改修も進化するでしょうから、方法は任せる…ということを記録として伝えるわけですね。

花田｜僕は、もともとは東校舎を普通教室のまま使いましょうという提案をしていたわけです。だけど住民の方から「やっぱり１日の中で子どもが一番長く過ごす場所は、なるべく新しくしてほしい」ということになりましたので、機能を入れ替えたわけです。

古谷｜特別教室としてですね。

花田｜はい。そして普通教室は新校舎につくる。結果論ですけど住民の方のご希望も入れたことは良かったと思います。途中から重要文化財になるかも…という鈴木先生のお話も出て、本当に、一番良いかたちで落ち着いたと思いました。

和田｜問題だったのは基準法ですね、大変でした。基準法は結構見直しがあるじゃないですか。一方、僕らの使命は重要文化財ですから、不変性です。基準法によって不変性が失われていくわけです。当時、鉄骨階段は当然、児童が使っていたわけですが、今回は使えなかった。ステップの高さが基準法よりわずかに高いんです。児童の使えない階段は、教育委員会としてはダメだと言うわけですよ。一方、こちらは文化財を目指していますから、これを取っ払うと文化財ではなくなる、諦めなきゃならない。そこでみんなが頭を抱えました。そして決めたのが非常の避難階段。

花田｜いや、理屈としては、階段じゃなくて器具です。

和田｜そうそう、器具になって丸く納まったんです。避難器具です。

花田｜最初は鉄骨階段をつくり直そうとしたんです、ステンレスで。基準法に合う蹴上げと踏み面で…。そしたら文化庁からクレームがついた。「オリジナルじゃないと文化財はダメでしょ」と。

和田｜危機一髪でしたね。同じデザインでつくろうとしたものが、急に変わった。その時はさすがに私が現場にいて良かったと思いました。

武智｜それも知恵の出し合いみたいな感じでしたね。

古谷｜これからも使い続けていく小学校だから、何が何でもオリジナルの機能や形をそのまま保存するとなると、立ち行かなくなる。そこで、ある柔軟性が求められますよね。必ずしもスクラップアンドビルドしなくても、柔軟に考えて必要なものを補って、必要なところを改変する。適宜組み合わせることによって長らえさせることができる。そういう意味で示唆的だったと思いました。

重要文化財の隣に建つ新西校舎
最終的にはチームの力で…

古谷｜武智さんは新西校舎で今までの注文を全部引き受けることになったわけですね。これもずいぶんご苦労があったと思います。一番苦労されたところは何ですか。

武智｜重要文化財を目指した校舎の隣に新しい校舎を建てるというプレッシャーは、やはり大きかったですね。鈴木先生から「一緒に重要文化財に統合されても不足のない建築を目指すように」みたいな話がありましたが、それぐらい気合いを入れたところはあります。

図工室（旧普通教室（１年生））

談笑をする花田氏（中左）、和田氏（中右）、武智氏（右）と古谷氏（左）

そしてひとつは松村正恒の建築をきちっと継承していくことが今回の使命だと思いました。それともう一つは50年が経過した時点で、松村さんに対する畏敬の念を込めて「技術はここまで進歩しました」とご報告したい。松村さんが達成できなかったこと、いろんなリスクや欠点があったと思うんです。文化財と言えども、機能的な面とか性能的な面、構造的な面、管理面、そういう旧校舎が達成できなかったことをひとつずつ洗い直して解決する。それが彼に対するわれわれ建築家の捉え方だろうし、なおかつ子どもに対する、あるいは学校側に対する設計姿勢だろう。そういう目標を立ててやりました。

古谷｜全く新しいものをつくったんだけど、総体として初期に松村さんが目指した生活の場としての教室の環境とか外部の自然との関係、そういったものがつながっている。そこで最初に込められた意図が果たされていると僕は感じました。

武智｜私の知恵だけではなくて、最終的にはチームの力でプランがまとまったんです。松村正恒を継承する部分については松村以上に子どもの居場所、そして松村になかった教師の居場所と言いますか、教師と子どもの接点みたいな空間が取れないか。とにかくお手本が隣にありますので、それと比較・検討しながら達成できたかなと思います。

古谷｜バリアフリーも果たされましたね。

武智｜はい。中校舎の音楽室だったところを廊下に取り込んで改変しました。中校舎から空中ラウンジで新西校舎に渡りますと、すぐ右手のスロープが隣の体育館の2階レベルにつながっているんです。そこからさらにスロープで地上にアプローチできるように整備しました。

花田｜こういった改修・改築工事の全貌を多くの方に知っていただきたいと思いまして、現在、工事報告書を再編集し、『日土小学校の保存と再生』という本[14]をつくっているところです。宣伝になってしまいましたが、まもなく刊行されますので、ぜひご覧いただきたいと思います。

複数の時間が共存する空間の素晴らしさ
次の時代への記憶装置に…

古谷｜花田さんが『新建築』に書かれた巻頭論文[15]の中で「複数の時間が共存する空間の素晴らしさ」、「複数の時間がそこに共存することで、今回つくられた部分を含め、新しい日土小学校がさらに次の世代に対する記憶装置になっている、することができた」とおっしゃっています。それについて少しご説明いただけますか。

花田｜はい。東校舎、中校舎、新西校舎と3つありまして、先ほど言いましたように住民の方のご希望もありましたから、東校舎は時々使う特別教室でいい。しかし意匠的には、ほとんどの部分を徹底的にオリジナルに戻す。いわば“過去”が再現される。そして中校舎は「運動場への見通しを良くしたい」というご希望がありましたので、わりと手を入れていろんなリクエストに沿うようにしましたから、抽象的に言えば“現在”がある。新西校舎は松村さんのデザインは継承しつつ、新しい技術や計画論でつくっていますので、“未来”があると…。ちょっと格好良すぎる言い方かもしれませんけど、そこには3つの時制が混在している。実際に校舎内を行ったり来たりしていると、非常に不思議な感覚にとらわれて、僕なんかはタイムトンネルの中をさまよっているような気になりました。子どもたちがどう感じているか分かりませんが、学校の姿としては、かなり理想的な状態ではないか。“今”の考え方だけで出来た空間の中じゃない場所にいる、それを実現できたことはとても良かった。そういうことが近代建築を保存再生することの一番の意味じゃないか。文化財として近代建築を使い続けることを考えると、そういう時制が混在した空間がちゃんと得られた。そんなことを実感しました。

古谷｜これが実在して、またさらにここから先何十年か実在し続けられる。そういう状態にもう一度リセットされた。

花田｜そうです、新しい出発点へとリセットできた。

古谷｜一番古い部分も含めて、今後もそれを共有して、折節にそれにじかに触れられるものとしてここにあり続ける。そして、後には建築学会の業績賞もお取りになったし、アメリカのワールド・モニュメント財団のノール モダニズム賞もお取りになった。結果として重要文化財にもなった。ということは国民にとっても共有する価値を持ち得たわけですね。それは素晴らしいことだと思いますし、それこそ地元の皆さまの信念と、松村さんに叩き込まれた気概みたいなものが、難関であったあの図書室のベランダをもう一度存続させることまで、結果としては成し得たわけですよね。

花田｜そうですね。ワールド・モニュメント財団から賞を頂いたわけですが、彼らが今回のプロジェクトで何を評価したかが、きちっと書かれているんです[16]。その中の1つは、近代建築の保存再生は、今、世界中が抱えている問題だけれども、日土小学校の保存再生は、それに関するいろいろな活動のモデル、お手本になると書いて下さったんです。つまり、埋もれていた松村をディスカバーした。近代建築を設計した人は埋もれている可能性がある。それを建物も含めてディスカバーした。そしてその保存再生に、地域と行政、建築家と研究者が一体になって尽力した。そういうこと全体がお手本だと言って下さっています。自分で言うのも変ですが、とてもうれしかったですね。

古谷｜そうでしょうね。では最後に、この日土小学校の保存再生がうまくいった理由は、何だと思われますか。

花田｜みんなが松村さんの精神を受け継ぎながら力を合わせることができたのはもちろんですが、あえて即物的に言うと、松村さん自体の設計方法が、論理的にきちっと組み立ててありましたから、引き継ぎやすかったし、いじりやすかったという点も忘れてはならないと思います。

古谷｜なるほど。残された校舎が松村さんの教えを伝える記憶装置となったのかなと思います。

花田｜継承と対比といったことを考えやすく、武智さんが新西校舎を設計する時の手掛かりも引き出しやすかったと思います。そしてもう一つは、今日は残念ながらここに全員は揃ってはいませんが、チームが良かったことがあると思います。賞を頂いた7人[17]以外の方も含めて、常に建築的な議論と歴史的な議論、現実的な対応みたいなことがフラットな関係でやり取りできるチームだった。これがすごく大きかったように思います。

古谷｜そうでしょうね。

和田｜ただ、ひとつ忘れてはいけないのは、改修することに対して地域を二分する運動があったことです。

古谷｜保存するか、建て直すか…ですね。

和田｜そうです。市も一緒に悩みましたし、私たちも悩みました。その想いをこれからもまた次の時代まで50年、100年と継承していく。

古谷｜なるほどそうですね。今回の改修が終わった時に、教育委員会の梶本（教仁）さんが、「日土小学校再生がもたらしてくれたこと」[18]という記事の中で「おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さんが学んだ同じ校舎で子どもたちが学ぶことは、地域のつながり=『絆』を深めるものである」と書かれていた。僕はそれに尽きるような気がするんです。保存するか、建て直すかで奮闘されましたが、おかげでこの校舎を通じて松村さんの声を聞くことができる。将来の子どもたちにもそれが残されたという意味が、何となくじわじわと伝わっていくものと期待します。

本日は、長時間ありがとうございました。

［収録：2016年2月16日］

［取材協力］八幡浜市教育委員会

［14］『日土小学校の保存と再生』［八幡浜市教育委員会監修、「日土小学校の保存と再生」編纂委員会編、鹿島出版会／2016］
［15］花田佳明「日土小学校の保存再生がくれた夢」『新建築』2009.11
［16］『World Monuments Fund/Knoll Modernism Prize』［World Monuments Fund／2012］
［17］鈴木博之（青山学院大学教授・東京大学名誉教授、故人）、曲田清維（愛媛大学教授）、花田佳明（神戸芸術工科大学教授）、和田耕一（和田建築設計工房主宰）、武智和臣（ATELIER A&A代表取締役）、腰原幹雄（東京大学生産技術研究所教授）、八幡浜市（市長・大城一郎）の6氏1市（所属はいずれも当時）
［18］梶本教仁「日土小学校再生がもたらしてくれたこと」『八幡浜市立小学校と松村正恒展―木造モダニズムの可能性』［竹中工務店編、竹中工務店／2011］

はなだ・よしあき――神戸芸術工科大学教授／1956年生まれ。1980年、東京大学工学部建築学科卒業。1982年、同大学大学院修士課程修了。1982–92年、日建設計。1992–97年、神戸山手女子短期大学専任講師・助教授。1993年、神戸芸術工科大学助教授。2004年より現職。博士（工学）。
主な著書：『再読／日本のモダンアーキテクチャー』［モダニズム・ジャパン研究会編、彰国社／1997］、『植田実の編集現場』［トトルズ／2005］、『初めての建築設計 ステップ・バイ・ステップ』［共編著、彰国社／2010］、『建築家・松村正恒ともうひとつのモダニズム』［鹿島出版会／2011］、『日土小学校の保存と再生』［八幡浜市教育委員会監修、「日土小学校の保存と再生」編纂委員会編、鹿島出版会／2016］など。

わだ・こういち――建築家／1951年生まれ。1974年、福井工業大学卒業。1974–75年、東海大学大学院研究生。1975年、高橋建築事務所。1977年、和田建築設計工房設立。1996–2016年、愛媛大学農学部森林資源非常勤講師。
主な作品：ケンマツウラレーシングサービス本社［1992］、ヘリテイジセンター四国鉄道文化館・十河信二記念館［2007］など。

たけち・かずとみ――建築家／1951年生まれ。1974年、名城大学建設工学科建築分科卒業。1974–77年、平建築研究所。1977–78年、武智技建。1978–83年、TOMO建築設計事務所。1983年、ATELIER A&A設立。
主な作品：内子町農村活性化センター［1992］、内子町道の駅フレッシュパークからり［1997］、TOBE AUBERGE RESORT［2009］、伊予市立翠小学校エコ改修と環境教育事業事務局［2009］、オーベルジュ内子［2010］など。

ふるや・のぶあき――建築家・早稲田大学教授／1955年生まれ。1978年、早稲田大学卒業。1980年、同大学大学院博士前期課程修了。1986年から1年間、文化庁芸術家在外研修員としてマリオ・ボッタ事務所（スイス）に在籍。近畿大学助教授を経て、1994年、早稲田大学助教授、NASCA設立。1997年より現職。
主な作品：アンパンマンミュージアム［1996］、詩とメルヘン絵本館［1998］、早稲田大学會津八一記念博物館［1998］、ZIG HOUSE／ZAG HOUSE［2001］、近藤内科病院［2002］、神流町中里合同庁舎［2003］、茅野市民館［2005］、高崎市立桜山小学校［2009］、小布施町立図書館「まちとしょテラソ」［2009］、早稲田大学理工カフェ［2009］、鵜庵［2009］、T博士の家［2010］、実践学園自由学習館［2011］、熊本市医師会館［2011］、中河原保育園［2012］、ルビシア滋賀工場［2012］など。

座談会後記――古谷誠章

無級、無給、無休の建築士がひたすら実現した次世代を育む建築

僕が生前の松村正恒さんにお会いしたのはたった一度だけだったが、それでも相当鮮烈な印象が残っている。たしか松山で開かれたお祝いの会で、松村さんは模造紙に筆でいろいろな言葉を書き付けながら、土瓶の絵なども描いて、訥々として、しかし情熱的に建築の道を説いていた。講演に続いてご自身が狂言も舞われて、当時住んでいた広島から船で出掛けた僕は、その不思議な人柄に触れたのをとてもよく覚えている。

今回、松村さんを身近に接してきた愛媛からのおふたりを迎えて改めてお話を伺うと、地元で後進を育てようとする素朴な愛情のようなものを、さらに深く感じた。東京に学んだ国際性と、郷里に根差す風土性を、ふたつながらに身に付けていた松村さんというのは、あの頃ではかなり稀有な人物であったことがうかがえる。座談会中にも紹介した川の上に張り出した図書室のベランダを巡っての土木事務所所長とのやり取りを読んだ時、この学校で学ぶ子どもたちのため、全く利他的な建築家の姿勢に深く心を打たれたのである。

本四架橋が架かる前の四国は、本州とは隔たった、ある種、独特の雰囲気を持っていたように思うのだが、海の幸に恵まれ、気候の温暖な愛媛は、その中でも大げさではない“精神の豊かさ”が涵養（かんよう）されたのではないだろうか。僕が日土小学校をことのほか好きなのは、この校舎のあちこちにそれと同じ豊かさが横溢しているからだと思う。

初めて訪れたのは20年以上も前だったが、光庭が功を奏して北側廊下とは思えないほど明るく開放的な雰囲気、子どもたちを出迎える靴箱は透明感を持ち、ふわっと浮かび上がっていて、とかく砂ぼこりで惨めな感じになりがちな最下段がないことも、強く心に残った。廊下と教室の間の不思議な“間”の空間は、1階でも2階でもうまく機能しており、優しく気持の良い境界領域が生まれている。この何気ない空間も、川面に張り出した鉄骨階段やベランダと共に、きっと子どもたちの記憶にも残るだろうなと思われた。

今回、改めて皆さんの話を伺って、この校舎の保存や改修に尽力した人々が、ここで過ごす子どものことを思う松村さんの姿勢を、この校舎の各所に残る魅力的な空間から、深く感じ取っていたことが分かった。さらに後世に校舎を残してそれを伝えようと心血を注いだのも、この建築が標本のようなモニュメントとしてではなく、実際に生かされ続けてこそ、その姿勢を伝えることができると確信していたのだろう。深く合点がいった。

テキスタイルデザイナー・真木千秋さんの巻

Chiaki Maki

中村好文：文とイラスト
Yoshifumi Nakamura

命拾い

2001年の冬、私が初めてインドを旅したときのことです。
ある日、デリーのホテルの6階にあるレストランでテキスタイルデザイナーの真木千秋さんたちと朝食を食べていますと、突然、グッラ、グッラと建物が揺れ出し、煉瓦造の建物全体がミシッ、ミシッと不気味な音を立てて軋(きし)みはじめました。 ウェイターが青ざめた顔で「地震、地震！、すぐ逃げて！」と英語で叫び、階段室を指さしました。 私たちは「それっ」とばかりに地上まで一気に階段を駆け降り、さらに建物が崩れ落ちたときに下敷きにならない場所まで避難して揺れの治まるのを待ちました。
地震の震源地はアーメダバードのあるグジャラート州で、地震の規模はM7.7だったそうです。 グジャラート州全域で死者2万人を越える大きな災害になりました。

言い忘れましたが、このときの私の旅の目的はアーメダバードにあるル・コルビュジエ設計の「サラバイ邸」を訪問することでした。
当初の予定では、私は地震の前々日の夜にアーメダバードに入ることになっていたのですが、「サラバイ邸」を案内してくれることになっていた女性の都合で、急遽、予定を3日ほど延ばしていました。 そして、この予定変更のおかげで大地震に巻きこまれず、危うく「命拾い」したわけです。
この大地震で空路も陸路も絶たれ、結局、このとき私はアーメダバードには行けずじまいで帰国しました。

ヒマラヤの麓、デラドゥンへ

真木さんはそのあともデリー通いを続け、地元の職人たちと独特の色彩と風合いを持つ真木テキスタイルスタジオならではの草木

ディスプレイ台にズラリと並べた蚕、繭、糸、布。そのひとつひとつについて興味尽きない解説をする真木さん

［撮影：中村好文+レミングハウス］

上―東側の庭先にインドにおける真木テキスタイルスタジオの仕事内容を紹介するディスプレイ台が設えられている。 奥に見える四阿（あずまや）の中に遊牧民の分解・組立式の地機（ちばた）がある
下―半屋外の作業場はいつの間にか庭に繋がっていく。 気持の良い季節は庭も仕事場になる。 菜の花をバックに糸巻き作業をする男女

染めの手織りの布と、その布で仕立てた衣服や袋物などの小物を作り続けていました。
真木さんを見ていていつも感心するのは、その軽やかな「フットワーク」です。いや、「フットワーク」というより「神出鬼没ぶり」と表現したほうが適切かも知れません。
「今ごろの季節、真木さんはインドにいるんだろうなあ」と噂していると、小田原のギャラリーから「今夜、真木さんのトークイヴェントがあるので、よかったら来ませんか？」と声をかけられたり、突然「先週から西表で新しい布を織っています。ちあき」という葉書が届くといった具合（真木さんはとても筆マメな人です）。
そして、そのようにして「インド」と、「西表」と、日本の拠点の「あきる野」の工房で染めたり織ったりした布や、仕立てた服が、全国各地のクラフトギャラリーやデパートの催し物会場に、涼やかに、華やかに並ぶのです。もちろん真木さん自身もその布たちと一緒に店頭に並びます。
2010年、真木さんは、大気汚染がひどく、空気がどんどん悪くなる一方のデリーから制作の拠点をヒマラヤの麓のデラドゥンに移しました。デラドゥンには真木テキスタイルスタジオのスタッフ、ラケッシュ・シンさんの両親の家があり、その敷地内の「ガンガ工房」が真木さんのインドでの制作の本拠地になったのです。
今回、この頁で取り上げるのは、真木さんの仕事と暮らしが渾然一体となった「ガンガ工房」ですが、その前にちょっと寄り道して、現在、デラドゥンで進行中の真木テキスタイルスタジオのプロジェクトを紹介しておきたいと思います。
真木さんがデラドゥンに移って2年後の2012年、真木さんは「ガンガ工房」から車で15分ほどの山裾に、新工房と住まいを構えるのに良さそうな3,500坪の土地を手に入れました。
折も折、乃木坂の「ギャラリー・間」でビジョイ・ジェイン氏率いるスタジオ・ムンバイの展覧会が開かれていました。真木さんとパートナーのばるばさん（名前は風変わりですが日本人です）はこの展覧会を観に行き、たちまちその仕事ぶりと作品に魅せられ、新しい工房の設計をこのビジョイ氏に依頼しようと決めたのです。そして、ビジョイ氏に連絡したあとで、私に知らせてくれました。
じつは、私は、スタジオ・ムンバイの仕事を2010年のヴェネツィア・ビエンナーレの会場でつぶさに見学して感銘を受け、職人集団と二人三脚でモノづくりをするその姿勢に大きな共感を覚えていましたから、この話を聞いたとき、即座に「スタジオ・ムンバイなら、大賛成！」とふたりに伝えました。
ビジョイ氏設計による真木テキスタイルスタジオの新工房と住まいの建設プロジェクトは2012年に始まり、「着々と」というより、インドだけに「牛歩のあゆみ」で進んで来ました。昨年（2015年）の春ごろ、真木さんと電話で話したとき「年末には完成するって聞いてたけど、どんな具合？」と軽い気持で訊ねますと「それが、遅れ遅れなの、もし見に来てくれるなら、年明けのほうがいいかも…」という返事。
スタジオ・ムンバイの仕事は、私はもちろんのこと、私の事務所のスタッフにとっても関心の的であり、憧れの的です。こうした電話のやりとりをロバ耳で聴いていたスタッフ一同から「連れてってオーラ」が陽炎のように立ちのぼり始めました。
こうなると仕事は手につきません。そして「よし、研修旅行ということにして、見学に行こう！」と、今年（2016年）の1月末、スタッフと友人の総勢17人は勇んでデラドゥンに向かったのです。
予想したとおり、工事現場には、ゆったりとした「悠久のインド時間」が流れていました。完成どころか、まだ壁の立ち上がっていないところや、屋根の架かっていないところなどもあり、スタッフと思わず顔を見合わせ「やっぱりね」と、うなずき合いました。

左―ラケッシュさんの作ってくれた賄いランチは本格的な北インド料理。お行儀良く並んでお皿に好きな料理を好きなだけ盛りつけていく真木さん（左）と私｜上―沙羅双樹の葉っぱで作ったお皿に盛りつけた、チャパティ、ラディッシュサラダ、アチャール（ピクルス）、2種類の豆のカレー、芥子菜の蒸し煮など。どれも美味しくて2度、3度、お代わりする

ガンガ工房

閑話休題。話をもう一度、いま現役で稼働中の「ガンガ工房」に戻しましょう。
デラドゥンに到着した翌日、真木さんの招きで「ガンガ工房」を訪ねました。先ほど書いたように、ここは、もともとはラケッシュさんの両親の住まいですが、敷地内はインドにおける真木テキスタイルスタジオの工房になっています。真木さんとばるばさんがインドに滞在するときの住まいは、両親の住んでいる主屋の2階です。
この日、真木さんはインドにおける真木テキスタイルスタジオの仕事内容を我々一行に説明するために庭先に台を設え、その上に数種類の野蚕の繭玉をはじめ、色とりどりの絹糸、綿糸、麻糸、羊毛の糸、そしてその糸で手織りした布や、仕立て上がった布製品などを綺麗にディスプレイして、小一時間ほどレクチャーしてくれました。
真木テキスタイルスタジオの染織の仕事の特徴をひとことで言えば「手仕事による一貫作業」ということになるでしょうか。絹織物を作りたいと思ったら蚕を飼って繭から糸を引き、その蚕を飼うために桑の樹を植林して育て、藍染めするために藍を栽培する…といった具合です。それぞれの作業には何百年も前から続いてきた伝統的な手法（称賛をこめて「前近代的な手法」と表現したいと思います）が脈々と引き継がれているのも大きな特徴と言えるでしょう。その言葉のはしばしからは手仕事に対する「畏敬の念」と「敬愛の念」がひしひしと伝わってきます。そして、その仕事について語るときの真木さんの的確で懇切丁寧な解説は見事というほかありません。染織の世界について知識らしい知識を持ち合わせていない建築分野の我々にとって、染織の世界が目の前に大きく拓かれていくような、有意義なひとときでした。
講義が終わったあとで、真木さんに工房内の作業場をガイドツアーしてもらいました。
工房全体は「この仕事にはこの場所」という具合にゾーニングされていて、それぞれの持ち場にはインド人の男女スタッフが黙々と自分の仕事に専念していました。もの珍しいせいもありますが、その手作業のひとつひとつと、働いている人たちの熟練の手わざから目が離せず、ついつい見入ってしまうのでした。
染織は、絹糸や綿糸や麻糸を作ったりする仕事から始まって、それを染める仕事、染め上げた糸を機にかけるための整経の仕事、織の仕事、織られた布の手触りと風合いの加工をしたり、端を整えたりする仕上げの仕事、縫製の仕事…といった具合に仕事の内容が多岐にわたり、それぞれにそれなりのスペースが必要ですから、居住スペース以外は、門を入った正面と東側にある庭を含めて200坪ほどある敷地全体が仕事場という感じになっていました。
いま、庭を含めて仕事場と書きましたが、真木さんが染織のレクチャーをしてくれた東側の庭の片隅に、畳でいえば四畳半ぐらいの四阿のような可愛い建物が建てられており、中に作り付けられた機で中年の女性が織物をしていました。このあたりにはまだ羊を追って生活する遊牧民がいるそうですが、彼らは地面に掘ごたつのような穴を掘り、丸太とわずかな角材で組み立てた機で織っているそうです。その地機と呼ばれる簡素きわまりない機は、分解・組立式で、遊牧のために移動した先で組み立てて機織りするとのこと。私には、庭の片隅にあるこの建物が、真木さんの染織精神を象徴する小神殿のように思えました。

賄いランチ

さて、先ほど名前の上がったラケッシュさんはデリーのレストランで働いていたこともある料理人です。あきる野市の真木テキスタイルスタジオでもイヴェントのあるときは、本格的なインド料理を作って出してくれますが、デラドゥンでも我々一行のためにインド式の賄いランチを作ってくれました。お行儀良く並んで、沙羅双樹の葉っぱで作ったお皿の上に心のこもった手料理を盛りつけていきながら、私は小学生のころの給食の時間を懐かしく思い出していました。

なかむら・よしふみ――建築家／1948年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。1972–74年、宍道設計事務所。1976–80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。
主な作品：三谷さんの家［1986］、REI HUT［2001］、伊丹十三記念館［2007］など。
主な著書：『住宅巡礼』［新潮社／2000］、『住宅読本』［新潮社／2004］、『意中の建築 上・下』［新潮社／2005］、『Come on-a my house』［ラトルズ／2009］、『普通の住宅、普通の別荘』［TOTO出版／2010］、『建築家のすまいぶり』［エクスナレッジ／2013］など。

敷地全体を「コの字」型に囲むように染織作業に必要な建物が配置されている。波板屋根と簡単な腰壁で囲んだ半屋外的なスペースと庭が一体になって有効に使われる

上―半屋外の建物の中の染場（そめば）。この場所なら薪を燃やしても煙がこもらないし、干し場と直結しているので便利。粘土で作った大・中・小の「かまど」と、大・中・小の「鍋」が微笑を誘う｜中左―大型の機（はた）で広幅の布を織る男性の機織り職人。インドでは機織りは男性の仕事｜中右―日だまりに足踏み式の紡毛機（ぼうもうき）を出して羊毛を紡ぐ女性｜下―仕上げ室内部の様子。女性の仕事場らしいあたたかく和らいだ空気に包まれていた

伝統を継承しながら再生する日本橋のまちづくり

江戸開府と共に発展した日本橋。五街道の起点としてだけではなく、物資の集積地であり、江戸文化の中心地でもあった。明治期には金融の主要施設が集まり、老舗百貨店が威容を誇る近代化の象徴として今日まで発展してきた。それがバブル崩壊後、徐々に活気を失っていく。
1999年の東急百貨店日本橋店の閉店は、地元に大きなショックを与えた。かつて日本の中心であった日本橋地区の歴史や文化を再興し、活性化させることを目標に、町内会、企業、老舗、行政の有志が集まり「日本橋地域ルネッサンス100年計画委員会」が発足。地域一体となったまちづくりが始まる。また、地元ディベロッパーである三井不動産は「日本橋再生計画」を発表。2014年10月には、５つの街区からなる大規模な開発「日本橋室町東地区開発計画」が全体竣工し、中核を担う複合施設「COREDO室町1・2・3」は、江戸情緒が残る地元色を売りに、新たな観光スポットを創出している。
本特集では、ハードとソフトが連動した日本橋ならではのまちづくりを紹介する。

中央通りから日本橋三越本店方面の眺め：“和”をコンセプトにした新しいまちづくりが奏功して、賑わいを取り戻しつつある日本橋。新しい観光スポットとなったCOREDO室町１・２・３には外国人観光客が老舗ブランドの品々を手にしていく姿も多い。2020年の東京オリンピック・パラリンピックを好機ととらえ、地元もさまざまなイベントを企画するなど、盛り上がりを見せている

日本橋川周辺に残る歴史的遺産を活かしたまちづくりに期待

かつてヴェネツィアと称された水辺空間

陣内秀信
Hidenobu Jinnai
法政大学デザイン工学部建築学科教授・一般社団法人まちふねみらい塾塾長

江戸時代、物流の拠点として賑わった日本橋

日本橋川は、江戸城直下まで物資を運ぶ水路として掘削された人工の川です。全国から江戸湊に集まった回船が、品川や佃島の沖合に停泊し、艀に荷物を積み替えて、堀割を通じて河岸地に荷揚げをする。日本橋の周り、小網町や小舟町の河岸は全部蔵で占められていて、その様子は、「江戸名所図会」や絵巻「熙代勝覧」、歌川広重の「名所江戸百景 日本橋雪晴」などに描かれています。

水上交通の時代の船と人の結節点は“橋”でした。高密木造都市の江戸ではしばしば火災が発生したことから、橋詰には火除け地としてオープンスペースを取り、防災拠点としていました。それが広小路です。江戸橋広小路では、火除け地だったはずの土地に、床店と呼ばれる物を売るだけの仮設店舗がずらりと並び、その奥まったところにお稲荷さんがあって、その周りに矢場ができ、矢場女が接待する怪しげな歓楽街が生まれた。こうした広小路でさらに賑わっていたのは現在の柳橋辺りの両国広小路で、その後、茶屋や見世物小屋が数多く出来て江戸最大の盛り場になりました。

日本橋は、幕府や領主が決めた法度や掟書などを掲げる高札場があったため、ある程度管理された場所ではありましたが、江戸橋広小路や魚河岸などがあることから大変賑わいました。大正12年［1923］の関東大震災で江戸情緒を伝える土蔵は失われてしまいますが、水運が活発だった近代まで商業活動のポテンシャルはそのままでした。

明治時代、ヴェネツィアに例えられたロマンあふれる場所

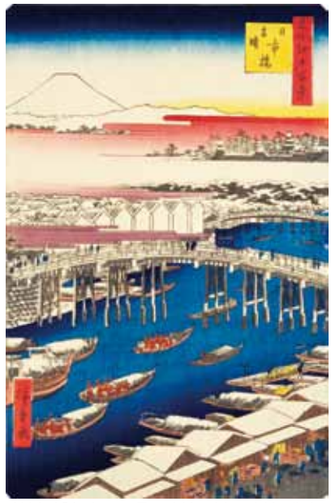
今の東京を理解する上で、近世の江戸と近代の東京を分けては考えられません。特に日本橋には、近世、近代、現代へとつながる遺構がしっかりと存在しています。

工部大学校でジョサイア・コンドルの洗礼を受けた建築家の辰野金吾は、留学中にヴェネツィアに立ち寄り、帰国後に渋沢栄一邸を設計しますが、建物がヴェネツィア風であるだけではなく、日本橋川沿いに建つ景色がヴェネツィアにそっくりでした。

これを見た明治末期の文化人が驚き、東京にヴェネツィアのイメージを重ねるようなロマンあふれるエッセーを書き残しています。当時の若者たちはアンデルセンの『即興詩人』やゲーテの『イタリア紀行』からヴェネツィアを知り、隅田川をパリのセーヌ川に、日本橋川沿いをヴェネツィアに重ね、東京の水辺空間を楽しんでいたのだと思います。また、建築家・中村鎮は、堀に囲まれた現・兜町辺りに水上公園計画［1］を提案し、ヴェネツィア風デザインの一大歓楽街にしようと夢を描いた。東京湾汽船の設立に尽力した渋沢栄一も、東京湾に近代港をつくり、東京を水の都市、国際交易都市にしたいと思い描いた。しかし港の権利を横浜に独占されてしまい、東京に近代港が出来るのは関東大震災後となる。その間、舟運から鉄道へと交通手段が転換し、日本橋地域の衰退の遠因となりました。

都市間競争で出遅れた日本橋の巻き返し

隅田川の上流、浅草方面は、江戸が城下町として発展する以前からの神話・伝説があり、文化空間、遊興空間、行楽地が並んでいます。例えば、浅草寺や待乳山聖天などの宗教空間は中世以前からのものです。その後も、吉原や猿若三座が転入して一大遊興空間が形成されました。それに対して日本橋は経済空間です。大店が近代にはデパートとなり、繁華街になる。しかしその繁華街も、大正末から昭和初めになるとまちのやや外れだった銀座に持っていかれてしまう。横浜が文明開化の都市になり、鉄道が新橋まで敷設されると、新橋、銀座が目抜き通りになりました。洋風なレンガ街、ヨーロッパのハイカラな文化の香りがする銀座に対して、日本橋は昔ながらの和風、伝統的な老舗のまちだったのです。



歌川広重「名所江戸百景 日本橋雪晴」：日本橋の北詰は魚河岸で賑わい、両岸には問屋や倉庫が立ち並んでいた［所蔵：国立国会図書館］

1980年代には、銀座が国際的にもセンスの良い商業のまちとして確立していく一方、日本橋は低迷していきました。しかし銀座には“和のテイスト”が抜け落ちていた。それを現代的にアレンジして巻き返しを図っているのが今の日本橋です。

2004年完成の「COREDO日本橋」に続く2010年、2014年完成の「COREDO室町1·2·3」では、“和のテイスト”を全面に打ち出して、それが成功していると思います。日本橋を代表する老舗がテナントとして入り、伝統ある商品を装い新たに販売したことで、若い世代や外国人にも人気です。また、シネマコンプレックスが入ったことで、遅い時間まで来街者がいることもまちの賑わいに寄与しています。

丸の内の「三菱一号館」を再建する時に、裏手にオアシス庭園をつくり憩いの空間にしていますが、あれは大成功しました。同じように日本橋でもCOREDO室町に隣接する福徳神社などのオープンスペースが出来たことで、路地空間が豊かになり、まちの回遊性がぐんと高まりました。裏路地には300年以上続く老舗が残っていて、おしゃれな茶屋のような路面店も増え、女性に人気です。女性に人気のあるまちの未来は明るいと思っています。

水辺空間と歴史的な建物を活かすまちづくりの動き

もう一つ、日本橋のまちを盛り返す鍵として、橋や川などの水辺環境の再興があります。2011年4月、中央区の予算でようやく日本橋の橋詰に船着き場が完成しました。現在、多くのクルーズ船が発着し、川からの遊覧が人気になっています。

私が塾長を務めている「まちふねみらい塾」は、東京の水辺を魅力的な空間として再構築するために具体的な提言を行い、事業化していく組織です。現在、ITの普及により証券会社が並ぶ“場所”の意味が薄れてきている兜町において、そこに残る歴史的建造物を活かしながら、水辺環境を再生するまちづくりにかかわっています。

兜町には歴史的な建物が幾つも残っていて、その一つが渋沢栄一邸跡に建てられた「日証館」です。管理している平和不動産がここをまちづくりの拠点にしてはどうかと提案しています。一部を保存しながら再開発した「三菱倉庫（現・日本橋ダイヤビルディング）」は、1階エントランスホールに日本橋界隈の変遷や倉庫業の歴史を展示し、一般公開しています。さらに日本橋川の河畔には親水空間を設置し、ここもオープンスペースとしています。かつて“軍艦ビル”の愛称で親しまれた「野村証券本店」は、戦後GHQに接収され「リバービューホテル」として米軍やその家族が利用したという歴史がありますが、水辺に人がアクセスできる楽しい商業空間となることを期待しています。

井上探景「江戸橋ヨリ鎧橋遠景」：明治21年［1888］頃の日本橋川の様子。中央の建物は渋沢栄一邸で、ヴェネツィアを彷彿させる風景に、当時の文化人たちがロマンを抱いた［所蔵：貨幣博物館］

水辺都市の復権に期待

水辺の復権には何と言っても日本橋川の水質を良くしないといけません。かつて外堀には玉川上水の水が引かれ、その水が日本橋川に入り、隅田川に合流して東京湾に出るという循環がありました。ところが外堀の水源が断ち切られたことで、雨水と下水のみになって水かさも減り、夏はアオコが発生して臭い。これを何とかしようとムーブメントが起こっています。「水循環都市東京シンポジウム」では、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを契機に、“水都東京”にふさわしい健全な水循環を維持・回復するための「水循環都市東京宣言」を、都心にある幾つもの大学が共同で提案しています。水質改善のために、中央大学水質研究室の山田正先生がアドバイザーとなり、三井不動産、日本橋の方々と一緒になって長年研究をしています。

そして、水辺の空間を利用できるアクセスポイントをつくること。東京都建設局による「日本橋川かわてらす社会実験」が2014年2月5日から2017年3月31日まで行われています。「豊年萬福」は、日本橋川に向かってテラス席を設けた文化情報発信型の飲食店で、川からの風が吹き抜ける気持の良い空間を提供しています。また、国分グループ本社の1階レストランでは川側にかがり火をたいて水上の雰囲気をつくって

います。
他にも、渡し船を復活させて水上でコンサートをするなどさまざまな試みがありますが、毎日のように祝祭イベントがあるようなまちになることを期待しています。

日本橋川に架かる高速道路と景観

2006年頃、当時の小泉純一郎首相が旗を振り、日本橋から高速道路を撤去する議論が生まれました。部分的に地下に埋めるという提案がされましたが、世論はそれほど盛り上がらなかった。しかし、ここにきて、かつて東京都の道路行政を担当していた人たちが「NPO法人道づくり・川づくり・街づくり」[2]をつくり、都心から完全に高速道路を撤去するとどうなるかをシミュレーションしながら、今後の道路の在り方を検討し始めています。日本は海外に比べて公共交通が発達しているので、外環道（東京外かく環状道路）が出来れば都心部に車で入ってくる必要はないという意見もあります。日本橋の一部分だけを地下化するより、もう少し待って全部撤去する方がリーズナブルだと考える専門家も増えてきました。それなら、撤去するまでの過渡期を楽しむことを考えてみてはどうか。プロジェクションマッピングのように光のアートを投影して楽しんだり、ニューヨークのハイラインのように公園化して人々に解放するなど、積極的に活用してみる。高速道路の夜景はそれなりに良いですからね。
道路景観、水辺の再生、路地空間の復権と、ようやく複合的な視点での議論が起こってきたのだと思います。　［談］

［1］日本橋川"水上公園計画"
『中村鎮遺稿』［中村音羽編、中村鎮遺稿刊行会／1936］に収められた「東京のヴエニス」（『建築と装飾』1912.10）の中で中村は、「自分がヴエニスに憧れたのは今に始まった事ではなかった。（中略）一方には早くから東京の堀割に趣を感じて、何時となく両者を結び付けて考えて観た」と前置きした上で、自身の"水上公園計画"について開陳している。「人形町を駆け抜けて来た電車が鎧橋を通る時に右手に見えるぱっと輝く広い気持の良い水面はまさに東京のヴェニスで、ヴェネチアンゴシック様式の渋沢栄一邸の左には、石のアーチの架かった海運橋が見え、これがまたヴェニスによくある橋だ」として、水辺景観を重視。すべての家は水に向かって建てられ、舟から直ちに玄関に入るようにし、各戸に歓楽設備（寄席、カフェ、ギャラリー、日本料理屋、レストラン、映画館、音楽ホール、ローマのような浴場など）を設け、広場も欲しいと書いている。舟はゴンドラのようなものから3-10人乗りのボートまであり、その装飾まで事細かに提案している。中村は堀に囲まれた現・兜町辺りに、江戸趣味を残しながらもヴェニス風デザインの一大歓楽街のようなものを思い描いていたと思われる
［2］NPO法人道づくり・川づくり・街づくり
東京の道路・河川・公園などの都市基盤施設整備やまちづくりの諸課題について、市民の視点から調査・検討を行い、その成果をまとめて行政を始め広く社会に発信することを目的に、2003年10月設立。都庁のOBを中心に構成されている

1　高速道路に覆われている現在の日本橋：花崗岩製の19代目で1911年に開橋
2　国分グループ本社ビルの日本橋川沿いに出店しているレストラン「ニホンバシイチノイチノイチ」
3　2011年完成の日本橋の北詰に設置された船着き場：舟行を楽しむ人で賑わう
4　隅田川から豊海（とよみ）橋を見る：梯子を横に倒したような形のフィーレンディール橋は日本初で、1927年に関東大震災の復興橋梁として竣工
5　現在の日本橋川：かつて東京のヴェネツィアと言われた日本橋川の面影はない。右手の建物が日証館

じんない・ひでのぶ――法政大学デザイン工学部建築学科教授・一般社団法人まちふねみらい塾塾長／1947年生まれ。1971年、東京大学工学部建築学科卒業。1973年、同大学大学院修士課程修了後、イタリア政府給費留学生としてヴェネツィア建築大学留学。1980年、ユネスコ・ローマセンター（保存研修所）留学。1983年、東京大学大学院工学系研究課博士課程修了。その後、同大学工学部助手・法政大学工学部建築学科助教授を経て、1990年、同大学工学部教授。2003年、同大学エコ地域デザイン研究所所長。2007年より現職。専門は、イタリア建築史、都市史。
主な著書：『東京の空間人類学』［筑摩書房／1985］、『東京（世界の都市の物語）』［文芸春秋（文春文庫）／1999］、『イタリア海洋都市の精神』［講談社／2008］、『イタリアの街角からスローシティを歩く』［弦書房／2010］、『イタリア都市の空間人類学』［弦書房／2015］など。

特集3［コラム1］

水辺を活かした兜町・茅場町のまちづくり

高松 巌・阿部 彰
Iwao Takamatsu・Akira Abe
一般社団法人まちふねみらい塾代表理事・専務理事

「まちふねみらい塾」は名前が示すとおり、水辺に接するエリアを中心にまちづくりの提案と、東京における舟運を都市交通のインフラとして捉えて整備することの重要性を提言している。今回は、日本橋エリアの活動のひとつを紹介する。
日本橋から下流に向かうと右岸に昭和初期に建てられた2つの建物を見ることができる。下流側にある「日証館」の敷地には、日本における資本主義の父と言われた渋沢栄一邸が威容を誇っていた。関東大震災で被災・焼失した後、1928年に東京証券取引所の付属建物で「東株ビルディング」と名付けた証券会社向けの貸しビルとして建設され、戦後に日証館と名前を変えた。
現在の所有者である平和不動産は、高い実用価値を維持しつつ、外観やエントランスから通じる階段室などはおおむね新築当時の様子を残すなど、時代的要求に対応した改修が行われている。
2015年の夏、縁があって建物を見学している途中、普段は立ち入ることができない堤防と建物の境界部にバラスター様にデザインされた構築物を発見した。渋沢邸と貸しビル建設当時の写真は見慣れているはずであるにもかかわらず、この写真に映されている川の中からじかに立ち上がる日証館の足元は注目しないままであった。水辺から見えていた基壇状構築物のディテールは1960年代に築かれた高潮堤防に隠されてしまい、専門家も読み取ることを忘れてしまっていた。
この発見をきっかけに、ないと言われていた建設当時の図面を探し、ようやく見つかった数枚の図面の中に地下断面図があった。諸外国も含め運河などに面する建物の地下とは異なるディテールで設計し、建設されたものであることが分かった。これを機に確認調査を行うことになり、この建物が水辺に接する近代建築物として貴重な意義を持つことを解明しようというプロジェクトが始まった。
私たちは、江戸時代から近年に至るまで国の経済を支えてきた兜町・茅場町・八丁堀に広がる都心の水辺に接するエリアの未来的まちづくりについて提言している。ここで日証館が類のない近代化文化遺産としての存在を明確にし、日本橋川において常磐橋・日本橋に日証館を加えて、日本の近代化を顕（あらわ）す3つめの起点が出来ることは貴重であると考えている。
近年、株取引システムのIT化のため多くの金融企業がまちを去り、活気が薄れてまちそのものが古くなっている。東京の都市力がシンガポールや上海に抜かれつつある理由はこの地域のポテンシャルが低下していることにあると考えられることから、日本橋川と接した都心の中では貴重な水辺資産を有する優位な立地性を活かして、新しいかたちの水辺都市へ再生することこそ、東京の都市力アップにつながるものと確信してやまない。
そのためにも日証館と周辺にある昭和初期の建物を、この地域のまちづくりの起点としての役割を持たせ、「かわてらす」や船着き場を整備し、やがて現実となる首都高速道路の廃止によって楓（もみじ）川も再生すると、さらに価値が高まる。
日本橋や兜町から船で東銀座（木挽町）へ歌舞伎見物、築地へ食事に行くなど、再び都心の"歴史・街・水廻廊"が出現することは決して妄想ではなく、実現性の高い計画なのである。

完成当時の日証館の外観［出典：『東京横浜復興建築図集』［建築学会編、丸善／1930］］

日証館の基壇状構築物：水辺から見えていた基壇状構築物のディテールが部分的に分かる。現在は高潮堤防によって隠されて見えない［提供：まちふねみらい塾］

日証館断面図：当時の図面によると、2,249本の松杭の上に基壇状に見えるコンクリートの桶をつくり、浸水を防ぐために防水を施し、その中に地下1階、地上6階、鉄筋コンクリートの建物を建設した。昭和3年［1928］建設、設計は横川工務店、施工は清水組。［出典：『東京横浜復興建築図集』］

たかまつ・いわお――一般社団法人まちふねみらい塾代表理事／1946年生まれ。八丁堀に生まれて8代目。東京都港湾局臨海開発部長、東京都産業労働局観光部長、東京都公園協会公益水辺事業部長を経て、現職。法政大学エコ地域デザイン研究所研究員。

あべ・あきら――建築家・都市環境プランナー・一般社団法人まちふねみらい塾専務理事／1940年生まれ。山下寿郎建築設計事務所、日本設計事務所を経て、1978年よりA+A総合計画事務所代表取締役。法政大学エコ地域デザイン研究所研究員。

江戸の賑わいを現代に蘇らせた日本橋のまちづくり

「日本橋再生計画」による都心型スマートシティ

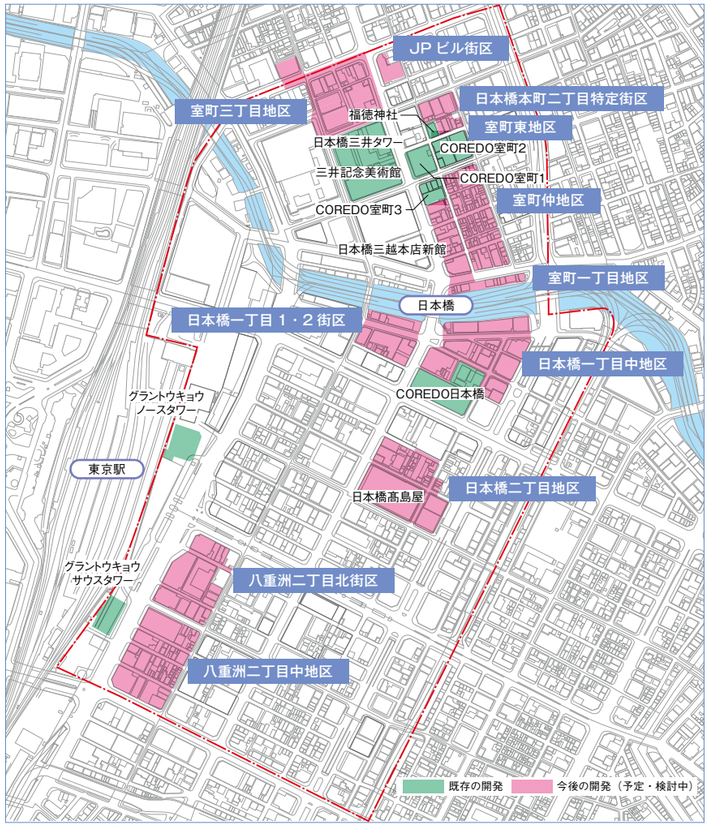
中原 修
Osamu Nakahara
三井不動産日本橋街づくり推進部事業グループグループ長

江戸開府で大きく発展した日本橋

日本橋は、1603年の江戸開府と共に発展した歴史あるまちです。東海道・甲州街道・奥州街道・日光街道・中山道の五街道の起点として日本橋川に架橋された日本橋を始め、物資供給のための水上交通も整備されました。また、江戸歌舞伎の三座のうち中村座と市村座の発祥地であるなど、五街道と海運によって全国から多くの人が行き交い、さまざまな物産が集まり、文化が交流していました。経済・商業・金融・物流・娯楽が揃う日本の中心地として発展し、1800年頃には、パリの人口が約50万人、ロンドンは約90万人という中で、江戸の人口は120万人に達していました。面積・人口共に世界最大規模の都市のひとつとされるほど、賑わいあふれるまちだったことがうかがえます。三井グループも1673年に「越後家」という呉服店を開店し、江戸以降、現在に至るまで日本橋とは深いかかわりを持っています。

世紀の変わり目にまちの再生がスタート

約400年、日本を代表する都市として機能してきた日本橋ですが、バブル崩壊後、流れが変わり、以前のような活気が感じられなくなりました。そして、1999年には東急百貨店日本橋店が閉店してしまいます。1662年に呉服店「白木屋」として創業した百貨店が廃業したとあって、老舗の旦那衆を始め、地元では大きな衝撃が走りました。
商業地としての地位低下という危機感の中、日本橋にかつての賑わいを取り戻そうと、日本橋再生に向けて町内会、企業、老舗、行政などの有志による「日本橋地域ルネッサンス100年計画委員会」が誕生します。三井不動産もメンバーとして参加し、「残しながら、蘇らせながら、創っていく」をコンセプトに、官民地元と一体となって地域の活性化と新たな魅力を創造するプロジェクト「日本橋再生計画」をスタートさせました。まずは地元のディベロッパーとして東急百貨店日本橋店の跡地を取得し、2004年3月に「COREDO日本橋（日本橋一丁目三井ビルディング）」を竣工しました。COREDOは“CORE（核）”と“EDO（江戸）”を合わせた造語で、日本橋が新しい東京の中心になってほしいという思いが込められています。これが新たなまちづくりの先駆けとなり、「日本橋再生計画」に盛り上がりが見え始めたと思います。
COREDO日本橋に続き、2005年に「日本橋三井タワー」、2010年に「COREDO室町１（室町東三井ビルディング）」が竣工し、これを「日本橋再生計画」の第１ステージと位置付け、第２ステージへと進んでいます。「日本橋室町東地区開発計画」は、2014年3月にオープンした「COREDO室町２（室町古河三井ビルディング）」や「COREDO室町３（室町ちばぎん三井ビルディング）」など5つの街区からなる大規模な開発で、オフィス、商業施設、多目的ホール、シネマコンプレックスのほか賃貸住宅、福徳神社などが備わった多機能なまちを再生しました。そして現在、日本橋室町三丁目地区、日本橋二丁目地区や、八重洲側へもプロジェクトは広がっています。



日本橋再生計画図［提供：三井不動産（編集室で一部加工）］

左｜日本橋から望む日本橋室町地区：中央通り左手に日本橋三越本店新館、右手奥にCOREDO室町１・３が見える
右｜中央通り沿いのCOREDO室町１・３：歴史的建造物との調和を図り、低層部は100尺（31m）ラインで統一している

地域と連携して賑わいをつくる

日本橋には土地固有の魅力があり、それをまちづくりにも示していきたいと考えています。「歴史的建造物や伝統ある老舗、街の文化、日本人の心を残しながら、急速な都市開発と共に失われた街の景観、水と緑、路地の賑わいを再び蘇らせ、未来に向けた新たな街の魅力を創る」という基本方針のもと、地域や行政と連携しながらまちづくりを進めています。また、社内に「日本橋街づくり推進部」を発足し、日本橋のまちづくりを総合的に進める専門部署として、まちの活性化を目指して取り組んでいます。
「日本橋室町東地区開発計画」では、三井不動産だけでなく19名の地権者とコンセプトを共有しながら、ディベロッパーとしてまとめ役となり開発していきました。歴史的建造物との調和を意識し、100尺（31m）ラインに統一した中央通り沿いの建物低層部、街区を取り囲む“通り”があり歩いて楽しいまち、暖簾や行燈などをモチーフとした外装デザインなどが特徴です。福徳神社も地元と協調して再建しました。平安時代から1,000年以上の歴史を持ち、日本橋室町地域の稲荷として親しまれてきましたが、戦後の都市化が進む中でお社が定まらず、今回、社殿を構えたことで、新たな地域コミュニティの拠点となっています。
中央区と共同で整備した江戸桜通り地下歩道は、地下鉄の三越前駅に直結し、地下でCOREDO室町１・２・３を結ぶ区道です。公道ですがイベント開催やデジタルサイネージ広告を設けた歩行空間として活用しており、災害時には防災拠点にもなります。日本橋には多くの企業があり大勢の帰宅困難者が予想されることから、非常時には最大で約1,800人の収容も想定し、福徳神社の地下に保管した防災備蓄品を提供するなどしてサポートできるようになっています。江戸桜通り地下歩道のイベント・デジタルサイネージを管理・運営しているのが、「一般社団法人日本橋室町エリアマネジメント」です。日本橋室町およびその周辺地域で、日本橋らしい景観を維持しながら、江戸桜通り地下歩道を始めとした公共空間などを活用して賑わいの創出・支援に関する事業を行うことを目的に設立しました。今後は、福徳神社と一体となった広場空間「福徳の森」（2016年秋完成予定）とCOREDO室町１・２の間を通る仲通り、江戸桜通り地下歩道で連携したイベントを開催するなど、エリアマネジメントの活動範囲を広め、さらなる賑わいを創出していきます。

伝統を活かし、新しい魅力あるまちへ

「日本橋再生計画」をスタートしたことで、日本橋を訪れる人の流れは大きく変わりました。それまでは、ほとんど見掛けることがなかった、ベビーカーを押した家族連れや若い人たちも多くなり、層

が幅広くなったと感じます。最近、増加している外国からの観光客は団体ではなく個人で来られることがほとんどで、リピートされることも度々あるようです。COREDO室町１の地下１階に設けた日本橋案内所では、外国人コンシェルジュも常勤していて、観光スポットやお店、イベントなどを案内しています。外国人観光客のための「ベスト・オブ・ジャパン ツアー in コレド室町」は、外国人コンシェルジュが自らの目線で企画したもので、全国各地の老舗が集うCOREDO室町１を着物姿の外国人ツアーコンダクターと巡ります。他に日本文化を体験できるツアー・アクティビティも開催していて、国内外を問わず参加していただき好評です。

日本橋は、日本の伝統を受け継ぐ老舗を始めとした商業集積があり、金融や医薬などの産業が集積したビジネス街でもあります。また、近隣の居住区である人形町や東日本橋といった旧・日本橋区地域はクリエイターが活躍するカルチャー感度の高いまちであるなど、さまざまな側面を持っています。以前はそれぞれが分離していましたが、「日本橋再生計画」では、昔の良い側面を活かしつつ、さらに最新の機能を加えてつなぐことで、訪れる多くの人を引き付け、魅力と賑わいのあるまちに進化させています。

現在、８地区９プロジェクトが開発・計画中です。東京オリンピック・パラリンピックを挟み、2020年代の竣工を目指して鋭意事業推進中ですが、その後も日本橋の再生は続きます。単体で大きなビルがあるということだけではなく、まちが持つハードとソフトの要素を融合する。日本橋の強みを活かし、働く・遊ぶ・住まう・憩うといった機能を複合した都心型スマートシティとして、手本となるようなまちづくりをこれからも展開していきます。［談］

なかはら・おさむ――三井不動産日本橋街づくり推進部事業グループグループ長／1971年生まれ。1994年、三井不動産入社。2014年、同日本橋街づくり推進部。

1　日本の伝統を活かしたCOREDO室町１・３：暖簾など“和”をモチーフにした外装デザインに、全国の老舗名店が軒を連ねる。江戸の賑わいを現代によみがえらせた
2　仲通り：COREDO室町２・３の間は福徳神社の参道になっている。「日本橋桜フェスティバル」期間は短冊と照明で幻想的な演出を楽しめた
3　ベスト・オブ・ジャパン ツアー in コレド室町：COREDO室町１には日本橋案内所があり、外国人ツアーコンダクターによる外国人観光客のための案内を行っている
4　江戸桜通りと日本橋三井タワー：日本橋三井タワーは1930年竣工で重要文化財の三井本館を保存し、超高層複合ビルに隣接して開発。日本橋では新旧の建物が共存し、美しいまち並みをつくっている。また、「日本橋室町東地区開発計画」では、桜並木を日本銀行からCOREDO室町まで延伸し、歩道幅も広げた
5　浮世小路：福徳神社と中央通りを結ぶ江戸時代からの通り。中央通り、江戸桜通り、仲通り、浮世小路といった通りをまちの特性とし、路地街区の整備を行った
6・7　江戸桜通り地下歩道：地下でCOREDO 室町１・２・３を結ぶ区道を歩行空間として整備。非常時には防災拠点となるよう想定されている。写真７は帰宅困難者訓練の様子
［提供３・７：三井不動産］

8　都心の路地空間：福徳神社は中央通りから奥まったところにある。高層ビルに囲まれた空間だが、裏路地を参道とし、人の流れを中央通りから広げた。歩いて楽しい路地空間をつくることで、回遊性が高まり、面的な賑わいを創出している

9　“和”の趣を感じさせるCOREDO室町２：COREDO室町２が入る室町古河三井ビルディングは、地下４階、地上22階建て。地下１-地上２階が商業施設、２-６階がシネマコンプレックス、７-17階がオフィス、18-21階が賃貸住宅で構成されている。外観は隣接する老舗街との調和を意識したつくりで、軒や庇などスケール感をアイレベルで統一し、外壁に淡路瓦の装飾を施している。また、通りには行燈をモチーフにした照明を設けるなど、日本的な雰囲気を演出している

10　春の野点茶会：福徳神社前のオープンスペースでは、時折お茶席が設けられ、通り掛かりの来街者でも楽しむことができる

特集３［コラム２］

福徳神社と一体となった広場空間の誕生

「福徳の森」のランドスケープデザイン

榊原八朗
Hachiro Sakakibara
造園家・ランドスケープアーキテクト

2016年秋、福徳神社に隣接して、「福徳の森」が竣工する。計画面積は約700m^2。その内訳は、緑地とイベント広場が半々で、面積を二分した形となっている。その緑地に樹木を植栽しただけでは、ただの森か林にすぎないので“自然、文化、伝統、名所、潤い”をデザインのキーワードとして、自然風の庭園形式を採用した。この形式は、自然を表面的に捉えるのではなく、また、抽象的あるいは説明的な言葉や奇をてらうことでもなく、自然の本質を分かりやすく美的に表現することである。

私の先生・小形研三が修行した師匠・飯田十基は、明治23年生まれで、明治の終わり頃から、コナラやシデ類、カエデ類などの雑木を庭木に取り入れた最初の人物であったと聞いている。そして、小形先生がその作庭の技術を継承し、昭和の中頃になると誰でも雑木を扱うようになった。この頃から「雑木の庭」とか「自然風の庭」と呼ばれるようになった。やがて官公庁の設計にも積極的に取り入れられ、今では当たり前のようになったが、その植栽技法までは受け継がれていないことが残念に思われる。

日本の本州の植生は落葉広葉樹林帯で、特に関東以北は顕著である。その樹木はコナラ、クヌギ、シデ類、ナツツバキ、ヤマザクラ、ヤマモミジなどで、これらは春の芽吹き、夏の緑、秋の黄紅葉（きもみじ）、冬の枯れ木立と様相を変え、日本の自然美を醸し出している。雑木の植栽は、どんな立派なものであってもただ植えるだけでは自然風にはならない。デザインは、静的か動的かに分けられ、植栽でもどちらを採用するかは樹種と樹形によるが、ここでは“動的”な構成をとる。自然のデザイン構成はすべてが動的であるが、その動的には“動の静”、“動の動”の２通りの表現手法があると思っている。

1　「福徳の森」パース
2　福徳神社新社殿
3　参道である仲通りには全国の老舗が並ぶ
［提供３点とも：三井不動産］

この説明はかなりの紙面がいるので省くことにするが悪しからず。

「福徳の森」でのデザインは、山の伏流水を利用したように見せる“つくばい”と“枯れ流れ”をモチーフとして、あたかもこの場所には岩が露出していて、荒々しい渓流を思わせるような自然風な石組みを表現する。北側の歩道に面した２ヵ所の植栽帯は、カヤを中心に四方４本のシダレザクラを配した人工的な植栽をとって自然風庭園との対比を意図している。活動的な多目的広場と日本の四季の移り変わる風景。この両者は“静と動”の関係が相まって、この場所にふさわしい日本美を備えた新たな名所となるようなランドスケープにしたいと思っている。

さかきばら・はちろう――造園家・ランドスケープアーキテクト／1944年生まれ。1967年、東京農業大学造園学科卒業。1967-72年、東京庭苑。1972-74年、米国オレゴン州ポートランド市ワシントンパーク内日本庭園設計監理。1975-76年、東京庭苑・小形研三に師事。京都造形芸術大学通信教育部講師、明星大学造形芸術学部教授などを歴任。
主な作品：国営昭和記念公園・日本庭園［1998］、六本木ヒルズ・毛利庭園［2003］、東京ミッドタウン・港区立檜町公園［2007］など。

日本橋地域の再生を目指す地元パワー

地元愛を育むまちづくりに挑む

日本橋地域ルネッサンス100年計画委員会

現在の日本橋：日本橋の中央柱の麒麟には翼があり、飛躍する首都を表わしている。COREDO室町など新しい観光スポットが出来たことで橋を往来する人も増え、都市景観の在り方が再び問われようとしている

危機感から生まれたまちづくり組織

日本橋地域は、日本の経済・金融・商業・物流・文化の中心地として発展してきましたが、バブル崩壊後は徐々に衰退の兆しが見え始めました。そんな中、老舗の方々の危機感が高まり、1999年「日本橋地域ルネッサンス100年計画委員会」（以下、委員会）が設立されました。初代の会長は明治座の社長だった故・三田政吉氏。4代目にあたる現会長は割烹日本橋とよだのオーナー、橋本敬氏です。代表発起人には、にんべん、山本山、榮太樓總本舗、三越、髙島屋、三井不動産、西川産業、宮入など老舗の方々を含むまちの名士が名を連ねていて、日本橋地域（旧・日本橋区地域）全体を網羅しています。

委員会では、日本橋地域を将来に向かって“日本の顔”として再生させることを目標に、長年培われたまちの文化、地域コミュニティ、歴史的な建築物など、数多くの資産を次代に継承しながら、新しいまちづくりの中で活用していきたいと考えています。

活動の範囲は東京都中央区の日本橋地域で、町名に“日本橋”が付く場所と、八重洲一丁目を中心に、周辺地域と連携しています。

月1回幹事会を開催し、委員会の活動方針などが話し合われ、6つの部会が具体的な活動を行っています。

地域資源を強化・活用するまちづくり

部会のひとつ「都市再生部会」は、主に首都高速道路の撤去（移設）とその後のまちづくりを検討しています。

首都高が出来たのが昭和38年［1963］。日本橋地域も、日本での戦後初めてのオリンピックに協力しようと、橋や堀の上に高速道路が出来ることはやむなしという姿勢でしたが、オリンピックが終わってみると、なんて無粋なものが出来てしまったのか、という思いから昭和43年［1968］に「名橋『日本橋』保存会」が発足しました。その後、2015年9月には首都高撤去請願の署名を32万9,500人分集め、保存会の中村胤夫（たねお）会長と、当委員会の橋本敬会長名ほかで、衆議院議長に提出するなどの活動を行っています。

また、東京都の河川清掃船と協働で、地元の有志や小学校の生徒による日本橋川の清掃活動（川のゴミ拾い）と水質検査を実施しています。

「河川再生部会」は、日本橋川の水質改善を主に担当しています。2011年春、日本橋の橋詰に船着き場が出来たことで、舟運の利用客が増え、2016年3月末には累計30万人を超えました。そういう意味でも日本橋川の浄化は急務です。

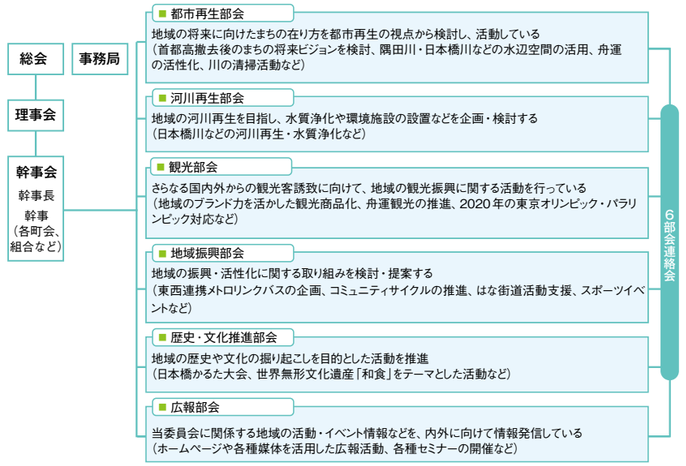
「観光部会」は、地域の観光振興に関する活動を行っています。例えば、東京観光財団が作成している「東京ハンディガイド」に日本橋の観光ガイドページがありますが、委員会が情報提供しています。またホットな話題としては、旅行業者の祭典「ツーリズムEXPOジャパン2016」が東京ビックサイトをメイン会場に、9月22日から4日間開催されますが、その開会式が日本橋で行われる予定です。ちなみに2015年の開会式は丸の内の行幸通りで行われました。青森ねぶたの巨大な山車が展示され、JPタワーの吹抜け空間では飲食パーティを実施。海外からの来訪者を含め約17万人が集まり盛大なものとなりました。今年はリオデジャネイロのオリンピック・パラリンピックが終わってちょうど1週間後に開催されるので、次の東京オリンピック・パラリンピックに向けての旗揚げも兼ねて、イベントを大いに盛り上げていく予定です。

「地域振興部会」では、日本橋地域全体の活性化に取り組んでいます。2004年から運行が始まった、東京駅八重洲口から京橋、日本橋地域を結ぶ無料巡回バス「メトロリンク日本橋」に協賛していますが、日本橋地域全体の連携をより促進させるため、新たに日本橋と人形町や浜町方面を巡回するルートの実現に向けて活動しています。

また、2015年10月から開始した中央区のコミュニティサイクル事業について、委員会としてポートの増設や認知度向上に取り組んでいます。千代田区、港区、江東区、中央区の4区のコミュニティサイクルが連携したことで、相互乗り入れが可能となり、より利便性が高まりました。

上・下｜日本橋川の水辺再生イメージ：日本橋再生推進協議会の専門部会である「水辺再生研究会」が2008年頃に作成した水辺再生のイメージCG。青空が水面に映る美しい川が描かれている［提供2点とも：日本橋地域ルネッサンス100年計画委員会］

日本橋地域ルネッサンス100年計画委員会組織図



文化を学び、地元愛を育てるまちづくり

「歴史・文化推進部会」が担当している大きなイベントに、「日本橋かるた大会」があります。大勢の方々に日本橋を深く知っていただこうと、委員会の創立10周年記念事業として日本橋地域の原風景や、継承したい歴史・伝統を読み句にした「日本橋かるた」を作成しました。実行委員会をつくり、日本橋地域にちなんだ題目を設定し、読み句を一般から募集。全国から4,114句の応募があり、選定委員会によって47句が選ばれました。絵札のデザインは、江戸時代から続く歌川派の浮世絵師6代目の歌川国政氏にお願いし、大変美しい絵札が出来ました。

このかるたを使って毎年1月に日本橋地域にある6つの区立小学校を順番に会場にして、小学生による「日本橋かるた大会」を開催しています。日本橋で学んでいる小学生に、地域の文化や歴史を学んでもらおうという主旨です。5回目の2016年は久松小学校が会場でした。地元の協賛企業から豪華な景品も用意され、大盛況となりました。また、毎年日本橋地域の小学1年生全員に、この「日本橋かるた」を贈呈しています。

2015年には英語バージョンもつくり、読み句の場所を巡る外国人ツアーを4回ほど実施、テレビでも紹介されるなど、話題となりました。さらに、読み句の解説書や読まれた場所のマップをつくるなど「日本橋かるた」を活用して地域の活性化を図っています。

その他にも、2015年が徳川家康没後400年にあたったことから、家康が食した料理を再現した食事会を開くなど、歴史・文化にちなんだイベントを企画・実施しています。

「広報部会」は、ホームページの更新や会員に向けてセミナーを開催しています。日本橋出身の食文化研究家によるセミナーでは、日本橋や江戸の食についてお話しいただくなど、地域色を盛り込んだ内容になっています。

まちを楽しむ仕掛けを増やす

日本橋の老舗の方々が「銀座がゴージャスならば、日本橋は“粋”でいくんだ」とよく言われます。京都のようにじっくり楽しんでいただくまちにしたいという思いから、それにふさわしいイベントも増えてきました。そのひとつ、2007年から始まった「TOKYO KIMONO WEEK」では、着物姿の人が集まって日本橋の上で大撮影会が行われます。着物を着ている人であれば誰でも参加でき、手ぶらで来ても所定の場所で着物や小物が借りられ、着付けもしてもらえるとあって、外国人も多く参加するようになりました。このような体験型の観光も徐々に浸透してきています。

委員会の名称に“100年計画”とあるのは、長期ビジョンをもってまちづくりに取り組みたいという、地元の意気込みの表れです。この先もじっくり腰を据え、本物志向のまちづくりを目指していきたいと思っています。［談］

4

1　名橋「日本橋」を洗う会による橋洗い：「名橋『日本橋』保存会」主催で1971年から毎年７月に実施。町内会を始め、近隣企業や小学校のボランティアが大勢参加する

2　日本橋川清掃活動：「日本橋地域ルネッサンス100年計画委員会」のほか、「名橋『日本橋』保存会」、常盤橋フォーラムの３団体主催で、毎年６回ほど川の清掃と水質調査を行っている。毎回50名ほどが参加し、地域で川を監視している

3・4　「日本橋かるた大会」とポスター：2010年12月に完成した「日本橋かるた」を使って地元小学校で行われたかるた大会。かるたを通して日本橋地域固有の歴史・伝統・文化を学ぶ

［提供1−4：日本橋地域ルネッサンス100年計画委員会］

5・6　TOKYO KIMONO WEEK：着物の歴史と文化を見直し、着物の新たな可能性や"和"の価値を再発見する企画として、2007年から毎年10月に日本橋で開催。日本橋の上で行われる「きもの大集合写真」は圧巻

［提供5・6：TOKYO KIMONO WEEK実行委員会］

7　メトロリンク日本橋：八重洲・京橋・日本橋地域を結ぶ無料巡回バス。現在は電気バス３台が10分間隔で運行。2004年の運行開始以来、利用者は100万人を数える

8　コミュニティサイクル：中央区内に約40ヵ所のポートがあり、隣接区への乗り入れも可能

特集３［コラム３］

「熙代勝覧（きだいしょうらん）」複製絵巻を地下コンコースに設置

「名橋『日本橋』保存会」と「日本橋地域ルネッサンス100年計画委員会」は、地元および都が協力して行う「江戸東京・まちなみ情緒の回生事業」により、江戸時代の日本橋のまちの様子を描いた全長約17mの「熙代勝覧」の複製絵巻を、地下鉄の三越前駅地下コンコースに設置し、2009年11月30日除幕。「熙代勝覧」は、文化２年［1805］、11代将軍徳川家斉の頃の江戸で、日本橋から今川橋までの大通り（現・中央通り）を東から俯瞰描写した作者不詳の絵巻物。沿道には88軒の問屋や店が立ち並び、屋号や商標が書かれた暖簾、看板、旗などが克明に描写されている。また、通りには1,671人の老若男女、犬20匹、馬13頭、牛４頭、猿１匹、鷹２羽が描かれ、約200年前の日本橋の賑わいをうかがい知ることができる。

原画はベルリン国立アジア美術館に所蔵されているものだが、日本橋の歴史、文化を後世に伝える貴重な作品であることから、美術館から制作、設置の許可を得て、江戸東京博物館の監修のもと複製を実現させた。複製絵巻の絵画部分は、江戸東京博物館が所蔵するカラーポジフィルムから約1.4倍に拡大した印刷用の画像データを作成。原画の雰囲気を再現するため、和紙に印刷ができるプリンタを使用し、和紙８枚に出力した後、１枚仕立てに加工している。絵画を囲うパネルには、建物や職業、商売など江戸時代の町人文化に関する解説が記載されているので、立ち止まってじっくり鑑賞している人も多い。

［文責：編集室］

地下鉄の三越前駅地下コンコースに設置された全長約17mの「熙代勝覧」

プロジェクト概要

事業者：名橋「日本橋」保存会、日本橋地域ルネッサンス100年計画委員会
全体サイズ：長さ16.8×幅1.53m
制作協力：東京都、中央区、国土交通省東京国道事務所、東京メトロ、三越、三井不動産、小津和紙、地元町会ほか
設置場所：東京メトロ銀座線、半蔵門線三越前駅地下コンコース内（日本橋三越本店本館地下中央口付近）

「熙代勝覧」（部分）：日本橋から一石（いちこく）橋方面の眺め。両岸には蔵が立ち並ぶ

動く素材“水”

三分一博志
Hiroshi Sambuichi

地球上で水ほど興味を引かれる素材はない。常に“速度”と“密度”を持ちながら太陽によって“固体”、“液体”、“気体”と姿を変える。水は地中、地表、空中を自由に動き回り、光によって時に青く、時に白く、気化すれば私たちには見えなくなる。水と生物は太陽を介在して極めて知的な関係を築いてきた。すなわち建築が私たち生物のために存在しているのであれば、その姿形は水によって導かれるのが望ましいのではないかと考えている。

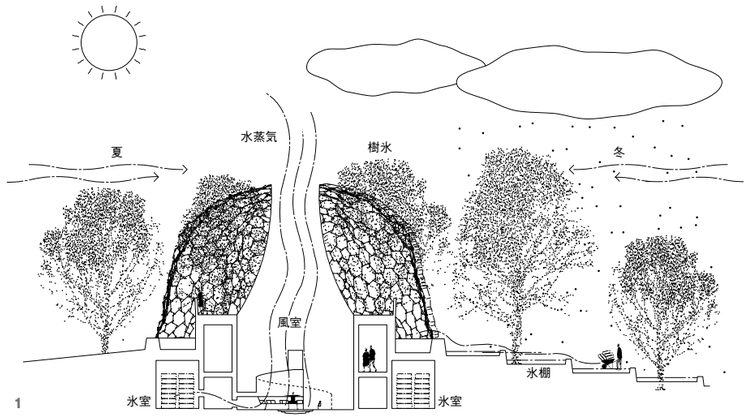
「六甲枝垂れ」は兵庫県六甲山上の標高およそ1,000m、大阪平野から明石海峡を経て瀬戸内海までを望むことができる場所に位置している。神戸の市街地に近い位置にありながら、山麓とは全く違う山上ならではの変化に富んだ気候になっている。夏は南の瀬戸内海に注がれた太陽によって水は雲・霧となり、山肌を上がっていく。山上付近まで運ばれると冷却され液体へと変わり山上に水をもたらす。霧の六甲、雲海の六甲と呼ばれる風景である。また冬になると逆に北の日本海から運ばれてくる湿った空気によって山上へ雪や氷として水をもたらす。山上では水が気体・液体・固体とさまざまに変化し、六甲山固有の“水”の循環がこの場所の美しさを引き立てている。なかでも最も美しいのは樹氷と呼ばれる現象である。リサーチの結果、樹氷は湿度、温度、風速のある条件がすべて揃った時に、枝などの物質に衝突し、衝撃振動を受けることによって、結晶化していくことが分かった。上記の条件がどれかひとつでも欠けると着氷は見られない。この現象は建築を考えるにあたり、とても重要な要素となった。

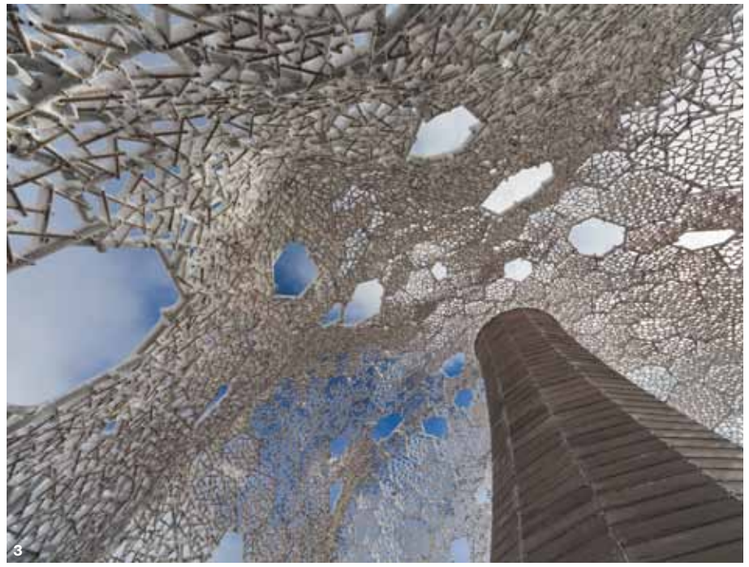
展望台の枝葉の基本ディテールはφ20mmとし、最初に風が当たる北面はその風速を衰えさせないようにφ15mmとしている。そのディテールは樹氷が着氷していた六甲山の樹木の枝を参考にした。周りの木々と同じように着氷し、この自然の美しさを見せることができる建築は六甲山を展望するにふさわしいものになると考えた。

古来、六甲山では冬に天然の氷をつくり、夏まで保つ氷室の文化があった。山上東側の氷棚は雨水を蓄えるものであり、冬には天然の製氷池となる。冷却され固体化した冬のエネルギーの結晶は地中の氷室で夏まで保管される。古くから続く六甲山の氷の文化を継承している。氷棚の広さと氷室の容積、ディテールは氷の液化の速度と量から導き出されている。夏、氷室を通り冷却された風は、風室を通り、人々に涼をもたらす。また、氷室の氷は溶け出し液体へと変化した水滴は水盤にたたえられる。水滴は水紋や水音を残した後、やがて気化や自然浸透により地球へと還る。

我々が美しいと感じる地球の景色はエナジースケープだと考えている。紅葉や雪景色、雲海、樹氷などそれらは自然のエネルギーが導く変化の景色である。太陽光、風向、水系、土壌とその地層、重力など、さまざまな条件をあらゆる地上の素材のディテールとサイズやそれぞれが持つ速度に応じて平面・断面に整理していくと、地域、気候ならではの姿形として表れてくる。それは地球のエネルギーによる絶え間ない循環の景色であり、その建築は地球の一部となる。結果すべてのディテールは地球に通じ、美しい景色を見渡せる展望台とは、その場所の持つ最も個性的かつ固有なエナジースケープを導くものなのではないかと考える。

「六甲枝垂れ」は水蒸気、氷、水、樹氷、すべて六甲の水によって導かれた建築である。





六甲枝垂れ［2010］

1　断面ダイアグラム：展望台を通して六甲山ならではのさまざまな水の変化・循環を体感することができる［提供：©Sambuichi Architects］
2　霧に包まれた展望台：東側の氷棚では雨水が蓄えられ、冬期には天然の製氷池となる
3　ステンレスとヒノキを組み合わせたフレームを見上げる：フレームの向きによって樹氷の着氷する位置が異なる。風上は外側に樹氷が着氷し、風下では内側に着氷する。樹氷が風の向きを伝えている
4　氷室：冬期に製氷された天然の氷は地下の氷室で夏期まで保管される
5　風室：氷室で冷却された外気は風室に供給される。氷室からの融氷水を溜める水盤の水は気化し、風室上部から外部へと抜けていく
6　樹氷が着氷した枝葉：枝葉の基本ディテールはφ20mmとし、そのディテールは樹氷が着氷した山上の樹木の枝を参考にしている
［写真2–6：©Sambuichi Architects］

さんぶいち・ひろし――建築家／1968年生まれ。東京理科大学理工学部建築学科卒業。小川晋一アトリエを経て、三分一博志建築設計事務所設立。
主な作品：犬島精錬所美術館［岡山｜2008］、宮島弥山展望台［広島｜2013］、直島ホール［香川｜2015］、おりづるタワー［広島｜2016年秋竣工予定］など。

TOPICS

パブリックトイレにおけるダイバーシティ
── LGBT等性的マイノリティへの配慮について考える

誰もが安心して快適に利用できるパブリックトイレ空間を目指して

日野晶子
Akiko Hino
(株)LIXIL LIXILジャパンカンパニー
セールスプロモーション統括部
スペースプランニング部

はじめに

近年、“ダイバーシティ(多様性)”という言葉を耳にすることが多くなってきました。現在では、企業戦略として「ダイバーシティの尊重」という考え方を積極的に取り入れる日本企業も珍しくありません。さらに、このグローバル時代においては、性別、国籍、人種、障がいなどのテーマの中に“LGBT等性的マイノリティ(以下、LGBT)”を含める企業も増えつつあり、その在り方は進化しています。

“多様性”を尊重するためには“多様なニーズ”に応える必要がありますが、そこには当然課題も生まれます。それはパブリックトイレにおける配慮についても同様です。特に、今後も増加すると思われるインバウンド(訪日旅行客)への対応として、まずは今まで検討してきた配慮に“外国人配慮”が加わります。そして、さらに進化したダイバーシティに対応するためには、“LGBT配慮”についても考える必要があります[1]。そこで本稿では、LGBTへのトイレ配慮における課題について考えたいと思います。

1　LIXILが考えるパブリックトイレにおける利用者別配慮：従来の女性配慮、男性配慮、お子さま連れ配慮、バリアフリー配慮に加え、今後は“外国人配慮”、および“LGBT配慮”を考える必要がある

LGBTの基礎知識

LGBTとは、レズビアン(Lesbian)、ゲイ(Gay)、バイセクシュアル(Bisexual)、トランスジェンダー(Transgender)の英語の頭文字を取った、性的マイノリティの総称のひとつですが[2]、トイレの課題を考える上で、これ以外に知っていただきたい言葉をご紹介します。

●性自認：身体の性別にかかわらず、自分の性別についてどう認識しているかということ。女性・男性だけでなく、中性、決めたくないなど多様。“心の性別”と表現されることもある。

●性表現：自己の外見、服装などにおいて性別をどう表現するかということ。女性的、男性的、どちらでもないなど多様である。

●FTM：Female-to-Maleの略。身体的には女性だが、性自認は男性という人。

●MTF：Male-to-Femaleの略。身体的には男性だが、性自認は女性という人。

●Xジェンダー：男女の枠にとらわれない性の在り方。男女どちらでもない、中性など多様である。FTM・MTFという表現に沿って、FTX・MTXということもある。

レズビアン(Lesbian)	好きになる対象が女性、という女性(女性の同性愛者)	“性的指向”に関するマイノリティ ※性的指向：どのような性別の人を好きになるか、ということ
ゲイ(Gay)	好きになる対象が男性、という男性(男性の同性愛者)	
バイセクシャル(Bisexual)	好きになる対象が異性だったり同性だったり、という人(両性愛者)	
トランスジェンダー(Transgender)	出生時の性別と性自認(心の性別)が一致しない人の総称	“性自認”に関するマイノリティ ※性自認：本文「LGBTの基礎知識」参照
性同一性障害	トランスジェンダーの中でも医学的なサポートを必要とする場合に付けられる医学的疾患名。自認する性別に身体的性別、社会的性別を合致させたいと強く望む状態を指す	

2　LGBTについて

当事者のニーズを知る

当事者を対象とした意識調査を実施

職場や学校、および公共施設などのパブリック空間におけるトイレ計画の際、LGBT当事者にはどのようなストレスがあり、どう配慮すれば良いのか分からないという方が大半かと思います。そこでLIXILでは、特定非営利活動法人虹色ダイバーシティ[3]と共同で、日本在住の10代以上のLGBT当事者を対象としたWEBアンケートを実施[4]。その結果から、パブリックトイレの利用に関してLGBT当事者が抱える困難やストレスが明らかとなりました。

調査結果を知っていただくために

本調査の目的は、パブリックトイレにおけるLGBT当事者の多様な「利用者ニーズとその課題」を明らかにすることでしたが、最終的には、その結果を反映し、誰もが安心して快適に利用できるパブリックトイレ空間を目指しています。まずはその第一歩として、分析結果を広く一般の方にも知っていただくための報告会を2016年4月4日に実施しました[5]。当日は、企業の人事担当者を始め研究者、トイレ計画に携わる方、そしてLGBT当事者にもご参加いただき、この課題に関する問題意識を共有することができました。

特有のストレスとは

職場や学校のトイレ利用でストレスを感じているトランスジェンダーは6割以上

回答者のうち、性同一性障害を含むトランスジェンダーの約65%が、職場や学校のトイレを利用する際に困難やストレスを感じていることが分かりました[6]。これは、非常に高い数値と言えます。LGBTの中でも特にトランスジェンダーは、性自認に反した戸籍上の性別トイレを利用せざるを得ない場合もあり、トイレ利用に困るケースが多いと考えられます。一方、トイレ利用に困ることが想像しにくいLGBでも、16.5%が困る・ストレスを感じると回答[6]。これは、性

NIJIIRO DIVERSITY
特定非営利活動法人
虹色ダイバーシティ

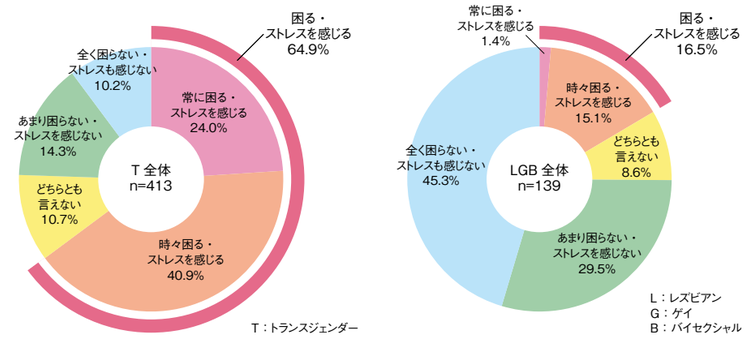
3　特定非営利活動法人虹色ダイバーシティ
LGBT等性的マイノリティがいきいきと働ける職場づくりをめざして、調査・講演活動、コンサルティング事業などを行っているNPO法人

調査方法：	インターネットによる調査
調査対象：	日本在住の10代以上のLGBT等性的マイノリティ当事者
配信方法：	虹色ダイバーシティからTwitter、Facebook、mixi、当事者団体のメーリングリストなどで周知(トイレメーカーから受ける先入観を排除するため、LIXIL名は伏せて実施)
総回答数：	624人
実施期間：	2015年11月24日(火)–12月24日(木)

4　調査概要

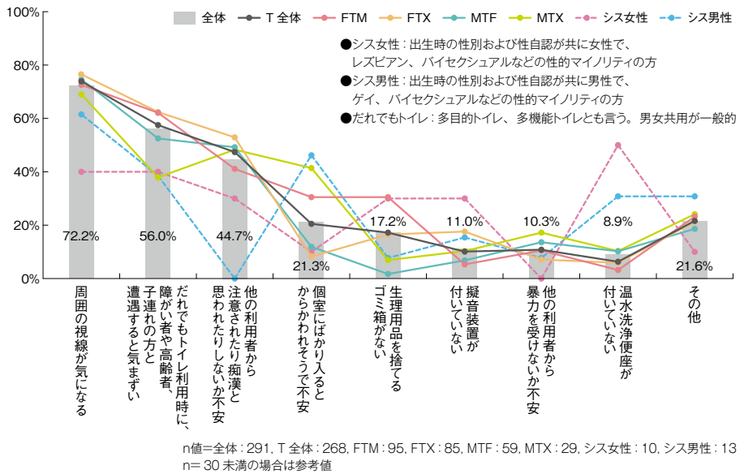
5　性的マイノリティのトイレ問題に関する調査結果報告会：上―熱心にメモを取りながら、真剣に耳を傾けるお客さまの様子(参加者：計41名)｜下―会場トイレの案内表示：当日は、会場のトイレを“性自認”に沿ってご利用いただけるよう、男女別トイレの出入り口に案内表示を貼付した

職場や学校のトイレ利用で困る・ストレスを感じることはありますか?



6　ストレスを感じている人の割合：性同一性障害を含むトランスジェンダーの約65%、LGBの16.5%が「困る・ストレスを感じる」と回答した

職場や学校のトイレ利用で困る・ストレスを感じる理由は?



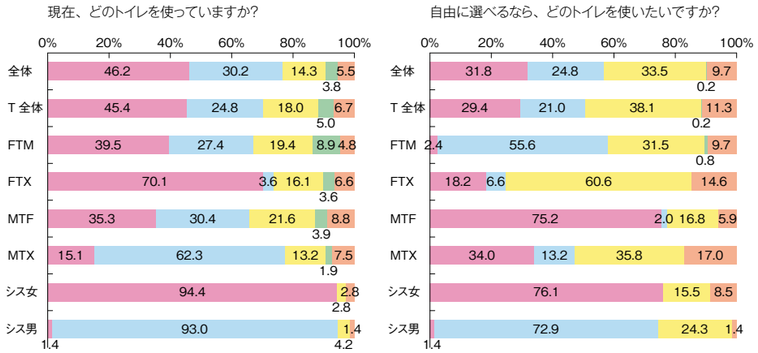
n値=全体：291、T全体：268、FTM：95、FTX：85、MTF：59、MTX：29、シス女性：10、シス男性：13
n=30未満の場合は参考値

7　ストレスを感じる理由：その他の声として、FTMから「男子トイレの個室が少ない」という声が多く寄せられた

凡例　女性用トイレ　男性用トイレ　だれでもトイレ　どれも使わない（我慢する）　その他（共用トイレなど）

●だれでもトイレ：多目的トイレ、多機能トイレとも言う。男女共用が一般的
●グラフの色分けは、分かりやすくするための便宜上のものです。型にはめる、多様性を無視するといった意図はありません

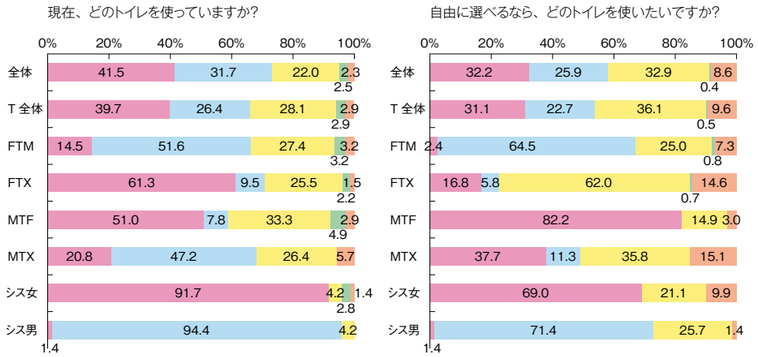
職場・学校でのトイレ利用――現実と希望は？



n値（現実）＝全体：559、T全体：416、FTM：124、FTX：137、MTF：102、MTX：53、シス女性：72、シス男性：71
n値（希望）＝全体：556、T全体：415、FTM：124、FTX：137、MTF：101、MTX：53、シス女性：71、シス男性：70

8　職場・学校でのトイレ利用――現実と希望：現実（左）と希望（右）に顕著な差異が見られた

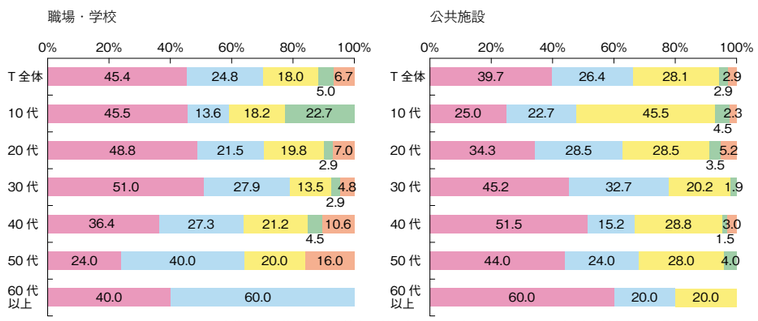
公共施設でのトイレ利用――現実と希望は？



n値（現実）＝全体：559、T全体：416、FTM：124、FTX：137、MTF：102、MTX：53、シス女性：72、シス男性：71
n値（希望）＝全体：556、T全体：415、FTM：124、FTX：137、MTF：101、MTX：53、シス女性：71、シス男性：70

9　公共施設でのトイレ利用――現実と希望：職場・学校に比べ、性自認に沿ったトイレを利用しているFTM・MTFは増えるが、全体的に男女共用のだれでもトイレのニーズはやはり高い

どのトイレを使っていますか？――トランスジェンダー年代別



出生時の身体の性別、性自認が混在しているため、男女別トイレ以外の割合をご参照ください
n値＝T全体：416、10代：44、20代：172、30代：104、40代：66、50代：25、60代以上：5
n=30未満の50代以上は参考値

10　トイレ利用――トランスジェンダー年代別：職場・学校で我慢する10代が2割以上と目立つ。また、10代の半数近くが公共施設で男女共用のだれでもトイレを利用していることが分かる

表現が戸籍上の性別と一致しないケースが考えられます。

ストレスの理由

ストレスの理由として最も多かったのが「周囲の視線が気になる」の72.2%、次に「だれでもトイレ利用時に、障がい者や高齢者、子連れの方と遭遇すると気まずい」が56%、さらに「他の利用者から注意されたり痴漢と思われたりしないか不安」が44.7%と続きました[7]（グラフは61頁）。実際に利用するトイレの性別表記と、性自認や性表現が一致しない場合や、“だれでもトイレ”を利用する場合に、周囲の目線が気になったり、気まずい思いをしたり、不安になったりすることが分かります。
そして、その後に続く「個室にばかり入るとからかわれそうで不安」、「生理用品を捨てるゴミ箱がない」は、出生時女性のトランスジェンダーが男性トイレを利用する際のストレスです。

トイレ利用の現実と希望

ニーズの高い“だれでもトイレ”

職場や学校、および公共施設において、実際に利用しているトイレと、自由に選べる場合に利用したいトイレを聞いたところ、いずれのケースも“だれでもトイレ”のニーズが高いことが分かりました。なお、最近だれでもトイレを男女別に設けるケースもありますが、LGBTのニーズにおいては“男女共用”であることが重要です。

●職場・学校の場合[8]

FTMの過半数が男性用トイレ、MTFの4人中3人が女性用トイレを希望、現状と比較すると性自認に沿った性別トイレを使えている人は、希望者の半数未満であることが分かります。また、MTF以外でだれでもトイレの希望率が現状の利用率より増加、特にFTXは現状利用の約3.7倍に相当する6割以上が希望しており、現実と希望の差異が浮き彫りとなりました。

●公共施設の場合[9]

性自認に沿った性別トイレを利用しているFTM・MTFは職場・学校より多く、共に過半数でした。これは、トイレを利用する人たちが知り合い同士か否かが大きく影響しており、知り合いに遭遇しにくい公共施設のトイレは性自認に沿って利用しやすいことが推測されます。しかし、ここでもトランスジェンダーの約3割がだれでもトイレを実際に利用、希望についてはやはりFTXが6割以上と突出しました。

どのトイレにも入れず、我慢してしまう人も

職場・学校のトイレでは、トランスジェンダーの5%が「どれも使わない（我慢する）」と回答しており、年代別に見ると10代が2割以上と目立ちます[10]。トランスジェンダー全体の4人に1人が膀胱炎などの排泄障がいを経験したとも回答しており、トイレ利用のストレスや日常的にトイレを我慢することが、深刻な健康上の問題につながっている可能性があります。

これからのパブリックトイレ

以上の結果より、性別を気にせず誰もが利用できる“だれでもトイレ”の重要性が見えてきました。しかし、“だれでもトイレ”は車いすユーザーや高齢者、お子さま連れが優先というイメージのため、「利用するのが気まずい」との声もあります。そこで、まずはLGBT、特にトランスジェンダーをその利用者として認知する必要があります。
しかし、一口に“だれでもトイレ”と言っても、建築用途により配慮の範囲が異なります。

職場・学校における“だれでもトイレ”

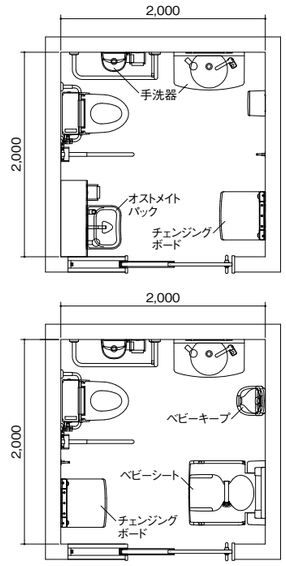
職場や学校では、高齢者やお子さま連れへの配慮よりも、主に車いすユーザーに配慮した“だれでもトイレ”が考えられます。この“だれでもトイレ”を建物内に1つ以上、可能であればフロアごとに設けることで、車いすユーザーだけでなく、LGBTのニーズにも応えることができます。ただし、当事者本人から「性自認に沿った性別トイレを利用したい」などの要望があった場合は、個別に配慮・対応することが大切です。

公共施設における“だれでもトイレ”

一方、公共施設では、より多様な利用者を想定した“だれでもトイレ”が求められます。しかし、多様なニーズを満たすが故に利用者が集中し、一般トイレを使うことのできない車いすユーザーが待たされてしまうことがあります。そこで、主に車いすユーザーに配慮した“車いす優先トイレ”を、“だれでもトイレ”と併設させることが考えられます[11]。“だれでもトイレ”については、従来どおり高齢者やお子さま連れなど多様な利用者への配慮が必要です。お子さま連れに配慮することで、男女別トイレに入りにくい異性のお子さまを連れた保護者の方（例えば女児を連れた父親や、トイレ利用に見守りが必要な知的障がい児を連れた保護者など）も利用しやすくなります。また、性別を気にせずに誰もが利用できるトイレとして、LGBTのニーズにも応えることができます。

おわりに

冒頭でも述べたように、パブリックトイレにおけるダイバーシティに対応するためには、多様なニーズに応える必要があります。しかし、すべてのニーズにハードだけで応えることは不可能であり、同時に周囲の理解など、ソフトも大切な要素です。これはLGBTに限ったことではなく、障がい者や高齢者、お子さま連れの方への配慮にも共通して言えることです。
4年後に東京2020オリンピック・パラリンピックを控え、今後ますます多様なニーズに対応する場面が増えることが予想されます。LIXILは、その多様なニーズに対応し、誰もが安心して快適に利用できるパブリックトイレ空間を目指した取り組みを継続してまいります。



11　“車いす優先トイレ”（上）と“だれでもトイレ”（下）の例、いずれも男女共用（縮尺＝1/60）：だれでもトイレには、「どなたでもご利用いただけます」などの表記をすることが望ましい

INFORMATION

「LIXILビジネス情報サイト」のご案内

http://www.biz-lixil.com/

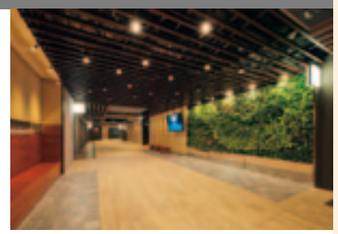
建築設備用BIMデータの提供を開始しました

LIXILのビジネスユーザー向けポータルサイト「LIXILビジネス情報サイト」のご案内です。
LIXILの豊富な商品について、ビジネスのお役に立つ情報をタイムリーに掲載しています。トップページの機能別メニューから、新商品情報、2次元・3次元CADデータ、商品画像データ、提案・見積書、取付・取扱・施工説明書などの各種データ提供や、カタログの閲覧・請求など、お探しの情報にスムースにアクセスしていただけます。
また2016年4月より、建築設備用BIMデータの提供を開始しました。データ形式は、Revit（オートデスク社）、Rebro（NYKシステムズ社）の2種類で、データを提供している商品は、トイレセット、洗面器セット、アクセサリーの一部です。今後、順次提供データを更新していく予定ですので、ぜひご活用ください。

施工事例 index

http://archiscape.lixil.co.jp/pickup/

大手門タワー・JXビル

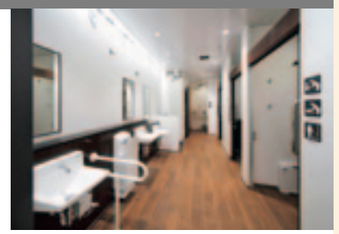


撮影：三輪晃久写真研究所

大手町タワー・JXビルは、新たな環境および社会課題を解決する拠点を目指した先進的なオフィスビルです。街区名の「大手町ホトリア」には、"お濠のほとりに豊かな空間を"という意味が込められ、地下商業ゾーン「ホトリア Shops & Restaurants」は明るい木目柄のタイルやクラフト感のあるタイルが目地を含めてデザインされており、訪れる人を温かく迎えます。

■建築概要■
所在地：東京都千代田区大手町1-1-2｜規模：地下5階、地上22階、塔屋2階｜構造：地上S造、地下SRC造｜工期：2013.2-2015.11｜設計：三菱地所設計｜施工：鹿島建設・NIPPO

JR佐賀駅



JR佐賀駅のトイレが、誰でも安心して使用できるユニバーサルデザインのシンボル的なトイレに生まれ変わりました。男性用・女性用のすべてのブースにベビーキープを設け、広めのブースにはベビーシートやチェンジングボードも備えています。子ども連れの利用に配慮した、快適なトイレ空間を実現しています。

■建築概要■
所在地：佐賀県佐賀市駅前中央1-11-10｜規模：地上1階｜構造：RC造｜工期：2015.11-12｜設計：JR九州コンサルタンツ｜施工：九鉄ビルト

野田病院

野田病院前の市バス停留所に、スチール製シェルターが採用されています。安定感のある柱と透明な屋根、ベンチや手すり、その背後には市バスのマスコットキャラクターを描いた透明な案内版を組み込み一体的にデザインされているのが特長です。シンプルでさりげない色調は植栽とマッチし、周囲の風景にも違和感なく溶け込んでいます。

■建築概要■
所在地：千葉県野田市中里1554-1｜施主：医療法人社団真療会

庭窪浄水場

大阪広域水道企業団が管理する庭窪浄水場は、守口市、門真市、東大阪市、八尾市に用水供給を行っています。ここで活躍しているのが、LIXILの門扉とフェンスです。シンプルで美しい門扉と、高尺で頑強、しかも圧迫感のないフェンスが広域な浄水場をガードし、大阪4市の"くらしの水"の安全を守っています。

■建築概要■
所在地：大阪府守口市大庭町2-30-18｜施主：大阪広域水道企業団

NEWS

LIXILからのご案内

LIXILの商品が国際的なデザイン賞である「レッドドット・デザイン賞 プロダクトデザイン2016」、「iFデザイン賞 2016」を受賞

タンクレストイレ「SATIS Gタイプ」が「レッドドット・デザイン賞 プロダクトデザイン2016」を受賞しました。「SATIS Gタイプ」は、トイレ空間の"汚れ"や"ニオイ"を防ぐ革新的技術を多数搭載しながら、余分なラインを極限まで排除し、"上品"かつ"ゆったり"のコンセプトを実現したLIXILの代表的なトイレです。その革新性と機能性、耐久性、環境対応などの観点が評価されました。
また、「加温自動水栓」が「iF（アイエフ）デザイン賞 2016」を受賞しました。「2015年度グッドデザイン賞」に続くダブル受賞です。「加温自動水栓」は、パブリックトイレやパウダースペースに手洗いの設置を想定した電気温水器・自動水栓セットです。手洗いに適した21-26℃への瞬間加温とLIXILの水栓技術のエコフル吐水を組み合わせることで、従来の電気温水器と水栓の組み合わせと比べて92%の"省エネ"と90%の"節水"を実現しました。

※「レッドドット・デザイン賞」とは、ドイツのノルトライン・ヴェストファーレン・デザインセンターが主催・選定を行う国際的なデザイン賞で、革新性、機能性、人間工学、耐久性、環境対応など9つの基準で審査されます。
※「iFデザイン賞」とは、ドイツのiFインターナショナル・フォーラム・デザインが主催・選定を行う国際的なデザイン賞で、造形や外観の美しさ、独創性・革新性はもとより、使いやすさや品質、安全性、環境への配慮など総合的に審査されます。

reddot design award winner 2016

左―タンクレストイレ「SATIS Gタイプ」
右―加温自動水栓

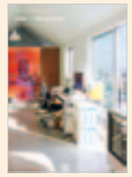
BOOKS

LIXIL出版 新刊案内

http://www1.lixil.co.jp/publish/

LIXIL BOOKLET
『文字の博覧会――旅して集めた"みんぱく"中西コレクション』
執筆：八杉佳穂、永原康史、浅葉克己ほか
定価：1,800円［税別、好評発売中］

『JUN AOKI COMPLETE WORKS ｜3｜ 2005-2014』
執筆：青木淳
写真：鈴木心、阿野太一
定価：3,600円［税別、好評発売中］



現代建築家コンセプト・シリーズ22
『島田陽｜日常の設計の日常』
執筆：島田陽
定価：1,800円［税別、好評発売中］

10+1 WEB SITE http://10plus1.jp/
建築・都市を巡るサイトです。建築写真アーカイブ、建築関連書籍、イベントの紹介、特集などを毎月更新しています。

GALLERY

ギャラリー＋イベント

http://www1.lixil.co.jp/culture/

LIXILギャラリー｜東京

巡回企画展

文字の博覧会――旅して集めた"みんぱく"中西コレクション展
会期：開催中、8月27日［土］まで
人類にとって最大の発明のひとつとされる文字。世界でも稀有な「文字ハンター」、故・中西亮さんのコレクションを中心に披露しながら、世界のさまざまな文字の魅力を紹介します。

「シリア文字 手書きの聖書16世紀」
［所蔵：国立民族学博物館｜写真：佐治康生］

建築・美術展

［クリエイションの未来展
――第8回隈研吾監修］
Advanced Design Studies,
The University of Tokyo.
新しい建築教育の現場
会期：開催中、8月22日［月］まで

「99 Failures」
［H4×9×7m ｜ステンレス｜ 2013年］

［クリエイションの未来展
――第9回清水敏男監修］
会期：9月8日［木］-11月22日［火］

［やきもの展］
滝口和男展――無題から
会期：開催中、6月28日［火］まで

竹中浩展
会期：7月1日［金］-9月8日［木］

白磁面取壺

LIXILギャラリー｜大阪

巡回企画展

水屋・水塚――水防の知恵と住まい展
会期：開催中、8月23日［火］まで
人々の知恵を活かした「河川伝統技術」による水防建築類10種を写真、模型で紹介します。

辻邸の水屋・水塚（岐阜県大垣市）
［写真：大西成明］

INAXライブミュージアム

土・水・火、ものづくりと生活文化をつなぐ企画展

**タイルの幾何学
――秩序と無限の模様展**
会期：開催中、8月31日［水］まで
会場：「世界のタイル博物館」企画展示室
入館料：共通入館料で企画展も観覧可
幾何学模様によって平面を埋め尽くすタイルならではの面白さを紐解くと共に、イスラームはもとより、スペイン、イギリスなどの幾何学模様のタイルを展示し、タイル1枚1枚の深い味わいと組み合わせることで生じる無限の装飾美をお楽しみいただきます。

展示風景

GALLERY INFORMATION

［LIXILギャラリー｜東京］
所在地：東京都中央区京橋3-6-18
東京建物京橋ビル LIXIL：GINZA 2階
Tel：03-5250-6530
開館時間：10：00-18：00
休館日：水曜日、8月10-17日

［LIXILギャラリー｜大阪］
所在地：大阪府大阪市北区大深町4-20
グランフロント大阪南館タワーA 12階
Tel：06-6733-1790
開館時間：10：00-17：00
休館日：水曜日（祝日は開館）、8月12-17日

［INAXライブミュージアム］
所在地：愛知県常滑市奥栄町1-130
Tel：0569-34-8282
開館時間：10：00-17：00
（入館は16：30まで）
休館日：第3水曜日（祝日の場合は翌日）
共通入館料：一般；600円、
高・大学生；400円、
小・中学生；200円

一九六三）という、江戸時代末期の蘭学医の令嬢の回想録を読んでいたら、江戸の人々がどのように歌舞伎を楽しんだかが書いてありました。彼女は築地に住んでいて、明日、浅草で歌舞伎があるという前夜は興奮して眠られず、夜中に起きてお化粧したり着物を選んだりするうちに夜が明けてしまって、いざ出発となると、街のみんなで船に乗って、浅草に繰り出すのだそうです。江戸のあちこちから着飾った人々を乗せた船団が浅草に集まってくる風景は、さぞや壮観だっただろうなと思います。歌舞伎の演目は一日がかりで、コアな女性ファンは舞台が変わる度に茶屋で衣装替えして、時には客席が舞台を圧倒するような華やかさにもなったそうです。著者曰く、当時は舞台も客席も一体で、物語の舞台が深い山に変わる時、「舞台背景だけでなく客席全体が深い山奥になった」と書いています。舞台と客席の一体感があったのだろうと想像します。また、劇場と街の一体感というのでしょうか、華やかな人々が船で集まってきて歌舞伎が始まるという、歌舞伎が箱の中の出来事である以上に、街の祝祭空間になっているように感じられて、江戸時代の街と歌舞伎の一体感が、素晴らしく感じました。

東京では今日、映画もオペラも楽しめますが、場所性とは無縁の独立プログラムというか、全国配信のテレビ放映のようなところがちょっとあります。ザルツブルグにしても小豆島にしても、劇場や音楽堂が街の中で今も生きているのは素晴らしいし、建築と地域の連続性も、うらやましく感じます。建築が、建築単体として存在するのではなくて、街とつながっていて、地域の価値観とつながっていて、人々の暮らしとつながっているように感じられるのです。

長谷川さんがおっしゃる第二の自然、「自然に人間が関わることで文化のレベルに高められている」というものを、長谷川さんはふだん国内や海外を回られていて、どのような実例をご覧になったのだろうか、などと考えながら、今回は思いつくままに書いてみました。第二の自然といえる建築の存在は、世界にはいくつもあるのでしょうか？

二〇一六年四月二一日

西沢立衛

にしざわ・りゅうえ――建築家・横浜国立大学大学院建築都市スクールY-GSA教授／1966年生まれ。1990年、横浜国立大学大学院修士課程修了、妹島和世建築設計事務所入所。1995年、妹島和世とSANAA設立。1997年、西沢立衛建築設計事務所設立。
主な作品：金沢21世紀美術館［2004］、森山邸［2005］※、ROLEXラーニングセンター［2009］、豊島美術館［2010］※、ルーヴル・ランス［2012］など（※以外はSANAA）。

西沢立衛様

民家はまさに長く持続する「第二の自然」と言えるものです。住宅設計を篠原一男先生の元で学ぼうと考え、改めて篠原先生の『住宅論』を読み、惹かれたのは「民家はきのこ」という言葉で、スカイハウスも菊竹さんから久留米の実家をベースにしていることをうかがっていたので、全国の民家や町家を一年かけて見歩くことからスタートすることにし、東北から沖縄まで旅しました。その時、地方では何をしても皆が集まるお祭りが年中の行事で、一番大切なお祭りに是非来るよう招待されたものです。民家は気象、材料、作り手、生活等のその土地に長く継承されてきた固有の条件でつくられ、それは菌が飛んで来てその土地のきのことなるように、素直に立ち上がっている現実を見歩きました。

西欧にあっても近代化以前、人間と自然の連続性、一体性はその世界観の根底にあったと思います。そうした現実は未開の他の隅に追いやられながらも、この人間は自然の一部であるというコンセプトを内包する生活観は今でも続いていると考えます。

ずっと続いている伝統芸能も地域の人たちが引き継いでいるということでは現代のものですが、時間の連続性においては民家と同じものでしょう。私が子供の頃には公共建築と言えば高齢者が集まる公民館くらいで、皆が集まる場所は神社の境内や原っぱ、浜辺です。そこでお茶会をしたり能を見たりしました。「浜行き」と言って、春一番にやってくる黒潮を確かめながら浜辺に着飾って集まり、ピクニックをしたりしました。

伝統芸はほとんど屋外で行われます。新潟市民芸術文化会館のコンペの時、新潟にはとてもたくさんの伝統芸があることを知り、なぜ公共はそうしたものを支援してゆかないのか疑問に思いました。コンペ内容は優れた音響のクラシック中心のコンサートホールやコンテンポラリーシアター、能シアターとプロが使用するもので構成され、市民が担う伝統芸能の活動を支援する場はつくられない。このことがとても理解出来ず、信濃川にあった緑のアーキペラゴのようなデザインをランドスケープに導入し、すべての島が伝統芸の場になるようにと設計をしました。上海でも密集地で市民によって演じられて来た伝統芸が高層ビルを建てると同時に消えて行った話を聞きました。

〝農村歌舞伎〟と言えば、南木曽の加子母（かしも）村で木造の迎賓館をつくった時、朽ちていた農村歌舞伎の建物をみつけ、復元する手伝いをしたことがありました。まち中の人が演じ、飾り付けサービスをし、お祭りのような農村歌舞伎を見ました。

ザルツブルグのサマー・アカデミーのワークショップに出かけると、少しまちの中のホテルより郊外の緑の多い場所で設備が充実している学生寮に泊まることが多いです。おいしいレストランがたくさんあって、よく出かけましたが、キッチンで日本食の肉じゃがや時にはお寿司をつくって生徒たちを招待したりして楽しく過ごしました。夕食の後はだいたい中心地に出かけてスプリッツァー（ソーダ＋ワイン）をよく飲みました。夜に大型の迫力のあるスクリーンがまちの広場につくられて大勢の人たちを集めていた。カラヤン指揮の迫力あるシンフォニーをホールで生のような音響で夜遅くまで聴いて過ごしたものでした。ザルツブルグのコンペに招待された際、カラヤンの泊まっていたというそれはすばらしい部屋に宿泊し、数日過ごしました。ロングイブニングドレスで海外の有名人に混ざって鑑賞した日もありました。この期間、アート・ファッション・工芸などのワークショップもあり、アート展もたくさん開かれ、私も展覧会をさせてもらいました。音楽、アート、ファッション、料理、美しい風景、ザルツブルグの夏は美しさと楽しさが満ち溢れています。ザルツブルグは年一回、この音楽フェスティバルの為に市民も生きているようなもので、モーツアルト誕生の地らしくクラシックを引き継ぎながら市民と観光客を含めまち全体が音楽祝祭空間になります。

きめ細かく見てゆけば「第二の自然」空間と言えるものと一緒に、世界中にこうした歴史を持続した祝祭空間がまだまだ残っているのではないでしょうか。

二〇一六年五月九日

浜行き『やきつべ（焼津市史）』より［提供：焼津市］

長谷川逸子

はせがわ・いつこ――建築家／菊竹清訓建築設計事務所勤務、東京工業大学篠原一男研究室を経て、1979年、長谷川逸子・建築計画工房設立、主宰。早稲田大学、東京工業大学、九州大学などの非常勤講師、米国ハーバード大学の客員教授などを務め、1997年、王立英国建築家協会名誉会員。2001年、ロンドン大学名誉学位。2006年、アメリカ建築家協会名誉会員。
主な作品：大島町絵本館［1994］、新潟市民芸術文化会館［1998］、珠洲市多目的ホール［2006］、ふじのくに千本松フォーラム［2013］など。

新・建築家の往復書簡 11

人間が関わって文化のレベルを高める「第二の自然」にどこで会われましたか？

長谷川逸子様

いよいよ春がやってきて、毎日が暖かく、今年の桜はとくに華やかだったように感じます。長谷川さんはいかがお過ごしでしょうか？

長谷川さんが何度か行かれたザルツブルグ・サマー・アカデミーは、僕もかつて一回だけ参加したことがあります。夏のザルツブルグ音楽祭の真最中で、その時は旧市街にしばらく滞在しました。ある日、街の広場にバリケードがめぐらされて、仮設の屋外劇場を作る工事が始まりました。観客席や舞台が立ち上がっていく建設風景は、まるで演劇が始まったかのようで、わくわくしました。建設が終わるといろんな機材がどんどん持ち込まれて、バナーが出て、リハーサルが始まり、本番だけでなく練習の風景も街にさらされて、街全体が祝祭空間となっていきました。街と劇場の一体感があって、それはたいへん印象的なものでした。

日本でも、街とホールの調和、街と演劇の一体感を感じたことはいくつかあります。ひとつは小豆島の農村歌舞伎で、それは、演者も観客もみな村の人々という歌舞伎座です。美しい棚田の只中に神社があって、その境内に幕を張って歌舞伎座になるという簡単なものですが、棚田の真ん中なので、境内全体が斜面になっていて、斜面の地べたにゴザを敷いて観劇します。一年に一回、村の人々が集まってきて、飲んだり食べたりしながら、一日中、歌舞伎を楽しんで、演者も観客もみんな村の人々なので、村祭りの延長のような風景です。舞台と客席に一体感があり、芝居小屋と棚田の連続も素晴らしく、人々の暮らしと文化に根差した演劇のありようが、印象的でした。

先日『名ごりの夢―蘭医桂川家に生れて』（今泉みね著、金子光晴解説［平凡社／

小豆島・肥土山（ひとやま）の農村歌舞伎

LIXIL
Link to Good Living
株式会社 LIXIL
XV2600 | 01 | 2016.6.20 発行